

岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第22集

骨寺村

骨寺村莊園遺跡確認調査
総括報告書

Honederamura Shoen Iseki

平成29年3月

一関市教育委員会

岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第22集

骨寺村

骨寺村莊園遺跡確認調査
総括報告書

Honederamura Shoen Iseki

平成29年3月

一関市教育委員会

序

一関市巖美町本寺地区は、中尊寺に残される『陸奥国骨寺村絵図』の現地として著名であり、「日本の原風景」ともいえる農村景観を今に伝えています。平安時代以来、中尊寺経蔵の荘園であったことが、中尊寺の古文書群や鎌倉幕府が編纂した歴史書『吾妻鏡』によって証明されています。平成17年には9つの区域が国史跡「骨寺村荘園遺跡」に指定されました。さらに、18年には「一関本寺の農村景観」として国の重要文化的景観に選定されています。当教育委員会は、11年度から発掘調査を継続して実施し、本寺地区が持つ文化財としての価値を明らかにしてきました。具体的には、『陸奥国骨寺村絵図』に描かれた内容と土地利用の変遷の痕跡が、どのような範囲や状況で存在するかを調査し、毎年度報告書を刊行してきました。

そのような中で、骨寺村荘園遺跡と深い関係にある「平泉」は、23年6月に世界文化遺産に登録されました。世界遺産への拡張登録を目指している「骨寺村荘園遺跡」については、24年度に世界遺産暫定一覧表に登載されています。

この度は、28年度までの重点調査に区切りをつけ、これまで実施してきた発掘調査を総括することにいたしました。年度ごとの調査で、明らかになった成果と課題を報告書にまとめ広く公開することで、市民ならびに全国の方々にも当市の文化財を知っていただき、関心が高まることを期待しています。また、今後の文化財保護やより良い地域づくりの一助になれば望外の喜びです。

最後に、調査に際しては地権者、地域住民の皆さまをはじめ多くの方々のご協力をいただきました。衷心より感謝を申し上げます。

平成29年3月

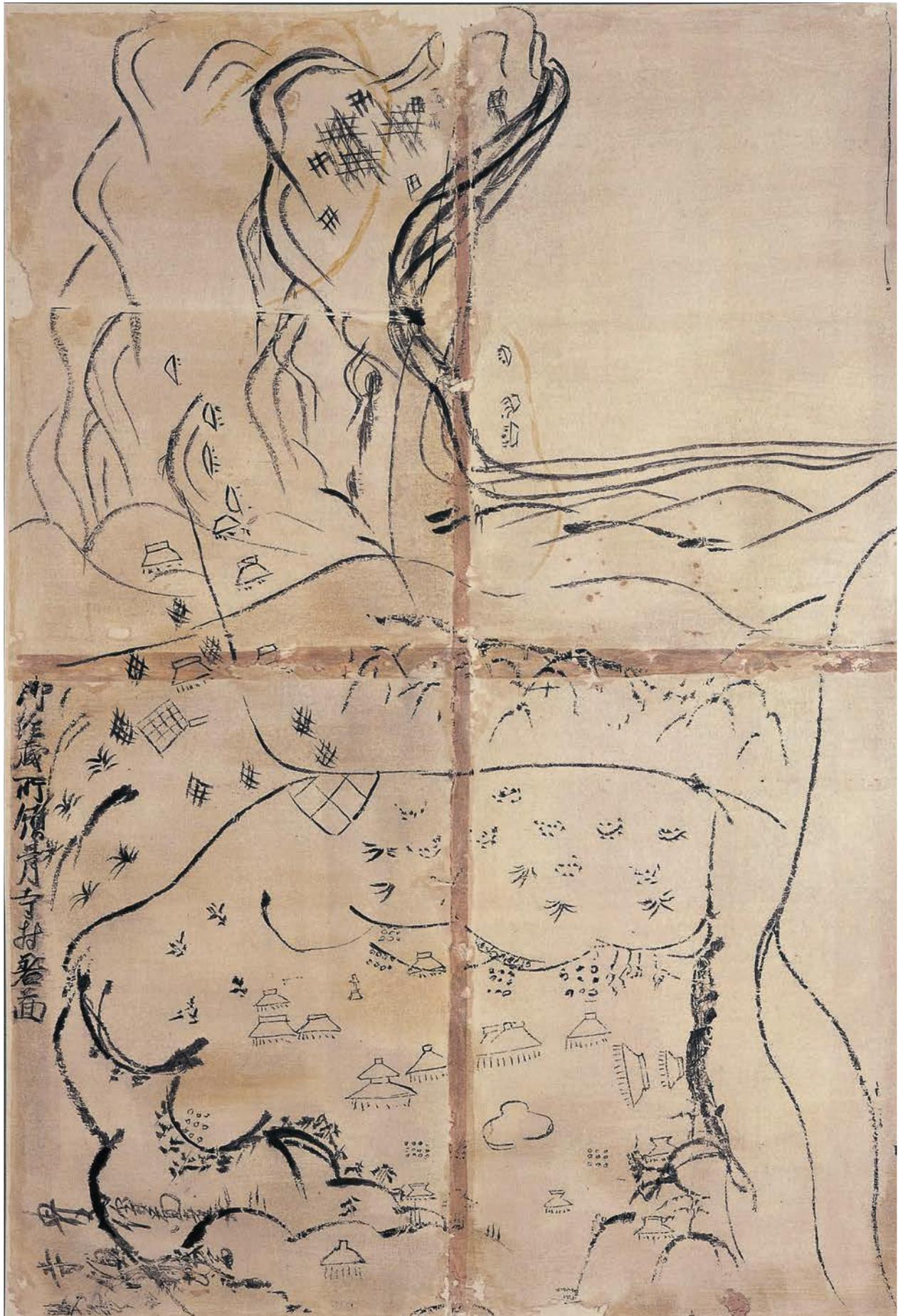
一関市教育委員会
教育長 小菅 正晴



国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』簡略図(複製) 原典は中尊寺蔵



国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』詳細図(複製) 原典は中尊寺蔵



国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』紙背図(複製) 原典は中尊寺蔵



若神子社と田植えを終えた水田



要害橋から望む夕暮れの須川岳

例 言

- 1 本書は、岩手県一関市教育委員会が平成 11～28 年度に実施した骨寺村荘園遺跡に係る調査報告を編集したものである。
- 2 実測図は、調査報告に使用されたものを用い、一部再トレースしている。複数回にわたり調査している地点は、最も新しい調査の成果に基づいている。
- 3 本書の作成は文化財課が行い、執筆は、菅原孝明、山川純一、二階堂里絵が担当した。担当箇所文末に執筆者名を付した。編集・校正は文化財課職員の協力を得て菅原孝明が行った。
- 4 地形図については、一関市教育委員会が平成 10 年度に作成、16 年度に部分追加した、骨寺村地形図(S=1 / 2,000) を使用した。
- 5 基準点は第 X 系（世界測地系）の公共座標の成果を用いている。
- 6 土層断面図の土色表示は新版標準土色帳 1997 年度版（日本色研事業株式会社）を用いている。
- 7 調査に係る三次元測量および国土座標取り付け業務は株式会社八州北東北支社に委託した。
- 8 現地調査および報告書作成にあたっては、一関市骨寺村荘園遺跡指導委員会および同世界遺産推進部会、岩手県教育委員会平泉遺跡群調査整備指導委員会の指導と助言を得ている。
- 9 引用した著書や論文については本文中で著者と発行年を示し、110 ページの参考文献に明記した。なお、本文中の記述は一関市教育委員会が発行した調査報告書を参考としているが、これについては 19 ページに報告者一覧表を示し、本文中では明記していない。
- 10 本書に掲載している表中「報告書」欄記載の「市埋報」は一関市埋蔵文化財発掘調査報告書、「骨寺」は「骨寺村荘園遺跡確認調査報告書」の略称である。

目次

001	序	097	Ⅲ 総括
003	カラー図版	097	1 縄文・弥生時代の遺物
007	例言	097	(1)縄文時代
008	目次	097	(2)弥生時代
009	I 遺跡の環境	101	2 古代・中世の遺物
009	1 地理的環境	101	(1)古代
009	(1)一関市の位置と環境	101	(2)中世
009	(2)骨寺村荘園遺跡の位置と環境	103	3 近世の遺物
010	2 歴史的環境	105	4 「陸奥国骨寺村絵図」と骨寺村荘園遺跡の照合
010	(1)中世の骨寺	105	はじめに
011	(2)近世の本寺（骨寺）	105	(1)山王窟
013	II 発掘調査の概要	105	(2)白山社及び駒形根神社、平泉野遺跡
013	1 これまでの取り組み	106	(3)梅木田遺跡
015	2 調査の経緯	106	(4)伝ミタケ堂跡
020	3 調査の成果	107	(5)遠西遺跡
020	(1)山王窟	107	(6)若神子社
031	(2)白山社及び駒形根神社、平泉野遺跡	107	(7)不動窟
050	(3)梅木田遺跡	108	(8)慈恵塚及び大師堂（拝殿）
060	(4)伝ミタケ堂跡	108	(9)その他の地点
063	(5)遠西遺跡	109	おわりに
067	(6)要害館跡	110	参考文献
069	(7)若神子社	111	抄録
073	(8)不動窟		
082	(9)慈恵塚及び大師堂（拝殿）		
090	(10)その他の地点		

I 遺跡の環境

1 地理的環境

(1) 一関市の位置と環境

一関市は、岩手県の南端に位置する。平成17年9月20日に一関市、花泉町、大東町、千厩町、東山町、室根村、川崎村の7市町村が合併、さらに23年9月26日に藤沢町と合併した。東西に約63km、南北に約46kmの広がりを見せる市の総面積は1,256.42km²である。

中央部を北上川が南流する市域は、西側に奥羽山脈、東側に北上山地がある緑豊かな農山村である。著名な記念物は、コニーデ型二重火山である栗駒山(須川岳)を中心とする火山性山岳風景地

(2) 骨寺村荘園遺跡の位置と環境

骨寺村荘園遺跡は須川岳を見上げる中山間地にある。遺跡のある巖美町本寺地区は、中尊寺に残される『陸奥国骨寺村絵図』の現地として、中世以来の農村景観を良好に継承した地域で、須川岳から流れ出る磐井川の左岸に形成された小盆地に集落が点在する。平地部分の平均海拔高は約160m、南側を磐井川に接し、三方は海拔230～260mの丘陵に囲まれている。

骨寺村荘園遺跡を取り巻く自然環境については、骨寺村荘園遺跡村落調査研究の一環である自然班(総括: 広田純一(岩手大学教授))による一連の研究成果がある。地形・地質を担当した土井宣夫によると、磐井川に沿う地形の特徴は、須川岳北斜面から北上川へ合流する間に、いくつもの狭窄地による数珠状の小盆地が形成されている点にある。磐井川の流域には硬質の巖美層が広がる。この層は褶曲により磐井川の下底と河岸に交互に出現するため、下底(縦方向)と河岸(横方向)への侵食速度に差異が生じて、数珠状の小盆地が形成されたとしている。また、巖美層が交互に出現する理由は、断層活動により巖美層に褶曲が生

じているためであるという(土井2012)。このようにして形成された小盆地の一つに骨寺村荘園遺跡は所在する。

現在の植生について、気候と植物・植生を担当した島田直明は、北側丘陵部にはコナラやクリの広葉樹が広がり、斜面下部には植林によるスギ林、上部の尾根にはアカマツやゴヨウマツ林が分布するとしている。一部にはブナ林も確認できたという。植物相からは日本海型要素と太平洋・温暖帯要素の両方のタイプが見られ、岩手県内陸部の中山間地としての地勢を反映している(島田2012)。それと関連して、磐井川左岸の旧河道地を対象に花粉分析を行った平塚明らは、915年に降下した十和田a火山灰の上層からイネ花粉が急増することを指摘しており、この時期に水田に生息する水生植物(オモダカ・サジオモダカ属)の増加から、本格的な稲作が始まったことを想定している。同時期にクリの花粉、アサヤソバの花粉も増加している。また堆積速度から14世紀以降にはスギやマツ林の拡大が推定されている(平塚他2012)。ただし、十和田a火山灰の降下以降に上記

の傾向が認められるとしても、土層堆積が継続的かつ安定的であったかどうかを検討課題となる。年代についても、やはり発掘成果との突合が不可

2 歴史的環境

(1) 中世の骨寺

中尊寺文書 骨寺村の中尊寺荘園としての始まりを示す文書は、『中尊寺文書』の一つ「中尊寺経蔵別当補任状案」である。そこには自在房蓮光じざいぼうれんこうという僧侶が、紺紙金銀字交書一切経こんしきんぎんじこうしよいつさいきょうを奉行し、8年をかけて完成させたこと、その功により蓮光は中尊寺経蔵別当に就任したこと、そして蓮光の「往古私領」であった「骨寺」を経蔵に寄進し、永代にわたって経蔵別当領としたことが記されている。日付は天治三年(1126)三月二十五日、発給者は清衡である。

『中尊寺文書』には、骨寺村の伝領に関する讓状・補任状・安堵状が多数あり、室町時代まで経蔵別当領として相伝されていることが確認できる。その他、村の内部構造に関する文書として、「骨寺村所出物日記」(文保2年(1318)3月)や「骨寺村在家日記」(室町時代か)があり、貢納者と品目が書き出されている。

吾妻鏡 文治五年(1189)の奥州合戦で奥州藤原氏が滅亡し、中尊寺は庇護者を失うこととなった。『吾妻鏡』文治五年九月十日条には、中尊寺経蔵別当心蓮しんれんが所領の安堵を求め、源頼朝の宿所に参上したことが記されている。

心蓮は頼朝に対し、「中尊寺は清衡が建立したこと」「鳥羽院の御願所となったこと」「蓮光から寺領の寄付を受け、それを御祈禱料に充当していること」「経蔵は紺紙金銀字交書一切経を納めている霊場であること」を述べている。

その上で、中尊寺の存続と、合戦で住民が逃げ

欠である。

(一関市教育委員会2015『骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』「1. 位置と環境」を引用)

出した寺領の安堵を求めている。これに対し頼朝は、経蔵別当領の一つ骨寺村の四至(村境)を定め、その上で、諸役免除の文書を下した。定められた四至は、東は鑑懸かぎかけ、西は山王窟、南は磐井川、北は峯山堂馬坂みたけどうましかである。

陸奥国骨寺村絵図 中尊寺大長寿院には2枚の絵図が残されている。簡略絵図(仏神絵図)と呼ばれるもの(カラー図版1)、詳細絵図(在家絵図)と呼ばれるもの(カラー図版2)である。また、詳細絵図の裏にも絵図があり、紙背絵図(カラー図版3)と呼ばれている。簡略絵図と詳細絵図は西を天(上)に、山稜部に囲まれた村落景観が描かれている。絵図の描写範囲は、『吾妻鏡』文治五年九月十日条に記された村の四至とほぼ同じである。つまり、頼朝によって定められた村の範囲が描かれている。

紙背絵図は、詳細絵図の裏側に描かれたもので、絵図の他に「骨寺絵図案」「寺領□□境論」「具書」等の文字も確認されている。

これら絵図の作成目的は、中尊寺による村支配のための資料とする説(伊藤1957・吉田2008)と裁判の証拠書類説(大石1984)が示されてきたが、紙背絵図と文字が発見されたことにより(黒田1995)、所領争いの裁判書類であることが有力となった。そしてその作成時期は簡略絵図が鎌倉時代中期、詳細絵図が鎌倉時代後期にそれぞれ作成されたと推定されている。

(2) 近世の本寺(骨寺)

磐井郡西岩井村絵図(元禄十二年(1699)) 磐井郡のうち西岩井24カ村を描いたもので、そのうち五串村の中に「本寺」という文字が見える。これはもとの骨寺村であり、この時すでに「骨寺」は「本寺」と呼ばれるようになっていたことがわかる。

平泉雑記(安永二年(1773)) 平泉に関する文献の調査・掲載と考証、現地踏査や伝承を収録したもので、骨寺村は「骨寺」の項で紹介されている。「本寺」の地に骨寺という寺があったが今はなく、「骨」が「本」に変わった時期は不明、としている。

風土記御用書出(安永四年(1775)) 仙台藩が領内の各村に提出させた書出である。その一つである五串村分の書出に、本寺は「端郷本寺」として

記載され、名所や旧跡等がその由来と共に細かく書き出されている。その中には『陸奥国骨寺村絵図』や『中尊寺文書』の「骨寺村在家日記」にある「六所明神、小名 若神子」、「山王社、小名 山王山」、「不動窟、小名 真坂」の別当が中尊寺の北本坊、西谷坊、小前沢坊であるとしている。西谷坊は経蔵別当職を世襲する大長寿院である。また、中尊寺の書出である「関山風土記」には、慈恵塚が中尊寺一山の惣持である(保持されている)ことが記されている。これらの記載から、本寺(骨寺)が中尊寺の荘園でなくなった後も、形を変えて関わりが続いていることがわかる。

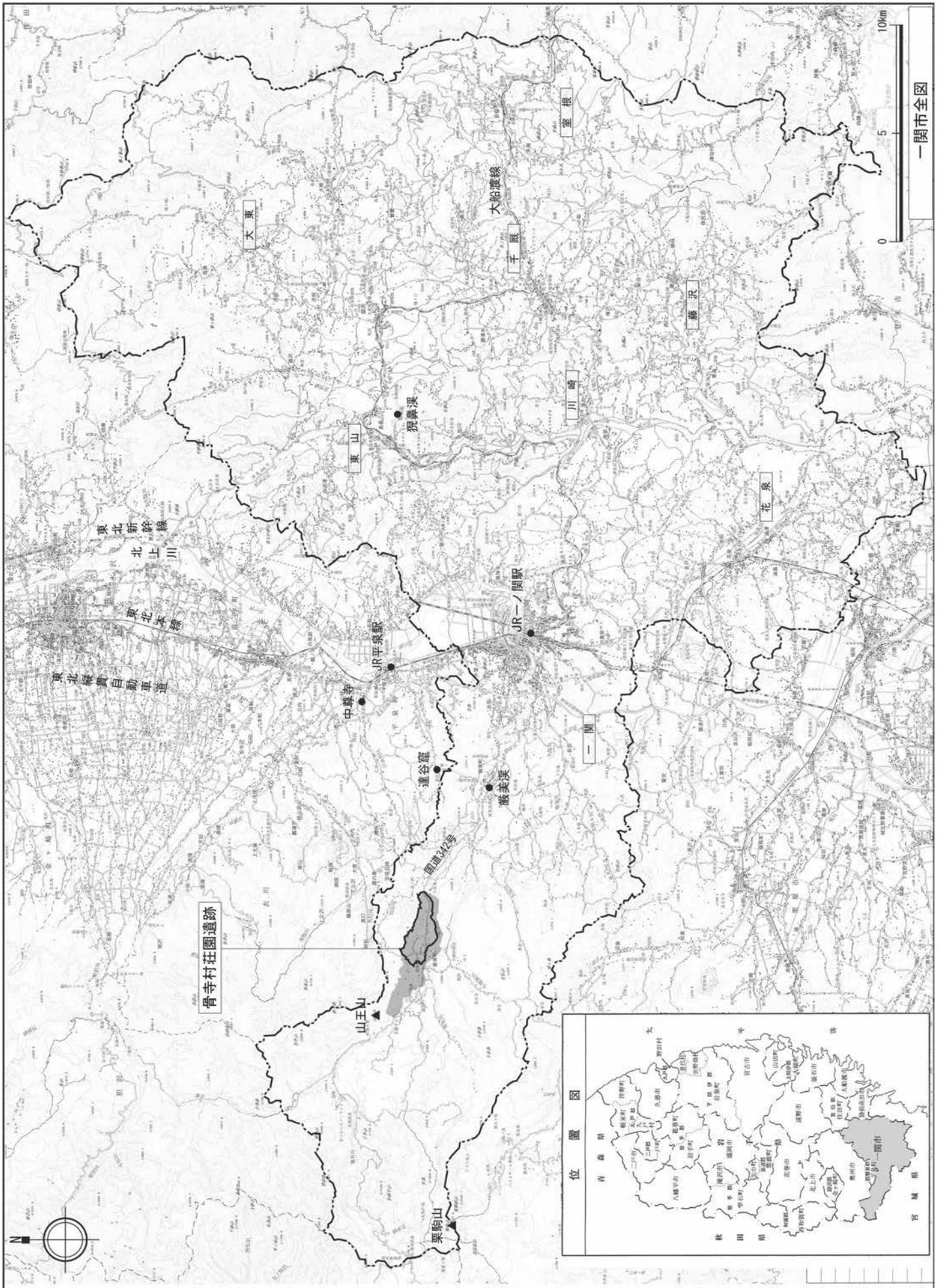


図1 骨寺村荘園遺跡位置図

II 発掘調査の概要

1 これまでの取り組み

平成5年2月	本寺地区全住民を会員とする美しい本寺推進本部発足、伝骨寺跡を調査
平成7年4月	『陸奥国骨寺村絵図』が国指定重要文化財となる
平成7年度	陸奥国骨寺村調査委員会(委員長、東北学院大学教授大石直正氏)発足、歴史地理・民俗、地方文書、石造物の調査部会
平成8年～10年度	骨寺村荘園総合調査 一関市教育委員会が主体の調査開始、1/2000ベースマップ作成
平成11年度	中屋敷遺跡確認調査、総柱の掘立柱建物確認、用途不明の金属製品出土
平成12年度	梅木田遺跡確認調査、掘立柱建物確認 中世骨寺村荘園遺跡整備委員会、圃場整備と遺跡保存について調整を検討
平成13年度	遠西遺跡確認調査、掘立柱建物確認、かわらけ片、常滑三筋壺片出土 中世骨寺村荘園遺跡整備委員会、整備と保存の方向について答申、「骨寺村荘園遺跡」の景観保全型の整備を提案、史跡と営農の調和を図り、文化財を活かした地域づくりの方向性を示す
平成14年度	遠西遺跡確認調査、掘立柱建物確認
平成15年度	荘園遺跡属性確認調査
平成15年6月	骨寺村荘園遺跡が「平泉の文化遺産」の資産に追加
平成15年8月	骨寺村荘園遺跡調査整備指導委員会が設置される
平成16年3月	本寺地区地域づくり推進協議会発足、景観保全・活用、世界遺産登録に向け、集落営農、圃場整備等の課題に取り組む
平成16年度	若神子社周辺の確認調査
平成17年3月2日	骨寺村荘園遺跡の国史跡指定が告示される 文部科学省告示第22号 (山王窟、白山社及び駒形根神社、梅木田遺跡、伝ミタケ堂跡、遠西遺跡、要害館跡、若神子社、不動窟、慈恵塚及び大師堂(拝殿))
平成17年度	平泉野遺跡確認調査、縄文時代の石器出土
平成18年度	駒形根神社境内確認調査、字若神子東端の確認調査
平成18年7月28日	本寺地区の平野部を中心とした約337.5haが重要文化的景観に選定 文部科学省告示第121号
平成18年9月14日	政府が「平泉の文化遺産」を世界文化遺産へ推薦することを決定、世界遺産条約関係省庁連絡会議
平成18年12月26日	「平泉の文化遺産」の名称を「平泉－浄土世界を基調とする文化的景観」として世界文化遺産登録推薦書をユネスコ世界遺産センターに提出
平成19年度	駒形151-1、153-1確認調査、縄文土器片、石器等出土
平成19年8月26～30日	イコモス現地調査
平成20年5月	イコモス「登録延期」勧告
平成20年6月14日	岩手宮城内陸地震(マグニチュード7.2)発生、震源地は本寺地区の西方約3km
平成20年7月	世界遺産委員会で「平泉－浄土世界を基調とする文化的景観」の登録延期が決定
平成21年度	平泉野遺跡(若井原188地点ほか)確認調査、縄文土器、石器剥片、陥穴、9世紀代の土師器と須恵器が出土

平成21年4月4日	国際専門家会議、推薦書作成委員会において平成23年世界遺産登録をめざす資産の絞り込みが提案され、平成23年の世界遺産登録後の対応資産として、骨寺村荘園遺跡、長者ヶ原廃寺跡、白鳥館遺跡、達谷窟の4資産が調査の進展により段階的に拡張登録を目指す方針を確認
平成22年1月	「平泉の文化遺産」の名称を「平泉—仏国土(浄土)を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」として世界文化遺産登録推薦書をユネスコ世界遺産センターに提出
平成22年度	慈恵塚現状確認調査、精査及び三次元測量の実施、近世地誌類と出土遺物、石造物整理から慈恵大師伝承と古塚が結びついたのは近世後期と推定 平泉野遺跡(若井原194-1地点)確認調査、縄文時代の焚火跡を確認
平成22年9月8,9日	イコモス現地調査 調査員 ワン・リジュン氏(中国イコモス国内委員)
平成23年3月11日	14時46分頃 マグニチュード9.0の巨大地震発生(震災名:東日本大震災)
平成23年度	不動窟確認調査、精査及び三次元測量の実施、貫痕と燈明台の痕跡を確認 白山社及び駒形根神社確認調査、縄文時代の陥穴を確認
平成23年5月	イコモス「登録」勧告
平成23年6月29日	世界遺産委員会で「平泉—仏国土(浄土)を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」の登録が決定 但し、柳之御所遺跡を除く
平成23年11月14日	第1回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成24年3月22日	第2回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成24年度	白山社及び駒形根神社確認調査、縄文時代の陥穴を確認 伝ミタケ堂確認調査、自然決壊による崩落岩盤確認 不動窟確認調査、基盤層とみられる自然堆積層確認
平成24年5月18日	第3回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成24年9月25日	骨寺村荘園遺跡を含む「平泉—仏国土(浄土)を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群(拡張)」が世界文化遺産暫定一覧表に記載
平成24年10月26日	「平泉の文化遺産」の拡張登録に向けた関係者(県教育長、二市一町首長)会議 開催 拡張登録に係る方針と調査計画を合意
平成25年1月30日	第4回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成25年度	伝ミタケ堂跡確認調査、遺構・遺物ともに発見されず 不動窟確認調査、窟前面に3基の柱穴を確認 白山社及び駒形根神社(中川6地点)確認調査、土地造成と掘立柱建物を確認 梅木田遺跡確認調査、13世紀とみられる龍泉窯系青磁鎚蓮弁文碗片出土
平成25年11月22,23日	平成25年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 開催
平成26年1月7日	第5回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成26年度	白山社及び駒形根神社(中川4,6地点)確認調査、中川4地点の塚の自然科学分析を実施 梅木田遺跡確認調査、近世中後期の遺構変遷を推定
平成26年11月29,30日	平成26年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 開催
平成27年1月6日	第6回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成27年1月26日	本寺地区の一部約6.7haが重要文化的景観に追加選定 文部科学省告示第6号
平成27年度	白山社及び駒形根神社(中川6地点)確認調査、平場の造成時期を17世紀以降と結論付け 梅木田遺跡確認調査、17世紀以降の掘立柱建物を確認 平泉野遺跡(若井原194-115地点)確認調査、17世紀以降の段切り造成区画を確認
平成27年11月14,15日	平成27年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 開催

平成28年1月5日	第7回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成28年度	梅木田遺跡確認調査 白山社及び駒形根神社(駒形5、若井原194-1地点)確認調査 平泉野遺跡(中川9、若井原194-115地点)確認調査 山王窟三次元測量
平成28年8月4日～6日	平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員と海外専門家との意見交換会 開催 (第8回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会と位置付け)
平成28年10月3日	第9回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成28年12月3,4日	平成28年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 開催
平成29年1月12日	第10回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催

2 調査の経緯

中尊寺には、鎌倉時代に描かれたとされる2枚の荘園絵図が残されている。それらは『陸奥国骨寺村絵図』と呼ばれ、具体的には家屋、田圃、川や道が詳しく描かれる詳細絵図と、村を取り巻く山々が力強く描かれる簡略絵図の2枚である。

絵図は中尊寺経蔵別当領であった骨寺村を描いたもので、この絵図を元に、在家の研究、絵図の研究、現地の踏査などが研究者によって進められてきた。また絵図に描かれた現地である一関市本寺地区では、美しい本寺推進本部が発足し、地元の人々による調査も進められた。平成7年(1995)に『中尊寺文書』と『陸奥国骨寺村絵図』が重要文化財に指定され、陸奥国骨寺村調査委員会が発足したことで、調査研究の動きは活発となった。そうした中で、平成11年度から、本市教育委員会による発掘調査が進められてきたのである。

さらに、15年(2003)には骨寺村荘園遺跡が世界文化遺産の資産に追加され、世界遺産登録を目指すこととなった。これは、行政と地元が一体となった動きとなった。行政側では、17年(2005)に「骨寺村荘園遺跡」が国指定史跡となり、18年(2006)には「一関本寺の農村景観」が国選定重要文化的景観となったことで、国による資産の保護が行われることとなり、世界遺産登録に向けた準備が進められた。また地元では16年(2004)に本寺地区地域づくり推進協

議会を発足させ、景観保全・活用、世界遺産登録に向け、集落営農、圃場整備等の課題に取り組むこととなった。

20年(2008)の世界遺産委員会で、「平泉-浄土思想を基調とする文化的景観」は登録延期となった。21年(2009)に資産の絞り込みが行われ、骨寺村荘園遺跡は世界遺産拡張登録を目指すこととなった。23年(2011)に「平泉-仏国土(浄土)を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群-」という名称で世界文化遺産に登録された。

こうした状況を受けて、本市教育委員会では7カ年の調査計画を立て、変更となったコンセプトに合わせ、絵図に描かれた宗教施設に関係した発掘調査を進めた。また24年(2012)に、拡張登録に向けて岩手県と関係市町によって5カ年の調査計画に合意した。重点的に発掘調査を進め、推薦書案の作成に活かすこととなったのである。

28年度は、本市教育委員会の7カ年計画を総括する年度であり、また県と関係市町で合意した5カ年計画の4年目にあたる。これまで本市教育委員会が実施してきた発掘調査を総括し、また世界遺産拡張登録の推薦書案作成に活かすために、本報告書を作成した。

(菅原)

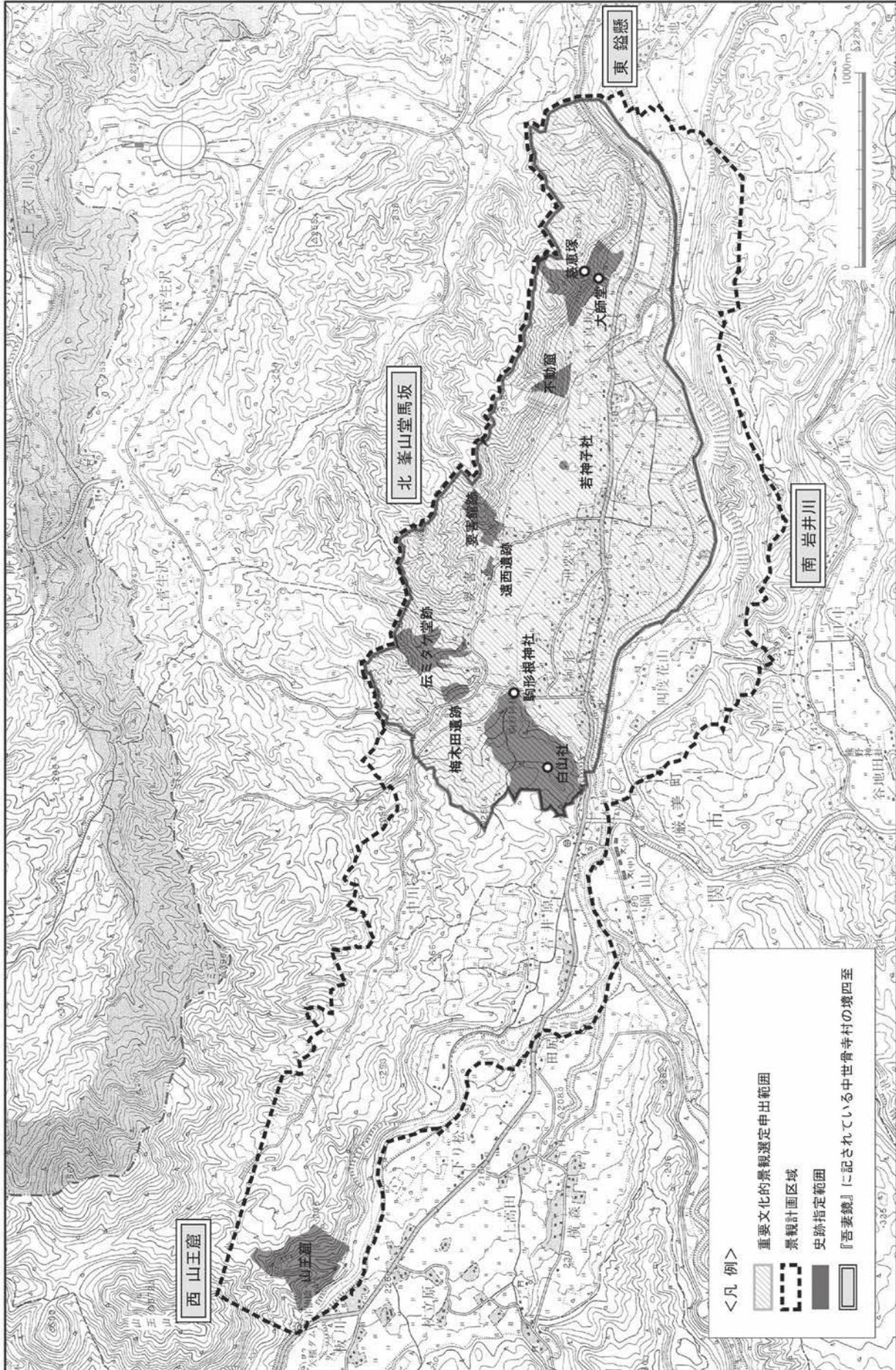


図2 史跡骨寺村荘園遺跡指定範囲図

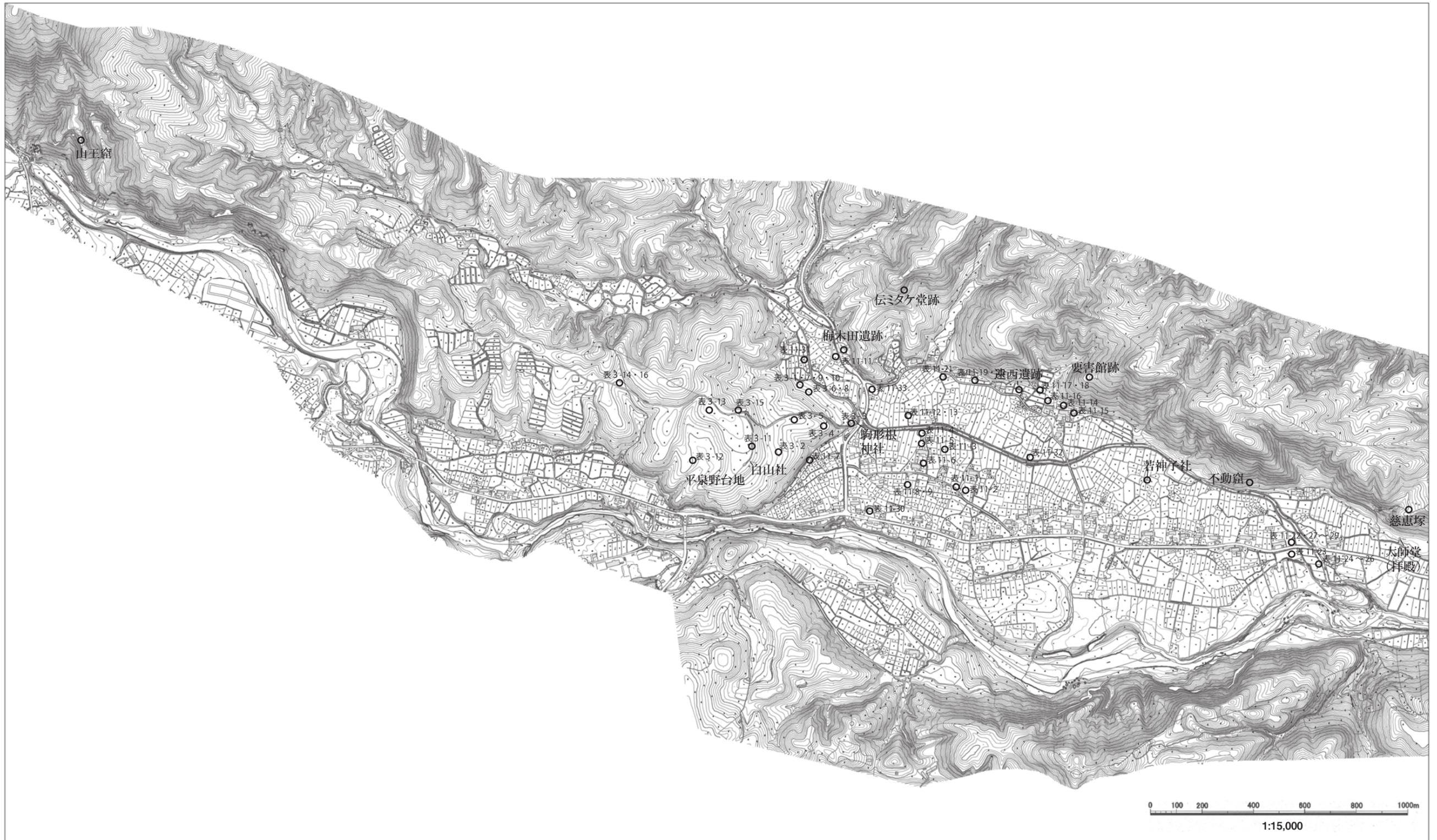


図3 骨寺村荘園遺跡における既調査地点

表1 骨寺村莊園遺跡調査報告書一覧表

	報告書名	発行者	発行年	収録内容(調査遺跡)
1	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第1集 骨寺村莊園遺跡確認調査報告書	一関市教育委員会	平成12年 (2000)	中屋敷遺跡
2	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 骨寺村莊園遺跡確認調査報告書	一関市教育委員会	平成13年 (2001)	梅木田遺跡
3	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第3集 骨寺村莊園遺跡確認調査報告書	一関市教育委員会	平成14年 (2002)	中屋敷遺跡、梅木田遺跡、遠西遺跡
4	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第4集 骨寺村莊園遺跡確認調査報告書	一関市教育委員会	平成15年 (2003)	遠西遺跡
5	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第5集 骨寺村莊園遺跡確認調査報告書 附図/本寺地区地形図	一関市教育委員会	平成16年 (2004)	山王窟、白山社及び駒形根神社、梅木田遺跡、伝ミタケ堂跡、遠西遺跡、要害館跡、若神子社、不動窟、慈恵塚及び大師堂、平泉野遺跡、中屋敷遺跡、骨寺村莊園遺跡
6	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第6集 骨寺村莊園遺跡確認調査報告書	一関市教育委員会	平成17年 (2005)	若神子社
7	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第1集 骨寺村莊園遺跡確認調査報告書(第7集)	一関市教育委員会	平成18年 (2006)	平泉野遺跡
8	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 骨寺村莊園遺跡確認調査報告書(第8集)	一関市教育委員会	平成19年 (2007)	平泉野遺跡
9	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第9集 骨寺村莊園遺跡確認調査報告書	一関市教育委員会	平成20年 (2008)	骨寺村莊園遺跡
10	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第7集 骨寺村莊園遺跡確認調査報告書(第10集)	一関市教育委員会	平成21年 (2009)	骨寺村莊園遺跡
11	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第8集 骨寺村莊園関連遺跡確認調査報告書	一関市教育委員会	平成22年 (2010)	平泉野遺跡
12	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第13集 骨寺村莊園遺跡確認調査報告書	一関市教育委員会	平成23年 (2011)	慈恵塚及び大師堂、平泉野遺跡
13	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第16集 骨寺村莊園遺跡確認調査報告書	一関市教育委員会	平成24年 (2012)	白山社及び駒形根神社、不動窟
14	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第17集 骨寺村莊園遺跡確認調査報告書	一関市教育委員会	平成25年 (2013)	白山社及び駒形根神社、梅木田遺跡、伝ミタケ堂跡、不動窟
15	骨寺村莊園遺跡発掘調査報告書	岩手県南広域振興局農政部一関農村整備センター	平成25年 (2013)	骨寺村莊園遺跡
16	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第18集 骨寺村莊園遺跡確認調査報告書	一関市教育委員会	平成26年 (2014)	白山社及び駒形根神社、梅木田遺跡、伝ミタケ堂跡、不動窟
17	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第19集 骨寺村莊園遺跡確認調査報告書	一関市教育委員会	平成27年 (2015)	白山社及び駒形根神社、梅木田遺跡
18	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第20集 骨寺村莊園遺跡確認調査報告書	一関市教育委員会	平成28年 (2016)	白山社及び駒形根神社、梅木田遺跡、平泉野遺跡
19	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第21集 骨寺村莊園遺跡確認調査報告書	一関市教育委員会	平成29年 (2017)	白山社及び駒形根神社、梅木田遺跡、山王窟、平泉野遺跡

3 調査の成果

(1) 山王窟

本寺の平野部の西端から約3.5km西北西、磐井川左岸に高さ570m程の山王山がある。この山の南南東に張り出した岩壁の標高300m程の所に南西に開口した洞窟があり、山王窟と伝えられ、また日吉神社として信仰されている。(図2・3)。

山王窟は、『吾妻鏡』文治五年(1189)九月十日条にある、源頼朝により定められた骨寺村の四至で西の境界である。『陸奥国骨寺村絵図』の詳細絵図では「山王石屋」、簡略絵図では「山王」と記され、いずれも正面(西)の「駒形根」の手前に重なる山稜の一部に描かれている。

山王窟(石屋)と山王山について、『風土記御用書出』(安永四年(1775))には、次のように記されている。

端郷本寺一郷鎮守

一山王社

一小名 山王山

一勸請 人皇五十四代仁明天皇御宇嘉祥三年
慈覚大師の御勸請にて其後鎮守府將軍藤
原清衡公御造営に御座候往古は大社に御
座候儀と相聞得巖宮大明神又は麗美宮と
も申唱当村名の根元にて一村鎮守に御座
候間委細申上候事

一社地 南向

一社 岩穴高七尺幅三間深さ三間有之候内
へ勸請仕置候に付社地並に社作御書上不仕
候事

一鳥居 一長床 一額

一地主 当御村空地に付地主無之候

一別当 同郡中尊寺衆徒西谷坊

一祭日 四月中の申

端郷本寺

一山王山 高六丁余

(中略)

東は当郡村々並東山室根山遠田郡篁嶽辺其外
遠山相見得候得共夫々の銘義申上候事

西は須川嶽大日山迄

南は栗原郡畑岡村畑岡沼並同郡文字村樋ヶ森
黒川郡七ッ森薬喰山辺迄

北は江刺郡気仙郡並南部御領稗貫郡早池峯山
其外諸山迄

性格は、その名称から「日吉山王権現」を祀った窟と考えられ、この神が比叡山延暦寺の地主神であることから、天台宗との深い関わりを想定できる。大石直正氏は「この窟が若神子社の奥の院で、納骨の場としての役割を持っており、若神子一骨寺一山王窟を結ぶ信仰ラインを土俗的なあの世とこの世を結ぶもので、それが天台・山王信仰に取り入れられていった」としている(大石1997)。菅野成寛氏は「中尊寺経蔵別当領となる以前から窟を神聖視する信仰が骨寺村にあり、12世紀には納経が行われた可能性が高い」(菅野2009)としている。また佐藤弘夫氏は「慈覚大師を祀る場所であった」(佐藤2008)としている。

山王窟の発掘調査は行っていないため、構築年代は不明である。また、窟内部に古代から中世の年代を示す遺物は残存していない。

しかし、『吾妻鏡』で四至の西の境界とされていること、詳細絵図にある「山王石屋」の位置、『風土記御用書出』(安永四年(1775))の記載からみて、この窟が「山王窟(石屋)」であることは疑いがないであろう。山王社の別当は、昭和40年代に売却されるまで、中尊寺の西谷坊である大長寿院であり、この地で定期的に護摩焚を行っていたという。

日吉神社が祀ってある窟1は標高302m、X=112,420m、Y=7,020m付近にある(図4~6、8)。入口前面の岩盤はテラス状になっていて、入口天井部より約1.3mほど張り出している(写真

2)。入口は、幅4.2m、高さ2.6m、奥行き約5.5m程で、奥に進むほど低く、狭くなる。入り口から窟に向かって奥に1.0m程行った左側の内壁は、高さ約0.8mの段が内側にほぼ直角に0.6m張り出して、奥に続く。最奥部は幅1.0m、高さ1.0mの段になっており、これを利用した祭壇には一躯の石仏が安置され、前面に木製の扉が設置されている(写真3)。この段は右側の内壁には続かない。

この窟の北西上方、標高308m程の所に窟2がある。入口は、幅約1.3m、高さ2.0m、奥行き約1.8m程の小規模な窟である(図4～7、写真4)。内部には石碑1基が寝かされた状態であり(写真5)、寛政十三庚申年(1801)の年号と「卯月吉日

大工 甚之允 小工 卯作 挽匠 七右衛門」「奉再造鎮守山王御宮一字」「別當中尊寺大長壽院蓮海」「施主 万次 久五郎」の文字が読み取れる。

窟2から約3.0m西側に窟3がある(図4～7、写真4)。入口は、幅約2.5m、高さ2.0m、奥行き約3.6m程である。

過去の調査で窟外側の地形測量を実施しているが、内部の地形測量は初めてである(表2)。本年度は、窟内部とその周辺を三次元測量し、詳細な地形を記録した。

表2 山王窟調査一覧表

No.	年度	地点	遺構	遺物	報告書	備考
1	28	若井原194-33・153	窟1～3	石碑	市埋報21集	3D地形測量

まとめ

山王窟において発掘調査は未実施であり、その構築年代は不明である。窟の内部に、古代から中世の年代を示す遺物は残存していない。しかしながら、『吾妻鏡』で四至の西の境界とされていること、詳細絵図にある「山王石屋」の位置、『風土記御用書出』の記載からみて、この窟が「山王窟(石

屋)」であることは疑いないであろう。昭和40年代まで、山王社の別当は中尊寺の西谷坊である大長壽院であり、この地で定期的に護摩焚を行っていたという。

(二階堂)

縮尺 1:60
 ピッチ:10cm

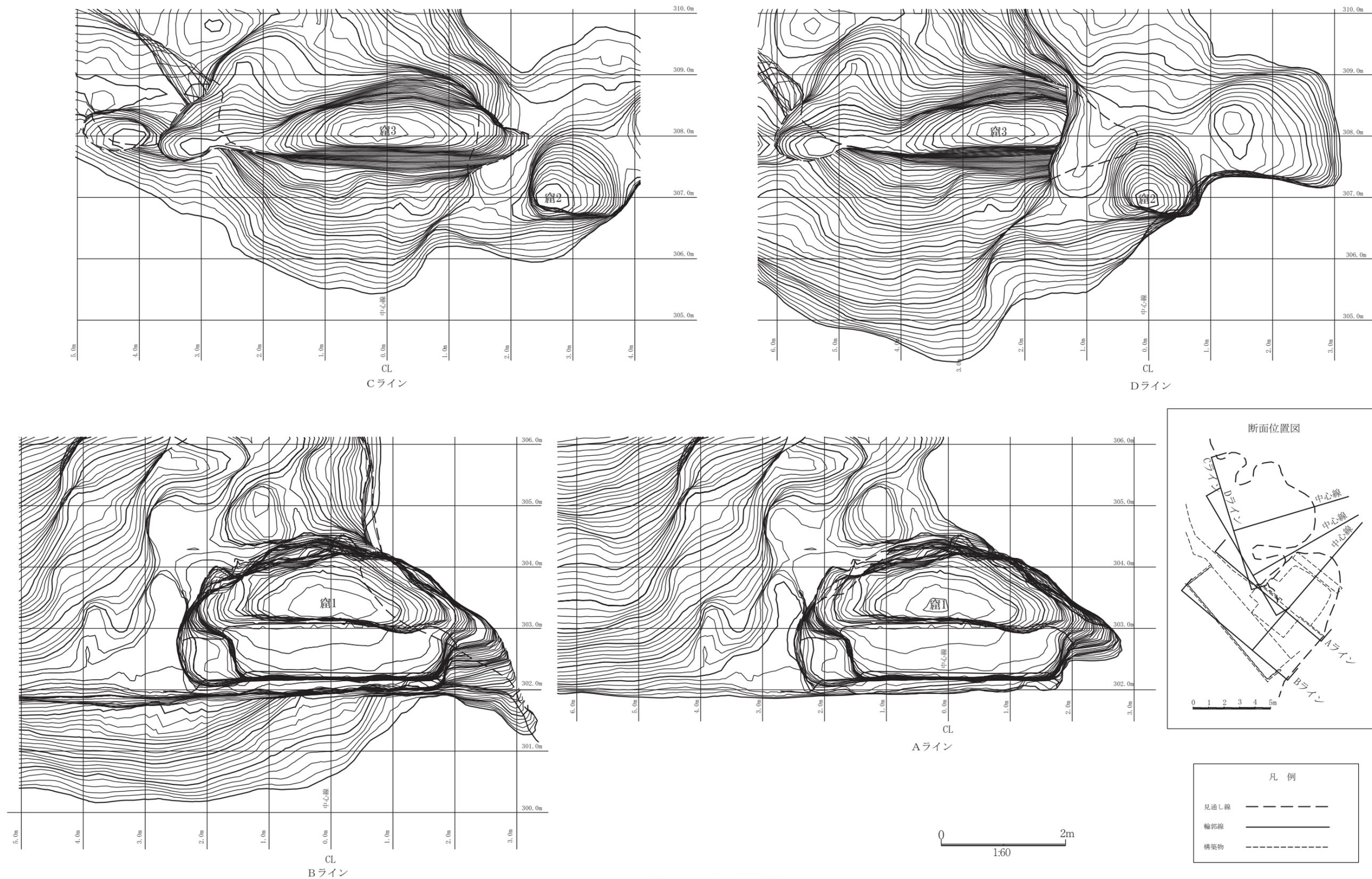


図5 山王窟正面図

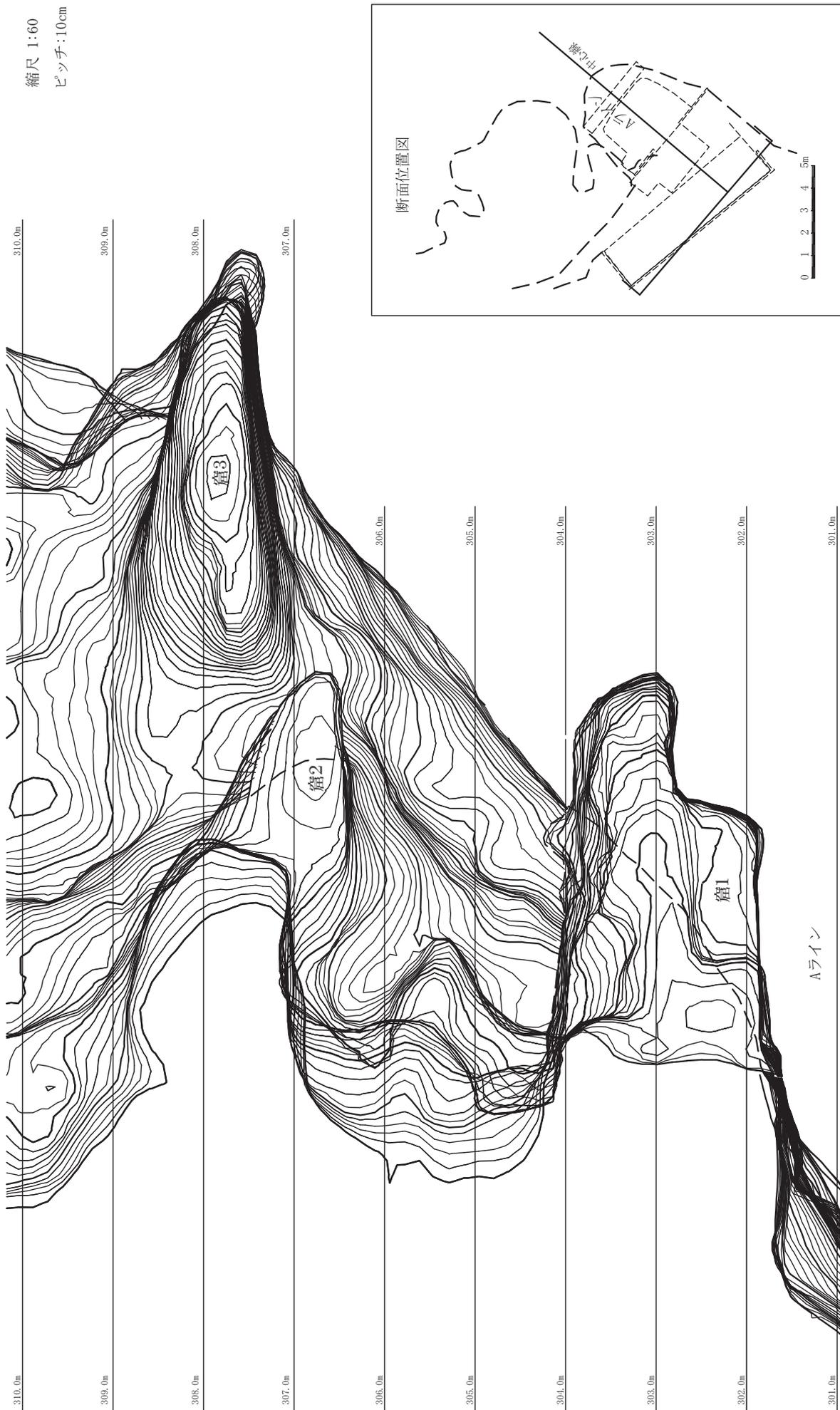


図6 山王窟側面図(1)

縮尺 1:60
ピッチ:10cm

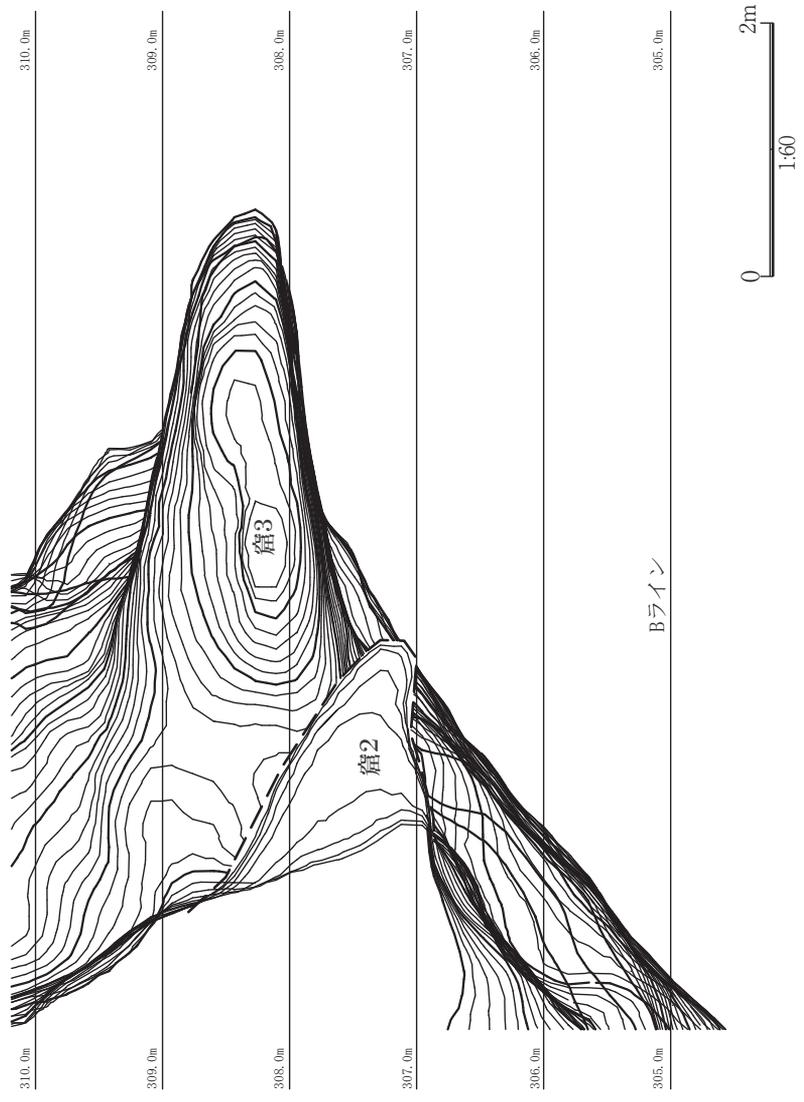
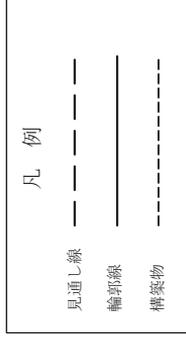
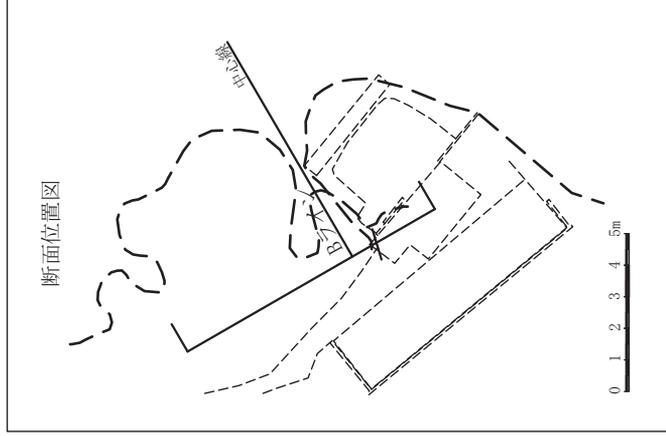


図7 山王窟側面図(2)

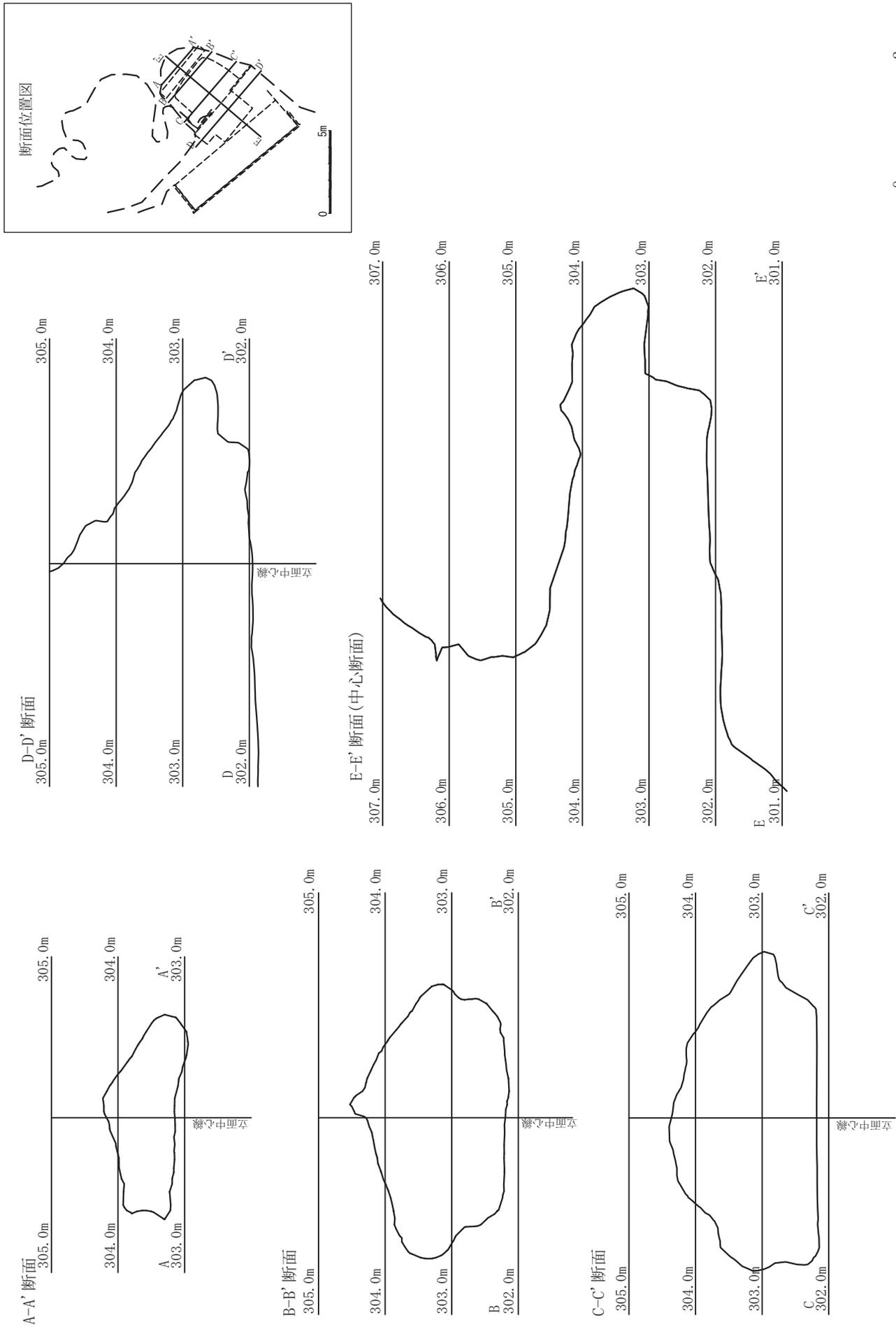


图8 山王窟 窟1横断面



写真1 山王山遠景 (南西から)



写真2 窟1前面 (西から)



写真3 窟1内部正面



写真4 窟2・3 (南から)



写真5 窟2内部の石碑

(2) 白山社及び駒形根神社、平泉野遺跡

白山社及び駒形根神社は、本寺の平野部を取り囲む西側丘陵の東側に位置する(図2・3、写真8)。この丘陵は地元で「平泉野台地」と呼ばれており、『陸奥国骨寺村絵図』では、上部(西側)に描かれた重なる山並みの最前列にあたとみられる。詳細絵図では丘陵の左(南)側に一際大きな礎石らしき丸印の並びとともに「骨寺堂跡」、中央よりやや左(南)に小さな点の並びとともに「房舎跡等也」、中央よりやや右下(東の山裾)に社のような建物の絵とともに「六所宮」の文字がある。簡略絵図では丘陵の左(南)側に礎石らしき丸印の並びとともに「白山」、そのすぐ左側に「骨寺跡」の文字、中央に一際大きな礎石らしき丸印の並び、さらにその右側に社のような建物の絵とともに「六所宮」の文字がある。また、「白山」と「骨寺跡」をそれぞれ示すとみられる丸印の並びの間には、一際高く表現された丘陵の頂部に「堂山」の文字がある。標高251mの「平泉野台地」丘陵の頂部は地元で「ドウジヤマ」と呼ばれ、絵図の「堂山」にあたる、とされている。

「平泉野」には平泉の中尊寺と毛越寺の前身の寺院があったという伝承があり、『風土記御用書出』(安永四年(1775))には、以下のように記されている。

一平泉野

右は当郡平泉村の旧跡にて往古は平泉並に中尊寺両山堂塔伽藍相建申候処 人皇七拾三代堀川院御宇長治年中医王山毛越寺並に関山中尊寺共に唯今の処に相移され候由申伝候其節の堂塔に瓦葺の由にて右瓦今以て間々相出申候事

中尊寺跡の下

一柳の里

平泉野の午未

一若井原

また、現在丘陵東端の山裾標高184mに位置する駒形根神社(写真9)は地元では「観音堂」と呼ばれており、『風土記御用書出』(安永四年(1775))

に以下の通りに記載されている。

端郷 本寺

一観音堂

一小名 林崎

一勧請 大同年中田村將軍御勧請の由

一境内長四拾四間
幅二拾四間

一堂 南向三間四面 一石階 長四拾級
幅一間

一本尊の馬頭観世音木仏座像御長八寸位作者相知不申候事

一鳥居 南向 一長床 一額

一地主 宇南屋敷平蔵

一別当 明覚院

右は往古当郡中尊寺村中尊寺御一境内にて中古以来退転仕候得共地主平蔵先祖より中尊寺御一山御始末を以て右堂のかぎ鑰等相預申置候処御祭礼の節は当郡中尊寺にあらず五串村羽黒派修験明覚院より平蔵方より別当に相願来り候に付右品々中尊寺並に明覚院御両所より御書上御座候得共猶又委細申上置候也

一祭日 三月十七日 九月十七日

『磐井郡西岩井絵図』(元禄十二年(1699)作成を明治二十一年(1888)に写)には、平泉野台地丘陵の東端に社の絵とともに「御コマ堂」の文字がある。この「御コマ堂」は、本尊が馬頭観音であることからこのように書かれたもので、『風土記御用書出』の「観音堂」と同一のものと考えられる。

さらに、この「観音堂」は『陸奥国骨寺村絵図』に描かれる「六所宮」の後身にあたる、とする見解がある(入間田2014)。「六所宮」の性格については、金峯山信仰との関わりが指摘されている(大石1997、松井2000)ほか、墓所のような性格を持っていた(大石2004)、『陸奥国骨寺村絵図』にある「山王」「金峯山」「宇那根社」「金聖人霊社」「白山」「若神子」の荘園惣社であった等の可能性が指摘されている。白山社の現在の社(写真10)は、丘陵の南東にある最も大きな平場の南東端、標高228mに位置するが、いつからこの場所にあっ

たのかは不明である。『封内風土記』(明和九年(1772))には「平泉野(略)又有白山社遺址。」との記載があり、近世には既に遺跡であったようである。

平泉野遺跡は、史跡としての白山社及び駒形根神社の東側に隣接する遺跡であるが、平泉野台地の様相を一体的に検討するため、一括して記載す

る(図11、表3)。

また、25・26年度には、「平泉野台地」丘陵の概ね南半分に対し踏査を行った(図18)。その結果、連なる2つの頂部である「オイノモリ」と「ドウジヤマ」の南側に、塚群や、造成した可能性のある地形などが集中することを確認し、それを基に以後の発掘調査の計画を立てた。

表3 白山社及び駒形根神社、平泉野遺跡調査一覧表

No.	年度	遺跡名	地点	遺構	遺物	報告書	備考	
1	12	白山社及び駒形根神社	中川6	造成層、礎石状石材	近世陶磁器	市埋報2集		
2	17		駒形5	炭窯	石器	市埋報1集(骨寺7集)		
3	18		駒形8-1	造成層、土坑	石器、近世銭	市埋報2集(骨寺8集)		
4	23		駒形5	土坑、性格不明遺構	縄文土器、石器	市埋報16集		
5	24		駒形5・7	土坑	縄文土器	市埋報17集		
6	25		中川4	塚			市埋報18集	電気・磁気・地中レーダー探査、3D地形測量
7			中川6	造成層、掘立柱建物、礎石状石材、溝、土坑、池状遺構、沢	縄文土器、石器、近世陶磁器			放射性炭素年代測定(AMS法)、3D地形測量
8	26		中川4	塚		縄文土器、近世銭	市埋報19集	火山灰分析、放射性炭素年代測定(AMS法)
9			中川6	造成層、掘立柱建物、礎石状石材、溝、土坑、池状遺構、沢	石器、近世陶磁器			放射性炭素年代測定
10				造成層、掘立柱建物、礎石状石材、土坑、池状遺構、沢	なし			市埋報20集
11	28		駒形5・若井原194-1	土坑、竪穴住居	縄文土器、石器、近世陶磁器	市埋報21集		
12	21		平泉野	若井原188	土坑、旧流路、集石遺構	縄文土器、土師器(内面黒色処理)、須恵器	市埋報8集	
13	22			若井原194-1	焚火跡	縄文土器	市埋報13集	
14	27			若井原194-115	段切り造成、溝	縄文土器、近世磁器	市埋報20集	火山灰分析、放射性炭素年代測定(AMS法)
15	28			中川9	溝、土坑			
16	28			若井原194-115	塚、溝		縄文土器、石器	市埋報21集

発掘調査成果の概要

●駒形根神社境内(駒形8-1地点、調査担当者：工藤武、後藤円)

時期及び性格不明の土坑を少数確認した。出土遺物は表土層からの縄文時代の石鏃1点と近世銭1点のみである。

●南東側斜面部

・駒形5地点(調査担当者：工藤武)

周辺には湧水による湿地が広がる。遺構はなく、遺物は表土層から縄文時代の石匙が1点のみ出土した。

・駒形5・7地点(調査担当者：鈴木弘太、後藤円)

土坑および性格不明遺構を確認した。これらの遺構の多くから縄文土器および石器、剥片が出土したことから、縄文時代の陥穴や、そこで得た食料を調整するための作業を行う施設であった可能性がある。

●北東側斜面部

・中川4・6地点(図11～14、写真11・12、調査担当者：鈴木弘太、二階堂里絵)

丘陵の北東側の裾に位置する緩斜面地に約30基の塚群(中川4地点)、また沢を隔てて北西側に複数の平場を確認(中川6地点)したため、塚2基及び最大の平場について、発掘調査を行った。また、25年度には塚群の一部で地中レーダー探査により地下の状況を探り、また三次元測量を行って周辺の詳細な地形を記録した。

塚7 塚の表面に礫が集中し、積み土中にも多数の礫が入っていた。基底部分は約4.0m、高さは0.8m、中央に近い位置で、積み土の中層から掘り込まれた主体部とみられる掘り込みを確認した。積み土、主体部ともに出土遺物はないが、放射性炭素年代測定(AMS法)を行った結果、11～14世紀頃の炭化物が多数検出されたことからその頃のものである可能性が指摘されている。ただし16・17世紀の炭化物も1点検出されており、これが表土から混入したものではないとすれば、近世初頭以降のものである可能性もある。

塚11 塚の表面に礫が集中し、積み土中にも多数の礫が入っていた。基底部分は約4.5m、高さは1.0m、中央に近い位置で、積み土の中層から掘り込まれた主体部とみられる掘り込みを確認した。積み土から縄文時代の石器が1点出土したのみであり、放射性炭素年代測定(AMS法)を行ったが、遺構の構築年代の手がかりとなる結果は得られなかった。

造成層 中川6地点において、西側の山を切って東側の斜面に盛土して平場を造成したとみられる層を確認した。掘立柱建物の柱穴はこれを掘り込んでいる。17世紀前半の磁器皿片が出土した(図9)。1は肥前産磁器皿、2は肥前産磁器碗である。また、造成層の上面に礎石状の石材が複数あり、礎石建物が存在した可能性がある。

掘立柱建物 東西6.5m・南北5.0mで、東西1間・南北3間の側柱の掘立柱建物である。造成層より新しいが、建物の軸が平場の軸と異なる他、西側に偏って位置するため、平場を造成した当初はこれとは異なる礎石建物が存在した可能性がある。出土遺物はない。

池状遺構 中川6地点最大の平場の北西に長径5.5m、短径3.5mの概ね楕円形の池状遺構を確認した。池の底を造成したとみられる層および汀の護岸の石の一部を確認した。出土遺物はないが、最大の平場と同じ時期のものである可能性が高い。

●南東平場

平泉野台地の丘陵の中では、最大の平場である。南側に延びる舌状の平場で、北西は丘陵の頂部である「ドウジヤマ」に接し、北東と南西側には沢が入る。平場の南東隅に現在の白山社の社がある。平場の北西隅、北東部、東の縁辺部で発掘調査を行っている。

・駒形5・若井原194-1地点(調査担当者：山川純一、二階堂里絵)

特に平場の南東部において、多数の土坑及び豎

穴住居とみられる遺構を確認した。遺構は確認のみにとどめ、掘削を行っていない。周辺の表土層から、縄文時代中期中葉(大木8a式)の縄文土器(写真6)および石器、剥片が多量に出土し、それ以外の時代の遺物は出土していないことから、その時代の集落跡と考えられる。

●中川9地点(図15、写真14、調査担当者：二階堂里絵)

平場の北東縁辺部である。多数の土坑を確認した。遺構は確認のみにとどめ、掘削を行っていない。

溝1 平場の縁辺の地形に沿って西から東に35m、そこから南に向きを変え5m延び、そこで現在東西に走る林道の造成により壊されている。上幅は約0.8m、深さは約0.2m、断面は皿形である。周辺の表土層から縄文土器および石器、剥片が出土しているが、溝の形状からは縄文時代のものとは考え難い。年代は不明であるが、区画溝、あるいは道路側溝の可能性はある。

●ドウジヤマ南東沢部(若井原188地点、調査担当者：鈴木弘太、後藤田)

丘陵の頂部である「ドウジヤマ」の南東の裾に接し、南に向かって流れる沢の西側の斜面中腹である。周辺には湿地が広がる。表土の下の暗褐色土層から、内面が黒色処理された土師器2点と須恵器の甕とみられる破片1点が出土した(図10、写真7)。土師器は2点ともロクロ成形で、内面にミガキがある体部片、須恵器はロクロ成形で肩部片である。これらはいずれも9世紀後半から10世紀頃のものともみられる。

土坑1 壁際で土坑の一部を確認した。幅は1.15m、深さは0.3m、底部側壁に逆茂木が残存する。

まとめ

『陸奥国骨寺村絵図』に文字で書かれた「骨寺(堂)跡」の現地とみられる「平泉野台地」において、未だその遺構は確認できていない。また、現在の社殿がある駒形根神社、白山社についても、その前身となりそうな遺構は確認できていない。出土

縄文土器片が少量出土した。縄文時代の陥穴とみられる

●ドウジヤマ南西沢部(若井原194-115地点)(図16・17、写真15、調査担当者：山川純一、二階堂里絵)

丘陵の頂部である「ドウジヤマ」の南西の裾に接する沢地形の頭部である。東端の駒形根神社から「ドウジヤマ」の南側を西に向かって走る林道と、丘陵の南北に縦断する道がここで交差する。その交差点の北西側に、南に開口して裾が広がる逆「U」字形の段切り区画があり、その内側の中心付近に2基の塚がある。塚1基及び区画の北東部について、発掘調査を行った。また、27年度には三次元測量を行って周辺の詳細な地形を記録した。

段切り造成 「オイノモリ」と「ドウジヤマ」に挟まれた場所にある。北側を向くと、北・東・西側が一段高く、北側の段上は平らに削られ、縁辺部は盛土により整形されている。南側の沢部は南に向かって緩やかに低くなっている。造成層からは遺物は出土していないが、放射性炭素年代測定(AMS法)を行った結果、近世以降のものであることがわかった。

塚1 2基の塚の北側の塚である。塚の表面に礫が集中し、積み土上層にも多数の礫が入っていた。基底部は約4m、高さは約0.6m、中央に近い位置で、積み土の下の地山面から掘り込まれた主体部とみられる掘り込みを確認した。積み土、主体部ともに出土遺物はないが、放射性炭素年代測定(AMS法)を行った結果、16世紀以降のものであることがわかった。

遺物は縄文時代のものが殆どを占め、平安時代のものは僅かである。

しかし、丘陵の広大な面積に比して、発掘調査が行われたのはごく僅かな面積であり、未調査区にそれらの遺構が存在する可能性は十分にある。

今後、踏査を重ね、また刈り払い後の微地形を観察する等の表面調査を行った上で、遺構が存在す

る可能性が高い地点を抽出し、発掘調査を行う必要がある。

(二階堂)

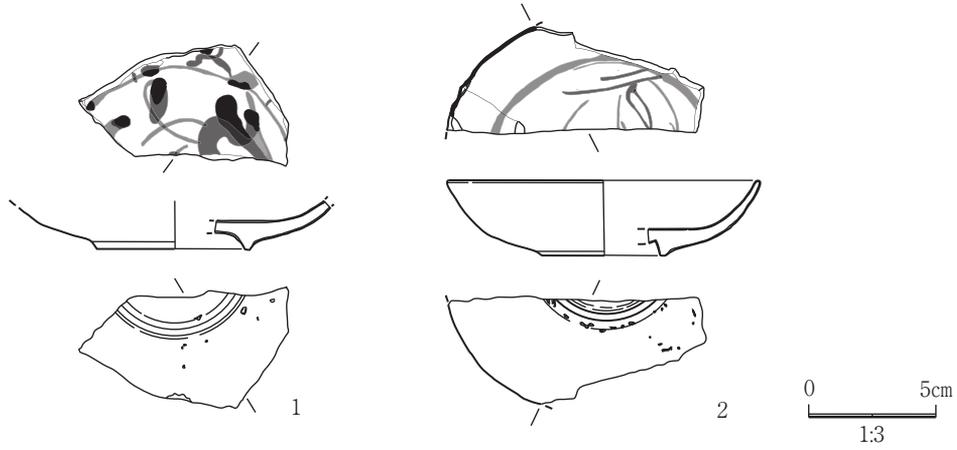


図9 中川6地点 近世包含層出土肥前産磁器



写真6 駒形5・若井原194-1地点出土縄文土器

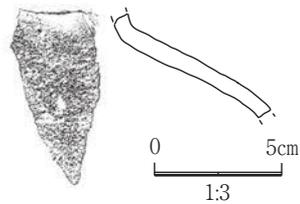


図10 若井原188地点出土須恵器



写真7 若井原188地点出土土師器・須恵器



図11 白山社及び駒形根神社、平泉野遺跡調査区配置図

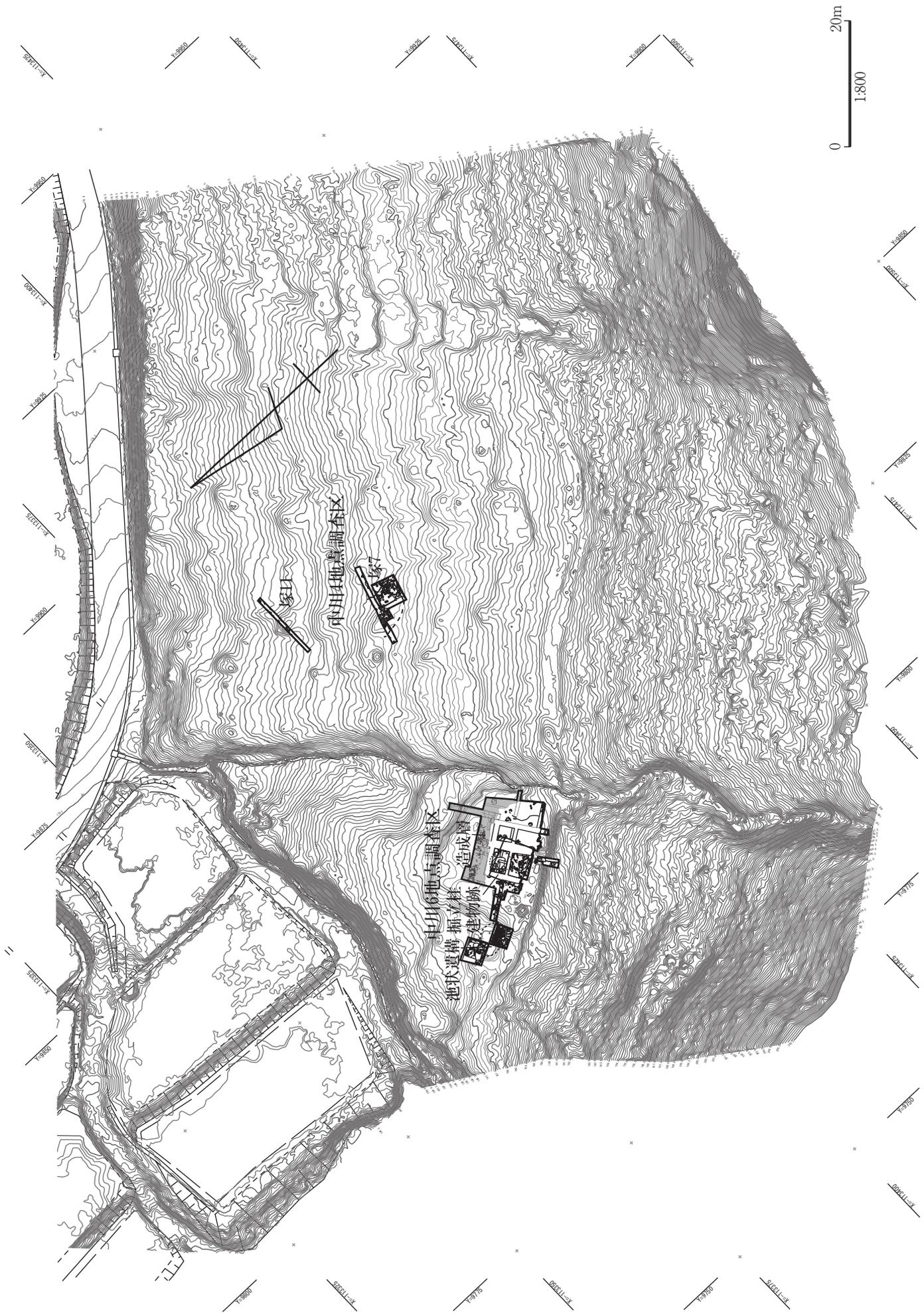
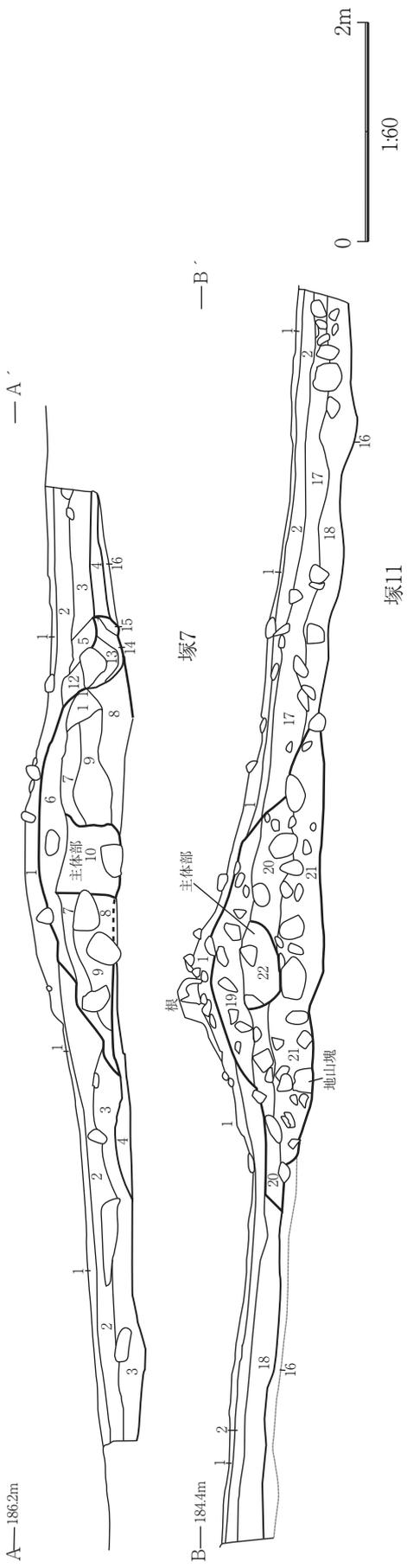


图12 白山社及び駒形根神社(中川4・6地点)調査区位置图



図13 中川4地点 塚7・11完掘平面図



- 土層注記AB**
- 1 10YR2/3暗褐色シルト。草の根多く入る。フカフカした土(腐葉土)。炭化物含む。粘性あり。しまりなし。表土。
 - 2 10YR2/1黒色シルト。草の根多く入る。炭化物含む。粘性あり。しまりなし。腐葉土。自然体積土。
 - 3 10YR2/2黒褐色シルト。大小の礫が多数入る。炭化物含む。粘性あり。しまりやややや。
 - 4 10YR3/3暗褐色シルトに地山塊(径0.5~10.0cm大)均一に30~40%混。炭化物少量含む。粘性あり。しまりあり。塚構築前の整地層?
 - 5 10YR3/3暗褐色シルトに地山塊(径0.1~3.0cm大)均一に少量混。灰白色火山灰塊(0.1~10.0cm大)一部に混。炭化物微量含む。粘性あり。しまりやややなし。塚の崩壊層?
 - 6 10YR2/1黒シルトに褐色シルトが均一に10~20%混。炭化物微量含む。粘性あり。しまりやややなし。フカフカした柔らかい土。
 - 7 10YR2/3黒褐色シルト。炭化物微量含む。粘性あり。しまりやややなし。フカフカした柔らかい土。塚の積み土。
 - 8 10YR2/3黒褐色シルトに地山塊(径0.5~3.0cm大)部分的に5~10%混。炭化物微量含む。粘性あり。しまりやややや。塚の積み土。
 - 9 10YR2/2暗褐色シルト。地山塊(径0.5~3.0cm大)均一に少量混。粘性あり。しまりややややあり。炭化物微量含む。塚の積み土。
 - 10 10YR2/1黒シルト。暗褐色シルト20~30%混。地山塊が北側に集中。やわらかいフカフカした土。粘性あり。しまりやややなし。塚の主体部の土。
 - 11 10YR3/3暗褐色シルトに地山塊(径0.5~3.0cm大)均一に20~30%混。炭化物微量含む。粘性あり。しまりやややなし。塚の積み土。
 - 12 10YR2/2暗褐色シルトに地山塊(径0.1~2.0cm大)均一に10~20%混。炭化物微量含む。粘性あり。しまりやややなし。塚の崩壊層?
 - 13 10YR2/2暗褐色シルトに地山塊(径0.1~3.0cm大)均一に5~10%混。炭化物微量含む。粘性あり。しまりややややあり。掘り込み?
 - 14 10YR2/1黒色シルト。地山塊(径0.1~2.0cm大)均一に少量混。炭化物微量含む。やわらかくフカフカした土。粘性あり。しまりやややなし。掘り込み?
 - 15 10YR3/3暗褐色シルトに地山塊(径0.1~5.0cm大)均一に40~50%混。炭化物微量含む。粘性あり。しまりあり。掘り込み?
 - 16 10YR5/6黄褐色シルト。小礫が入る。固くしまりあり。無遺物層。地山。
 - 17 10YR2/1黒色シルト。大小の礫多数入る。有機質多し。炭化物少量含む。粘性あり。しまりなし。
 - 18 10YR3/2黒褐色シルトに地山塊(径0.1~10.0cm大)均一に30~40%混。上部に根の痕跡多く入る。炭化物少量含む。粘性あり。しまりなし。
 - 19 10YR2/1黒色シルト。有機質多し。小礫が多数入る。炭化物微量含む。粘性あり。しまりやややなし。塚の積み土。
 - 20 10YR3/1黒褐色シルト。有機質多し。大小の礫多数入る。炭化物微量含む。粘性あり。しまりややややあり。塚の積み土。
 - 21 10YR3/2暗褐色シルトに地山塊(0.1~20.0cm大)所々に集中して30~40%混。大小の礫多数入る。特に大きい石集中。炭化物微量含む。粘性あり。しまりややややあり。塚の積み土。
 - 22 10YR1/7黒色シルト。有機質多し。炭化物微量含む。粘性あり。しまりやややなし。主体部?の土。

図14 中川4地点 塚7・11土層断面図

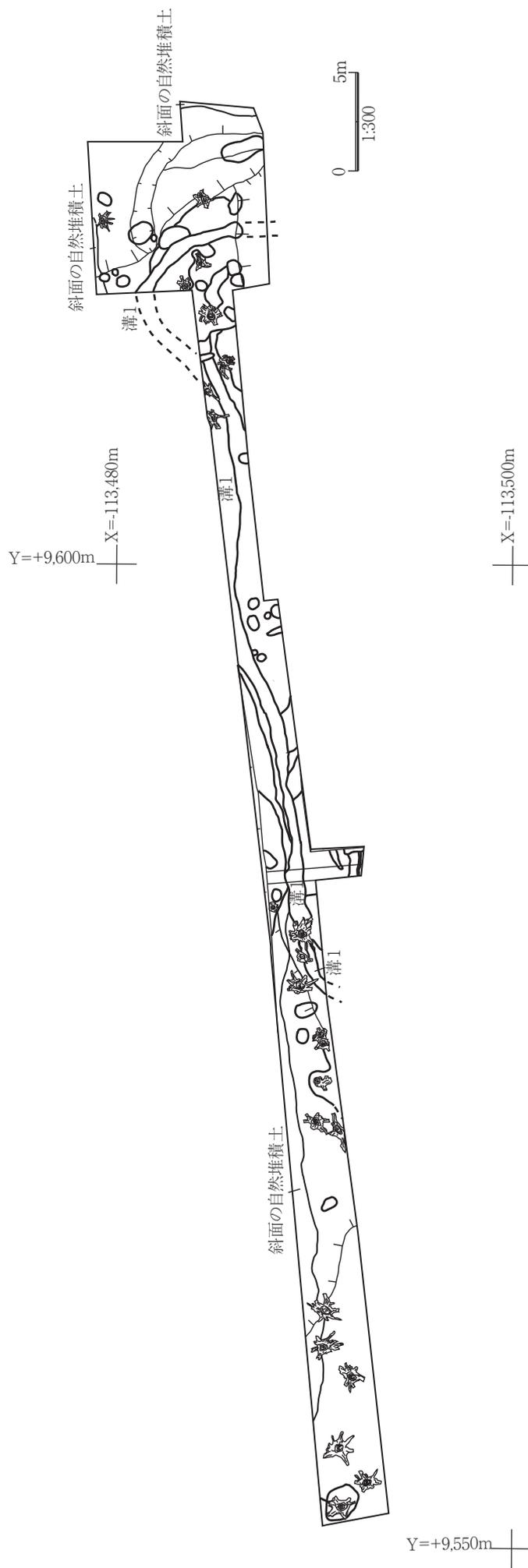


図15 平泉野遺跡(中川9地点)遺構配置図

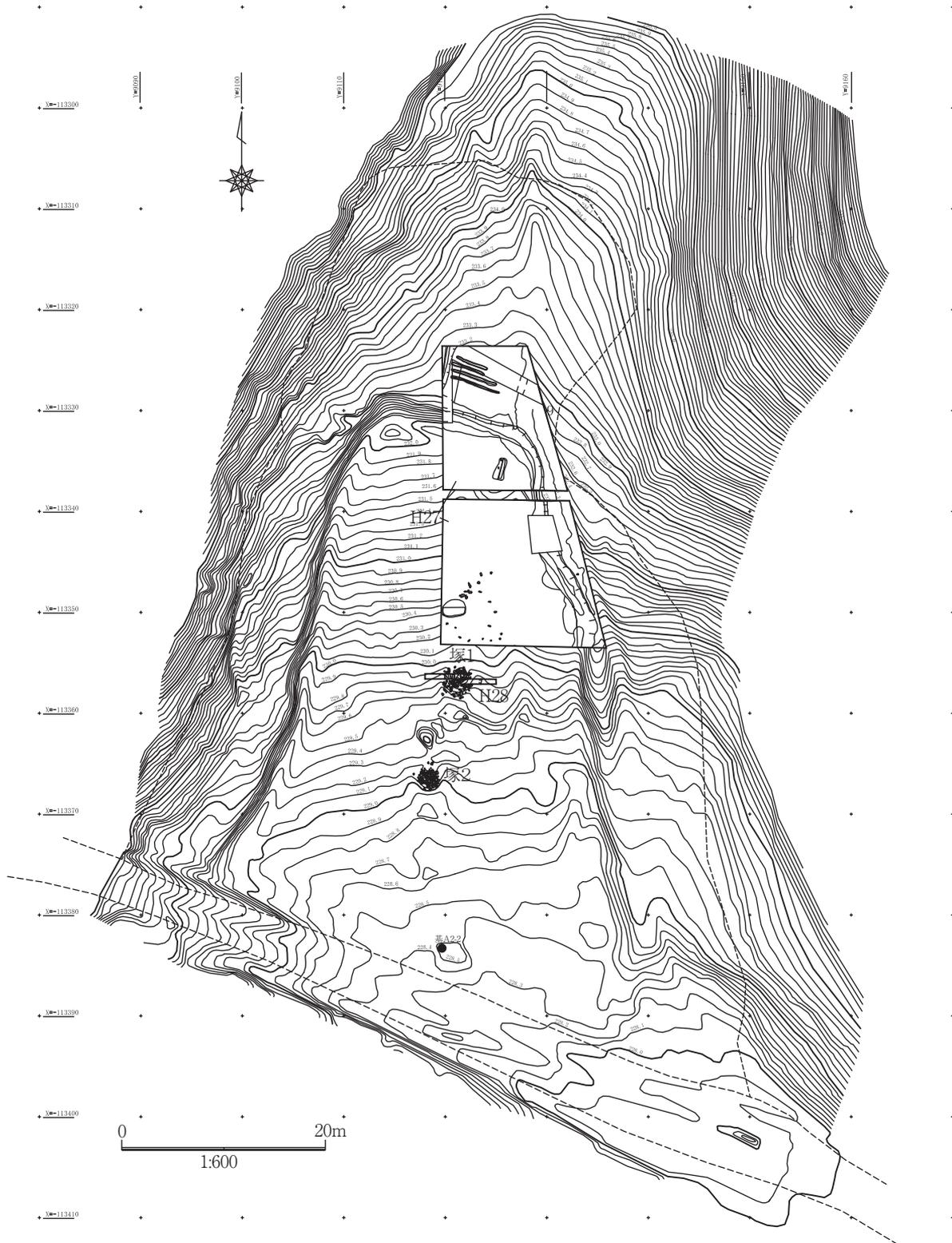
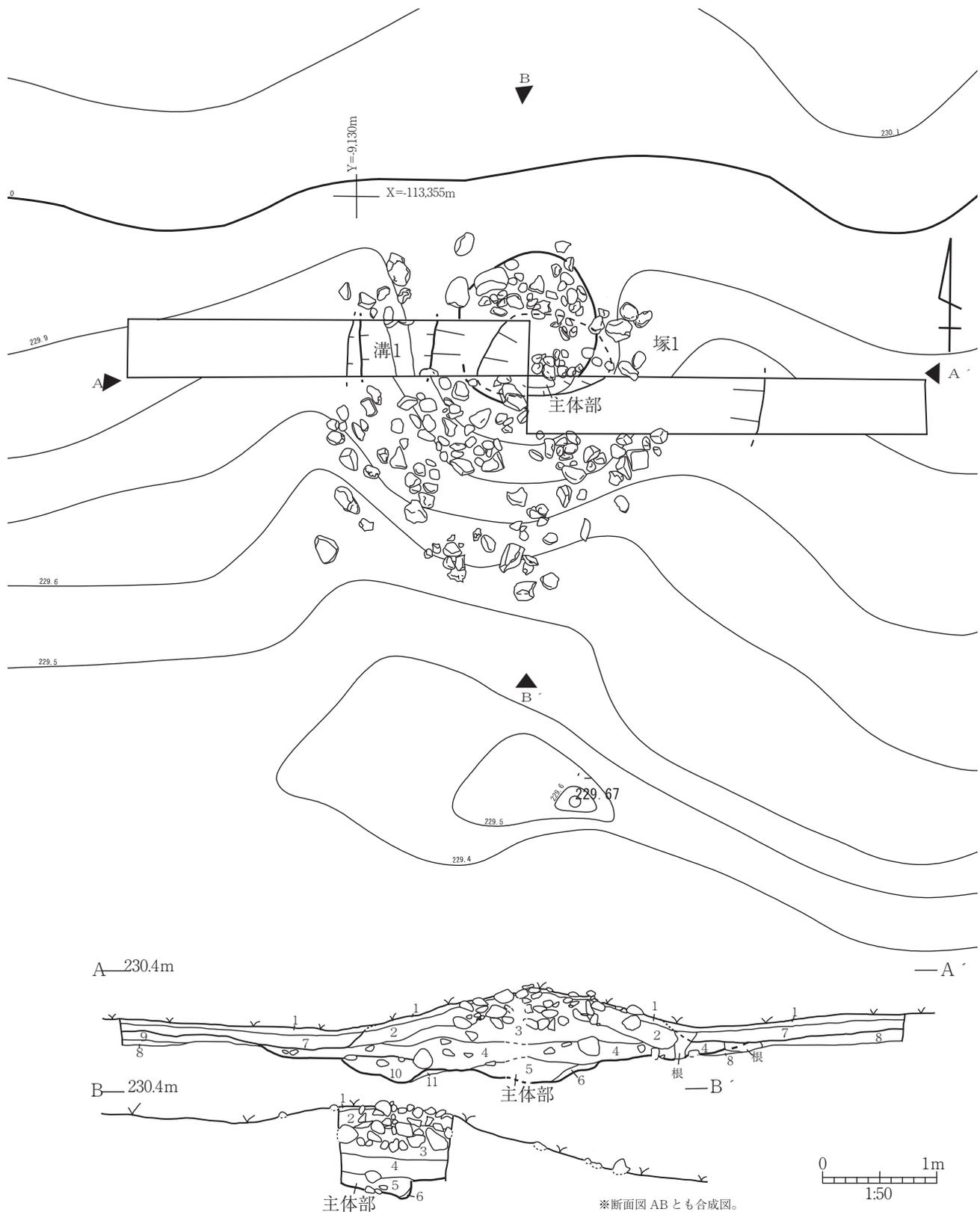


图 16 平泉野遺跡(若井原 194-115 地点) 調査区位置図



土層注記AB

- 1 10YR2/3暗褐色シルト。炭化物含む。粘性あり。しまりなし。草の根が多く入る。現表土。基本土層I層。
- 2 10YR3/2黒褐色シルト。炭化物少量含む。粘性あり。しまりややあり。大小の礫が多数入る。塚の積み土の上層。
- 3 10YR2/2黒褐色シルト。暗褐色シルト塊(径0.5~5.0cm大)均一に10~20%混。炭化物少量含む。粘性あり。しまりややあり。中心部に多く大小の礫が入る。塚の積み土の中層。
- 4 10YR3/3暗褐色シルト。にぶい黄褐色シルト塊(径0.5~5.0cm大)均一に少量混。炭化物少量含む。塚の積み土の下層。
- 5 10YR2/2黒褐色シルト。暗褐色シルト塊(径0.5~5.0cm大)均一に20~30%混。炭化物少量含む。粘性あり。しまりややあり。砂礫が少量混。有機質分多くやわらかい土。主体部
- 6 10YR2/2黒褐色シルト。にぶい黄褐色シルト塊(径0.5~3.0cm大)均一に30~40%混。炭化物少量含む。粘性あり。しまりあり。砂礫が多く混。主体部の外側の埋土。
- 7 10YR2/3暗褐色シルト。炭化物少量含む。粘性あり。しまりなし。草の根が多く入る。表土。基本土層II層。
- 8 10YR3/3暗褐色シルト。炭化物少量含む。粘性あり。しまりあり。自然堆積層。基本土層IV層。
- 9 10YR2/2黒褐色シルト。炭化物少量含む。粘性あり。しまりあり。有機質分多くやわらかい土。旧表土層。基本土層III層。
- 10 10YR3/3暗褐色シルト。にぶい黄褐色シルト塊(径0.5~5.0cm大)均一に30~40%混。炭化物微量含む。粘性あり。しまりあり。大小の礫入る。溝1の埋土。
- 11 10YR5/6黄褐色シルト。暗褐色シルト均一に少量混。炭化物微量含む。粘性あり。しまりあり。砂礫多く含む。地山漸移層。基本土層V層。

図17 平泉野遺跡(若井原194-115地点) 塚1完掘平面図・土層断面図



図 18 白山社及び騎形根神社、平泉野遺跡(平泉野台地) 踏査図



写真8 平泉野台地東端遠景(東から)



写真9 駒形根神社拝殿



写真10 白山社



写真11 中川4地点の塚群



写真12 中川4地点 塚7完掘状況



写真13 若井原194-1地点 白山社周辺遺構確認状況



写真14 中川9地点 溝1確認状況



写真15 若井原194-115地点 塚1完掘状況

(3) 梅木田遺跡

梅木田遺跡(図2・3)は、主要地方道「栗駒衣川線」と本寺の平野部北側を取り囲む丘陵の裾を東西に走る市道との交差点から、主要地方道沿いに北へ約140mの山裾、標高約180mのところの位置する。地元では、「ウメノキタ(ウメノキダ)」と呼ばれ、屋敷があったという伝承があり、安永四年(1775)に書かれた磐井郡五串村の『風土記

御用書出』に記載のある「一梅木田屋敷 壹軒」にあたるものと考えられる。現状は畑地となっており、段切り造成によって作り出された5つの平場(西から最西部平場、西部上段平場、西部下段平場、中央部平場、東部平場)からなる。発掘調査は、それら全ての平場で実施している(図19、表4、写真17)。

表4 梅木田遺跡調査一覧表

No.	年度	地点	遺構	遺物	報告書	備考
1	12	中川 32-1	柱穴、溝、竪穴遺構、造成面	近世陶磁器	市埋報 2 集	
2	24				市埋報 17 集	地中レーダー探査
3	25		整地層、掘立柱建物、柱列、柱穴、溝、畑耕作痕、沢	縄文土器、縄文石器、土師器、龍泉窯系青磁鎗蓮弁文碗、近世陶磁器	市埋報 18 集	放射性炭素年代測定(AMS法)、3D地形測量
4	26		整地層、掘立柱建物、柱列、柱穴、溝、土坑、沢	縄文石器、近世陶磁器	市埋報 19 集	火山灰分析、放射性炭素年代測定(AMS法)、樹種同定
5	27		整地層、掘立柱建物、柱列、柱穴、溝、土坑、畑耕作痕、沢	縄文石器、近世陶磁器	市埋報 20 集	
6	28		中川 30-1	掘立柱建物、柱穴、溝、畑耕作痕	縄文石器、近世陶磁器	市埋報 21 集

発掘調査成果の概要

主な遺構(図20)

●中央部平場(写真16、調査担当者：工藤武、鈴木弘太、山川純一、澤目雄大)

建物1(写真20) 長軸18.5m・短軸5.8m、長軸6間・短軸1間の側柱掘立柱建物である。出土遺物はなく、年代は不明である。この建物に柱列7、溝5が伴うとみられる。建物10・11・12、柱列10、溝16と方向を共にする。

建物2 長軸11.2m・短軸5.4m、長軸3間・短軸1間の側柱掘立柱建物である。この建物を構成するP205の掘方埋土から近世の肥前産磁器碗?の細片が出土している。この建物に柱列6、溝3が伴うとみられる。建物3・4・6、柱列8・9と方向を共にする。

建物3 長軸3.8m・短軸3.7m、長軸2間・短軸1間の側柱掘立柱建物である。この建物を構成するP56の柱抜取穴から砥石が出土している。年代は不明である。建物2・4・6、柱列6・8・9、溝3と方向を共にする。

建物4 長軸6.3m・短軸6.2m、長軸2間・短軸1間の側柱掘立柱建物である。この建物を構成するP203の掘方埋土から近世の肥前産磁器碗?の細片が出土している。建物2・3・6、柱列6・8・9、溝3と方向を共にする。

建物5 長軸7.6m・短軸4.3m、長軸3間・短軸1間の側柱掘立柱建物である。出土遺物はなく、年代は不明である。この建物に溝9が伴うとみられる。建物7・8・9、溝14と方向を共にする。

建物10 長軸10.6m・短軸4.9m、長軸6間・短軸4間の側柱掘立柱建物である。出土遺物はなく、年代は不明である。この建物に柱列10、溝16が伴うとみられる。建物1・11・12、柱列7、溝5と方向を共にする。

建物11 長軸4.7m・短軸3.0m、長軸3間・短軸3間の側柱掘立柱建物である。出土遺物はなく、年代は不明である。この建物に建物12、溝16が伴うとみられる。建物1・10、柱列7・10、溝5と方向を共にする。

建物12 長軸4.7m・短軸3.0mの竪穴建物である。北・東・南側で壁が立ち、西側は斜面にすりつく。出土遺物はなく、年代は不明である。この建物は建物11に伴うとみられる。建物1・10、柱列7・10、溝5と方向を共にする。

●西部下段平場(写真18、調査担当者：鈴木弘太、山川純一、澤目雄大)

建物6 長軸6.5m・短軸4.5m、長軸2間・短軸2間の側柱掘立柱建物である。出土遺物はなく、年代は不明である。この建物に柱列8・9が伴うとみられる。建物2・3・4、柱列6、溝3と方向を共にする。

●東部平場(写真19、調査担当者：山川純一、二階堂里絵)

建物7 長軸5.7m以上・短軸4.3m、長軸2間以上・短軸3間の側柱掘立柱建物である。出土遺物はなく、年代は不明である。建物5・8・9、溝9・

まとめ

平成12年度および25～28年度の5次にわたる発掘調査によって、丘陵の裾部を段切りして平場を造成していること、段切りと平場の接点に区画溝が掘られ、段切り造成の下段平場を活用し、掘立柱建物と柱列、区画溝などからなる居住域(屋敷)としていることを明らかにした。

これらは、大別3時期(古い順に1・2・3期)にわたる変遷を辿ることができる(図21)。

1期 中央部平場 : 建物5、溝9

東部平場 : 建物7・8・9、溝14

14と方向を共にする。

建物8 長軸11.2m・短軸3.2m以上、長軸5間・短軸間数未詳の側柱掘立柱建物である。出土遺物はなく、年代は不明である。この建物に溝14が伴うとみられる。建物5・7・9、溝9と方向を共にする。

建物9 長軸6.2m以上・短軸4.25m、長軸3間以上・短軸2間の側柱掘立柱建物である。出土遺物はなく、年代は不明である。建物5・7・8、溝9・14と方向を共にする。

出土遺物(表4、写真21～28)

遺構から出土している主なものに、建物2を構成するP205掘方埋土、建物4を構成するP203掘方埋土から近世の肥前産磁器、溝9埋土から肥前産陶器皿(17世紀末～18世紀末)などがあるが、極めて少ない。

また、旧畑耕作土から、江戸時代(18世紀後半)から近代(明治期)までの肥前産、大堀相馬産の陶磁器、鉄滓などが少数、排土・表土・攪乱および基本土層から、縄文時代の石器(石鏃・石匙・剥片)、鎌倉時代中・後期(13世紀中頃～後半)の中国龍泉窯系産の青磁鎬蓮弁文碗(図43-4、写真28)、江戸時代(16世紀末頃)から近代(明治期)までの肥前産、大堀相馬産、瀬戸美濃産、志野産の陶磁器、石製品(砥石・硯)、金属製品(煙管・鏝・鉄砲玉)など、比較的多く出土している。

2期 中央部平場 : 建物1、柱列7、溝5 建物10・11・12、柱列10、溝16

3期 中央部平場 : 建物2、柱列6、溝3 建物3・4

西部下段平場: 建物6、柱列8・9

3期に属する建物4を構成するP203の掘方埋土、建物2を構成するP205の掘方埋土から近世の肥前産磁器碗?、1期に属する溝9の埋土から17世紀末から18世紀末の肥前産陶器皿が出土していることから、いずれの時期も近世である。

詳細な年代は、遺構からの出土遺物がごく僅かであり断定できないが、江戸時代中期(17世紀後半)から近代(明治期)まで存続していた蓋然性が高い。それは、遺構外(表土、旧畑耕作土など)から出土した遺物のほとんどが、17世紀末から18世紀末までの肥前産、18・19世紀の大堀相馬産の碗・碗・皿などの陶磁器(日常雑器)であり、屋敷の廃絶後、畑地として耕作された際に屋敷で用いられていた陶磁器類が破碎され、表土、旧畑耕作土に混在したものとみられることによる。

特筆すべきは、排土からではあるものの鎌倉時代中・後期(13世紀中頃～後半)の中国龍泉窯系

産の青磁鎬蓮弁文碗の体部片(図43-4、写真28)が出土していることである。本調査地点から東に約500m離れた丘陵の裾部にある遠西遺跡からは12世紀後半～13世紀のかわらけ及び12世紀後半の常滑焼三筋壺の体部下端～底部片が出土しており、これらとともに骨寺村荘園遺跡の中世を考えるうえで重要な資料といえる。しかし、その年代の遺構は確認できておらず、近世段階の屋敷造成に関わる切土(段切り)によって失われた可能性が高いと考えられる。

(山川)

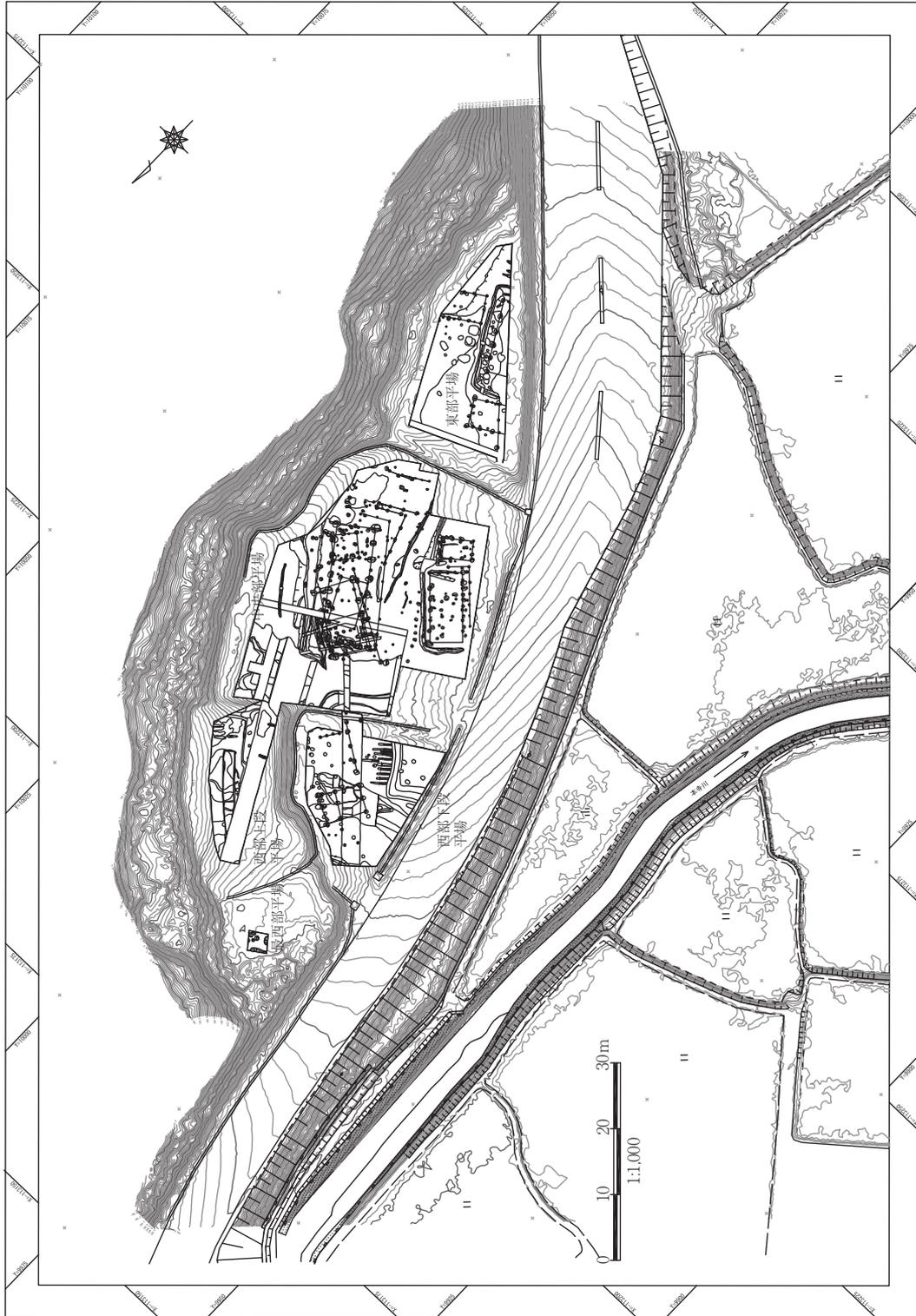
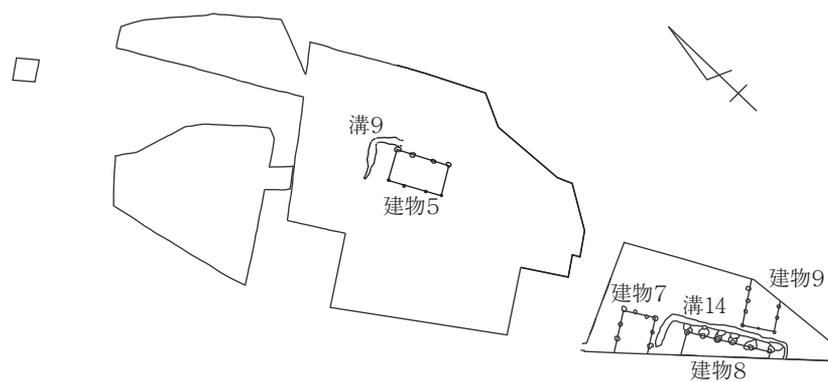


图 19 梅木田遺跡調査区位置図

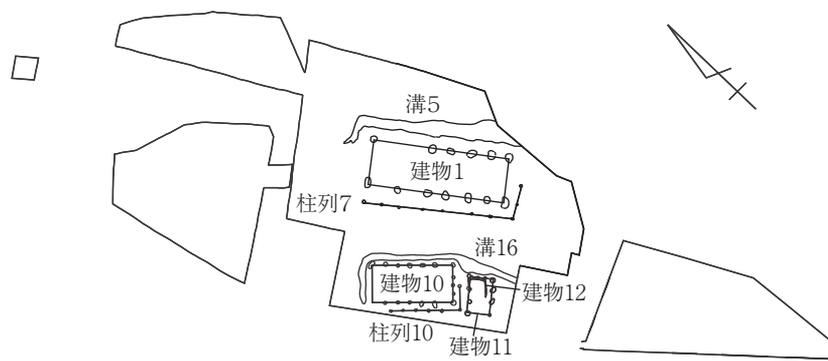


図20 梅木田遺跡遺構全体図

I 期



II 期



III 期

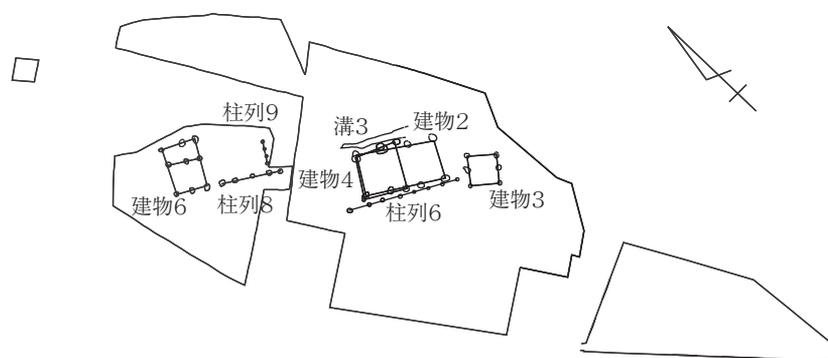


図 21 梅木田遺跡遺構変遷図



写真 16 中央部平場遺構完掘全景



写真 17 遺跡遠景



写真 18 西部下段平場遺構完掘全景



写真 19 東部平場遺構完掘全景



写真 20 建物1完掘



写真 21 平成 25 年度調査出土遺物 (1)



写真 22 平成 25 年度調査出土遺物 (2)



写真 23 平成 26 年度調査出土遺物 (1)



写真 24 平成 26 年度調査出土遺物 (2)



写真 25 平成 27 年度調査出土遺物 (1)



写真 26 平成 27 年度調査出土遺物 (2)



写真 27 平成 28 年度調査出土遺物



写真 28 青磁鎬蓮弁文碗

(4) 伝ミタケ堂跡

『陸奥国骨寺村絵図』の詳細絵図には、右上(北西)の丘陵に礎石らしき丸印の並びとともに「ミタケアト」、簡略絵図では「金峯山」、その脇に「ミタけたうよりして山王の岩屋へ五六里之程」と書かれている。

ミタケ堂跡と伝えられる場所は、本寺の平野部を取り囲む北側丘陵の西端、標高235 m前後の山林にある(図2・3、写真29)。その山側にはほぼ垂直に切り立った岩壁が露出し、下にある平場には大小の岩が散乱している。平場の西端に約9 m四方の高まりがあり、堂跡の可能性が指摘されていた(國學院大學1997)。発掘調査は、この高ま

りとその周辺で実施している(図22、表5、写真30)。

また26年度には、この丘陵の頂部から味ヶ沢以西の南側斜面に対し踏査を行った(図23)。頂部とそれに繋がる尾根、また斜面部にもいくつか小規模な平場があるが、礎石は確認できなかった。丘陵の最南端の尾根上に1基の塚を確認した。この塚は直径約4 m、高さ約0.6 mで表面に石が集中する。その他、斜面全体に近世以降のものとみられる石祠、馬頭観音碑、墓碑、鳥居等があり、信仰を表すものが多く所在する。

表5 伝ミタケ堂跡調査一覧表

No.	年度	地点	遺構	遺物	報告書	備考
1	24	要害204-1			市埋報17集	
2	25				市埋報18集	

発掘調査成果の概要

●要害204-1 地点(調査担当者:鈴木弘太、後藤円、山川純一)

堂跡の可能性が指摘されていた約9 m四方の高

まり上と、その南東側直下のテラス状の平場にそれぞれトレンチを設定したが、遺構、遺物は確認できなかった。

まとめ

伝ミタケ堂跡では、堂跡の可能性が指摘されていた平場とその下のテラス状平場に、発掘調査を実施しているが、いずれも遺構、遺物を確認することはできなかった。

ここにあるのか。踏査で確認した小規模な平場について、人為的なものか否かを確認するなど、今後も調査を継続する必要がある。

(二階堂)

『陸奥国骨寺村絵図』にある「ミタケアト」はど



図22 伝ミタケ堂跡調査区位置図

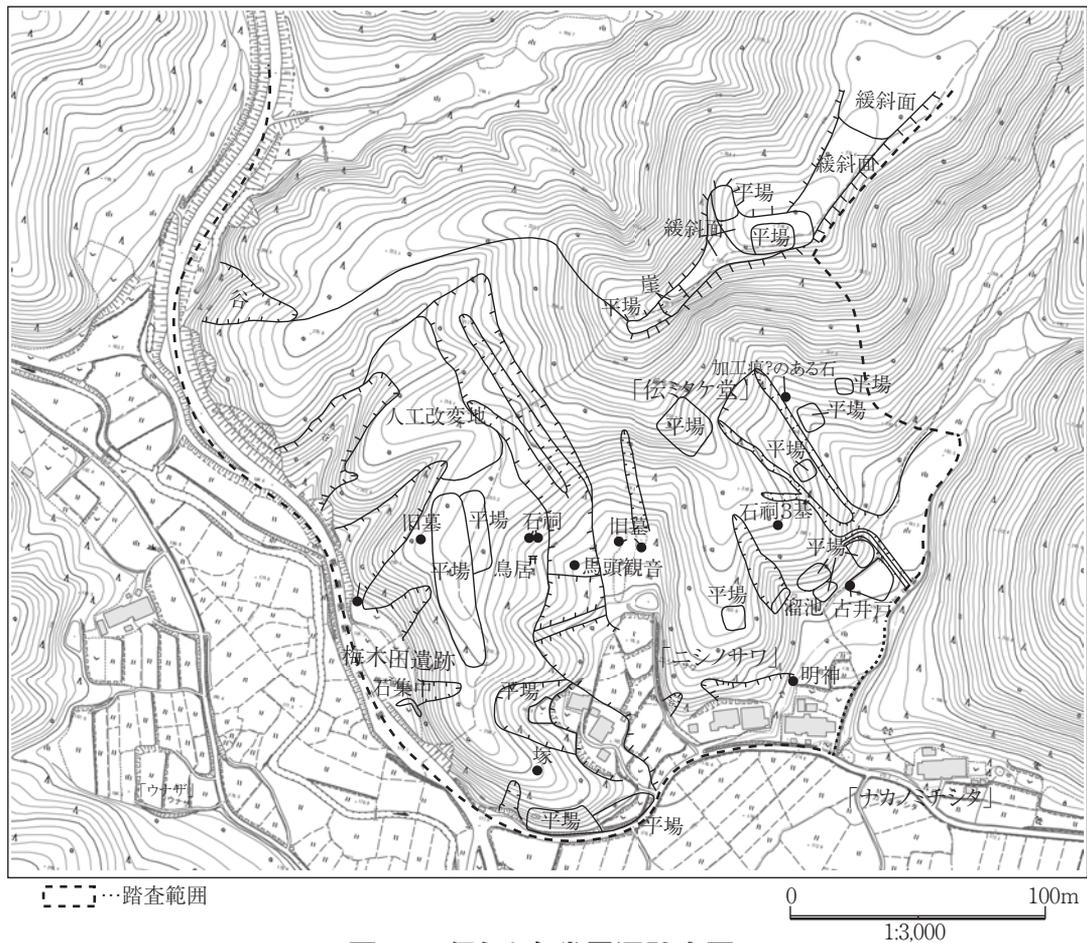


図23 伝ミタケ堂周辺踏査図



写真29 伝ミタケ堂跡のある丘陵遠景(南西から)



写真30 発掘調査地点の高まり

(5) 遠西遺跡

遠西遺跡(図2・3)は本寺の平野部を取り囲む北側丘陵の中央よりやや西寄りの山裾、標高170m程のところに位置する。付近の山裾には民家が点在し、その合間がかつて水田であったた

め4つの平場が段々に繋がった地形となっている。平場は西からそれぞれ、Y114-1、Y115-2上段、Y115-2下段、Y79-1とする。発掘調査は、全ての平場で実施している(図25・26、表6、写真31)。

表6 遠西遺跡調査一覧表

No.	年度	地点	遺構	遺物	報告書	備考
1	13	要害115-2	柱穴、土坑、溝	常滑三筋壺片(12C後半)、かわらけ(13C?)	市埋報3集	放射性炭素年代測定(AMS法)
2			柱穴、井戸、溝	かわらけ(12C後半?)		
3	14	要害114-1			市埋報4集	
4		要害79-1	柱穴			

発掘調査成果の概要

主な遺構(調査担当者: 工藤武、小巖弥一)

掘立柱建物 Y 79-1 S B 01 要害79-1地区で確認した。東西11.5m・南北8.8mで、東西4間・南北4間以上の建物である。出土遺物はなく、年代は不明である。

柱穴群 全ての地区で、多数の柱穴を確認したが、要害79-1 S B 01以外に建物は想定できていない。要害115-2地区の7つの柱穴に柱根が残存していた。そのうち1つの柱根から削り取ったサンプルに放射性炭素年代測定(AMS法)を行った結果、19～20世紀のものであった。

Y115-2 S D 1・S D 2 Y115-2地区上段で確認した溝である。幅0.5m、深さ0.2m、丸底で、出土遺物はなく、年代は不明である。

Y115-2 S D 3・S D 4 Y115-2地区下段で確認した。幅は約0.3mで2本の溝はほぼ直角に接続する。出土遺物はなく、年代は不明である。

Y115-2 S K 1 Y115-2地区下段で一部を確認した。長軸2.2m、短軸1.1m以上、深さ0.4mの楕円形で、丸底の土坑である。出土遺物はなく、年代は不明である。

Y115-2 S K 2 Y115-2地区下段で確認した。長軸2.2m、短軸1.5m、深さ0.3mの楕円形で、南壁

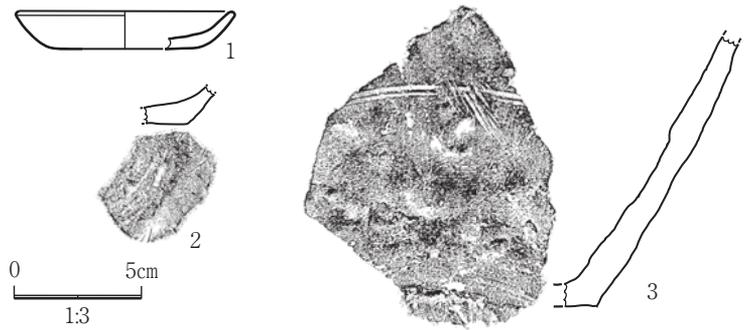
のみ丸く立ち上がり、その他の壁はほぼ直に立ち上がる土坑である。出土遺物はなく、年代は不明である。

Y115-2 S K 3 Y115-2地区下段で確認した。長軸1.2m、短軸0.7m、深さ0.3mの楕円形の土坑である。出土遺物はなく、年代は不明である。

出土遺物(表6)

Y115-2地区上段で遺物包含層から、かわらけ片1点(図24-2、写真34)、遺構確認面からかわらけ片1点(図24-1、写真33)が、また同地区下段のY115-2SK(土坑)1確認面直上で常滑三筋壺片1点(図24-3、写真32)が出土した。かわらけ片はどちらも磨滅が激しいが、底に糸切り痕がわずかに確認でき、ロクロ成形されていることがわかる。小型のロクロかわらけとみられる。2は底部から体部までの破片であるが、若干歪みがあるため、底径の復元はできなかった。13世紀頃のものとしてされている(一関市2002)。1は底部から口縁部まで遺存し、遺存径約12%で復元口径8.4cm、復元底径6.0cm、器高1.6cmで、器形は浅い皿型である。器形から、12世紀後半のものとしてみられる。なお、このかわらけは14年度調査で出土したものであるが、これまでに刊行された報告書には実測図、写

真は掲載されていないため、今回報告するものである。常滑三筋壺片は底から体部下半の破片であり、近接した2本の沈線が確認できる。常滑窯3型式(中野ほか2012)の複線三筋壺で12世紀後半のものである。



※1は鈴木(2017)の図を一部改変して掲載。

図24 遠西遺跡出土遺物

まとめ

遠西遺跡では、12・13世紀の遺物が出土した。かわらけ片、常滑三筋壺片とも、権力者が儀式や宴会で使用したものと考えられており、平泉遺跡群でも多量に出土している。そのため、これらの出土遺物は骨寺村が中尊寺経蔵別当領であったことによりもたらされた可能性がある。

しかしながら、遠西遺跡のこれらの遺物は遺構外から出土したものであり、その年代の遺構の抽

出はできていない。また、付近に中世の山城とみられる要害館に関わる施設が存在した可能性もある。中世から現代に至るまでこの場所での土地利用は続いていたものとみられるため、今後周辺の確認調査を実施して各時代の遺構を抽出する必要がある。

(二階堂)

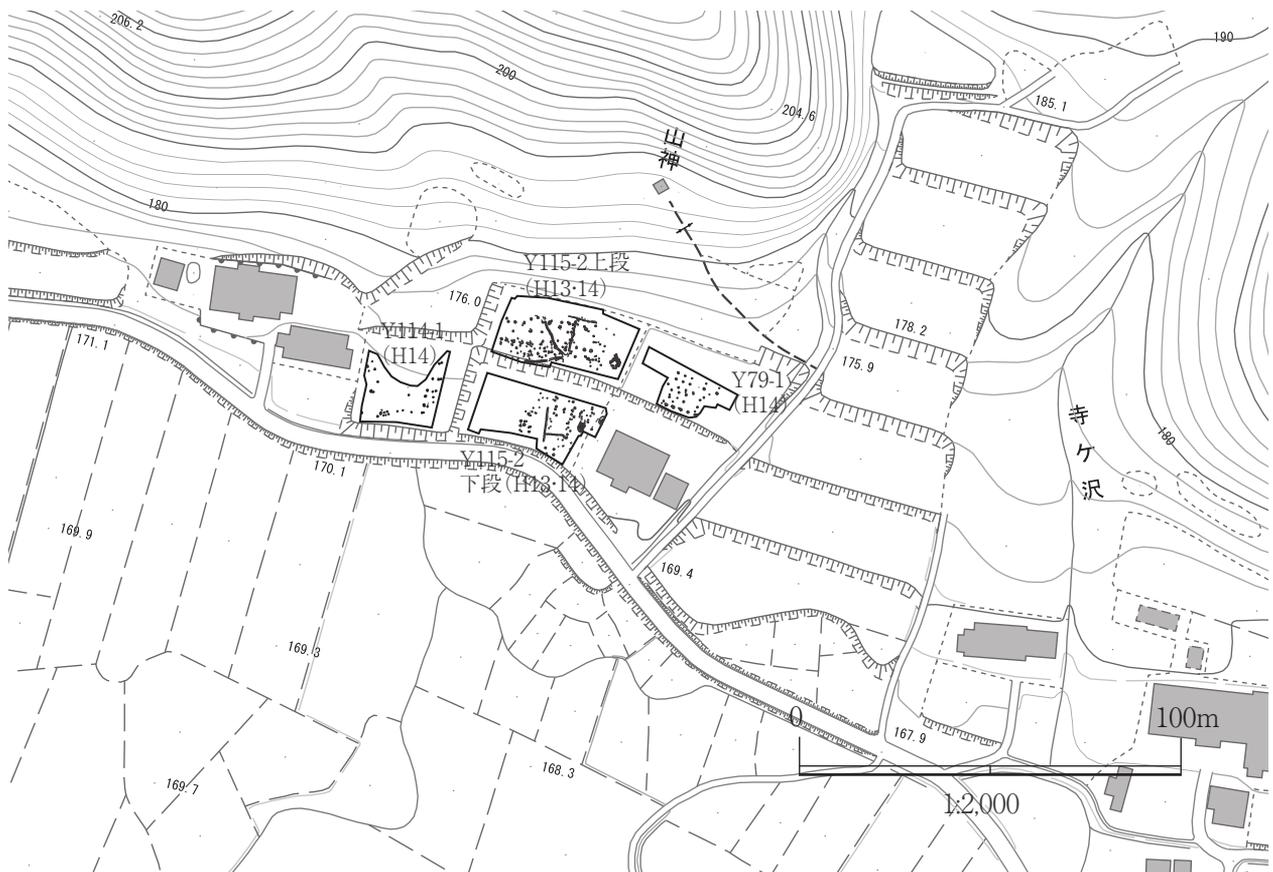


図25 遠西遺跡調査区位置図

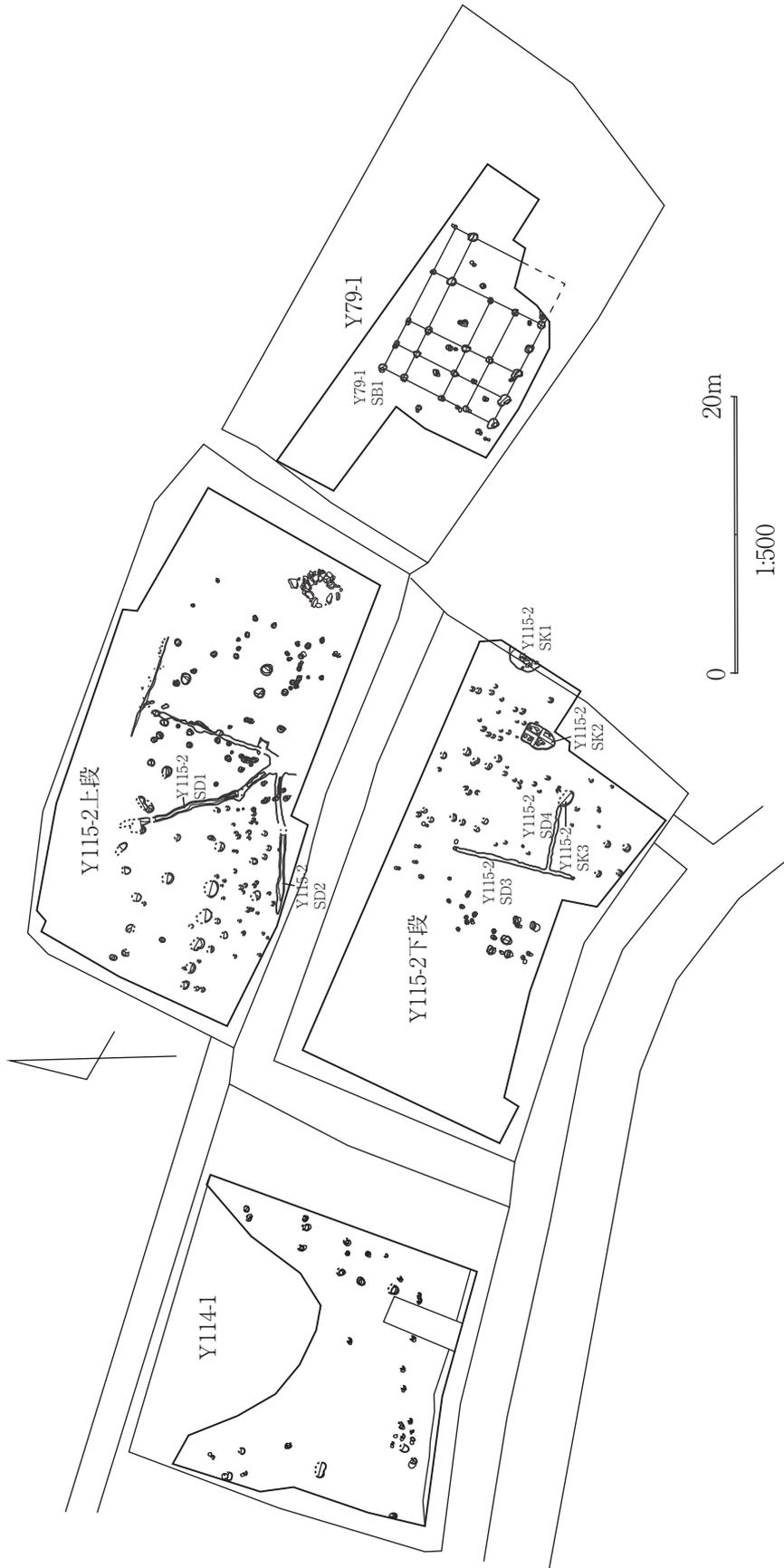


图26 遠西遺跡遺構配置図



写真31 遠西遺跡遠景(南から)



写真32 Y115-2地区下段出土三筋壺片(図24-3)



写真33 Y115-2地区上段出土かわらけ(図24-1)



写真34 Y115-2地区上段出土かわらけ(図24-2)

(6) 要害館跡

本寺の平野部を取り囲む北側丘陵の中央よりやや西寄りに、要害館遺跡がある(図2・3)。『風土記御用書出』(安永四年(1775))には要害館として「竪式拾五間、横式拾四間」「本寺十郎左衛門と申方住居の由申候処年号相知不申候事」と記載される。また、同書には、「要害館未申 高森山法福寺跡」とあり、館跡の南西に時期は不明の寺院跡が存在したことを伝えている。

これまで発掘調査は行っていないが、14年度、周辺の詳細な地形測量を行っている(図27、表

7)。その他、誉田慶信氏は縄張図を作成している(誉田1999)。地形から主郭やその周りを巡る帯郭、空堀などが観察できる。主郭の南端に1m程高い小さな平場があり、そこに近世以降の石祠らしき石造物がある。

葛西氏に属した中世末の城館跡とみられ、また、東端の空堀は土橋で尾根筋とつながっていることから、尾根筋を利用した古道との関連も指摘されている(一関市2004)。

表7 要害館跡調査一覧表

No.	年度	地点	遺構	遺物	報告書	備考
1	14		郭、空堀		市埋報4集	3D地形測量

まとめ

今後、発掘調査により、城館の構造や、それに関連した周辺施設について明らかにする必要がある。また、中世より古い時代に利用されていた可

能性もあり、周辺の古道と合わせた調査も必要であろう。

(二階堂)

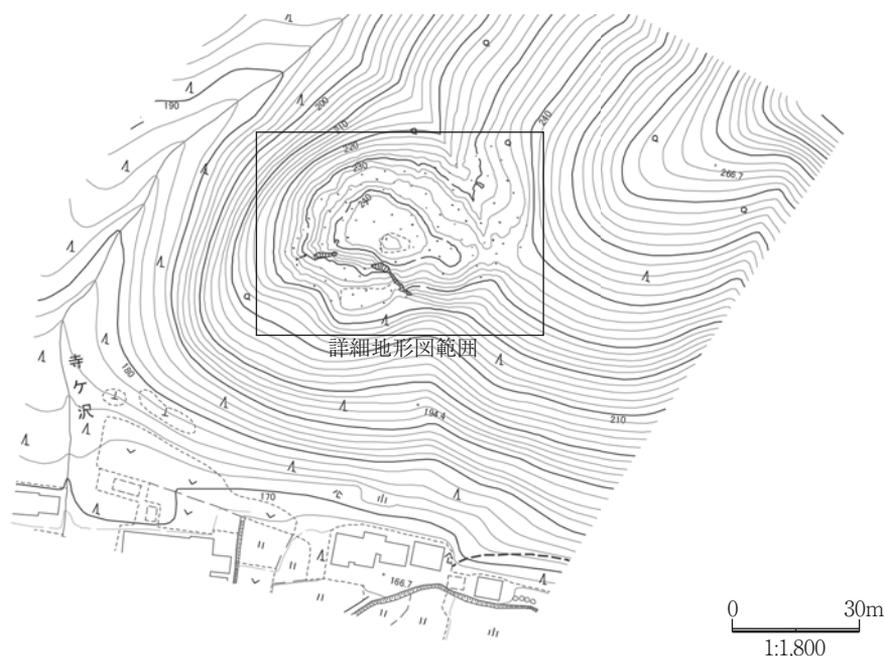


図27 要害館位置図



図 28 要害館地形図

(7) 若神子社

本寺の平野部の中央よりやや東寄り、水田に囲まれた中に、標高約160m、面積約93㎡の微高地があり、若神子社境内と伝えられている(図2・3、写真35)。樹木に囲まれて石祠があり、かつては社が建っていたらしく、石場建ての石材の一部が残る。

『陸奥国骨寺村絵図』の簡略絵図では、絵図の下半部分、「檜山河」(本寺川)と「中澤」の間に南北に通る「道」の脇に「若神子神田二段」の文字があり、その傍に社とみられる建物が描かれている。現在若神子社と伝えられている場所の位置は、本寺川より東側の平野部の中にある点で、簡略絵図と概ね一致する。

『風土記御用書出』(安永四年(1775))には、以下の記載がある。

端郷 本寺

一六所明神

一小名 若^{わか}神^{みこ}子

一勸請 誰と申儀並に年月共に相知不申候
 処吾勝尊小碓尊を奉祭に付二子宮とも
 若宮とも申唱又は吾勝大明神とも申伝
 候前ヶ条村名の処へ御書上仕候吾勝郷
 惣鎮守にて往古は仕置候哉と委細の奉
 申上候

一社地 巖七間
巖五間

一社 南向式尺五寸作

一鳥居 一長床 一額

一地主 樋渡屋敷惣兵衛

一別当 同郡衆徒 中尊寺北本坊

一祭日 七月十日

また『巖美村誌』(1917年)では「六所明神(在小名要害)吾勝尊、小碓尊を奉祭す。二子宮とも若宮とも云ふ」と記載されている。

境内には石の祠が4基あり、北側のほぼ中央に最も大きな祠があり(写真36)、この中央祠には覆い屋が造られ若神子社として地権者により管理されている。この祠の東側側面には「唯干時明治十五年 旧十月十日地主別当 佐々木喜一郎」、西側側面には「石工 五串村 小野寺権右衛門」の文字がある。中央祠の西に2基の石祠と石水鉢(写真37)、南にも1基の石祠があるが、紀年銘等はない。

若神子社の性格については、その名称から、奥羽地方に伝統的に残る口寄せ巫女と関連する可能性が指摘されている(大石1997)。大石氏は、山王窟が若神子社の奥の院の役割を持っており、若神子—骨寺—山王窟を結ぶ信仰ラインを土俗的なあの世とこの世を結ぶもので、それが天台・山王信仰に取り入れられていった、としている。また、吉田氏は若神子社を修験との関わりを強く持ったものと考え、さらにその位置が須川(駒形根)を遥拝する際の方向を指示する標識であったという仮説を立てた(吉田2008)。

発掘調査は、若神子社境内地およびその東・南側の水田で実施している(図28、表8)。

表8 若神子社調査一覧表

No.	年度	地点	遺構	遺物	報告書	備考
1	16	若神子31-2	柱穴		市埋報6集	試掘

発掘調査成果の概要

●若神子31-2地点(図29、表8、調査担当者：工藤武)

若神子社境内の社の東および南に3本のトレンチを設定した。また、境内地の東側及び南側の水田に合わせて12本のトレンチを設定した。

境内トレンチでは、表土層の下に1m近い腐食

土層があり、その下は地山に川原石が不規則に混じる層となる。周辺の水田に設けたトレンチでは、耕作土層の下はやはり川原石の層となる。これらの川原石の層は、本寺川の旧河道あるいは氾濫の痕跡の可能性があるが、その他に遺構・遺物は確認できなかった。

まとめ

現在、若神子社境内と伝えられている地点の発掘調査では、周辺の水田に約1000㎡のトレンチ調査を行ったが、遺構、遺物を確認することはできなかった。

『陸奥国骨寺村絵図』にある若神子社とみられ

る社はどこにあったのか。あるいは、水田の耕作により社の痕跡が失われてしまった可能性もある。

(二階堂)

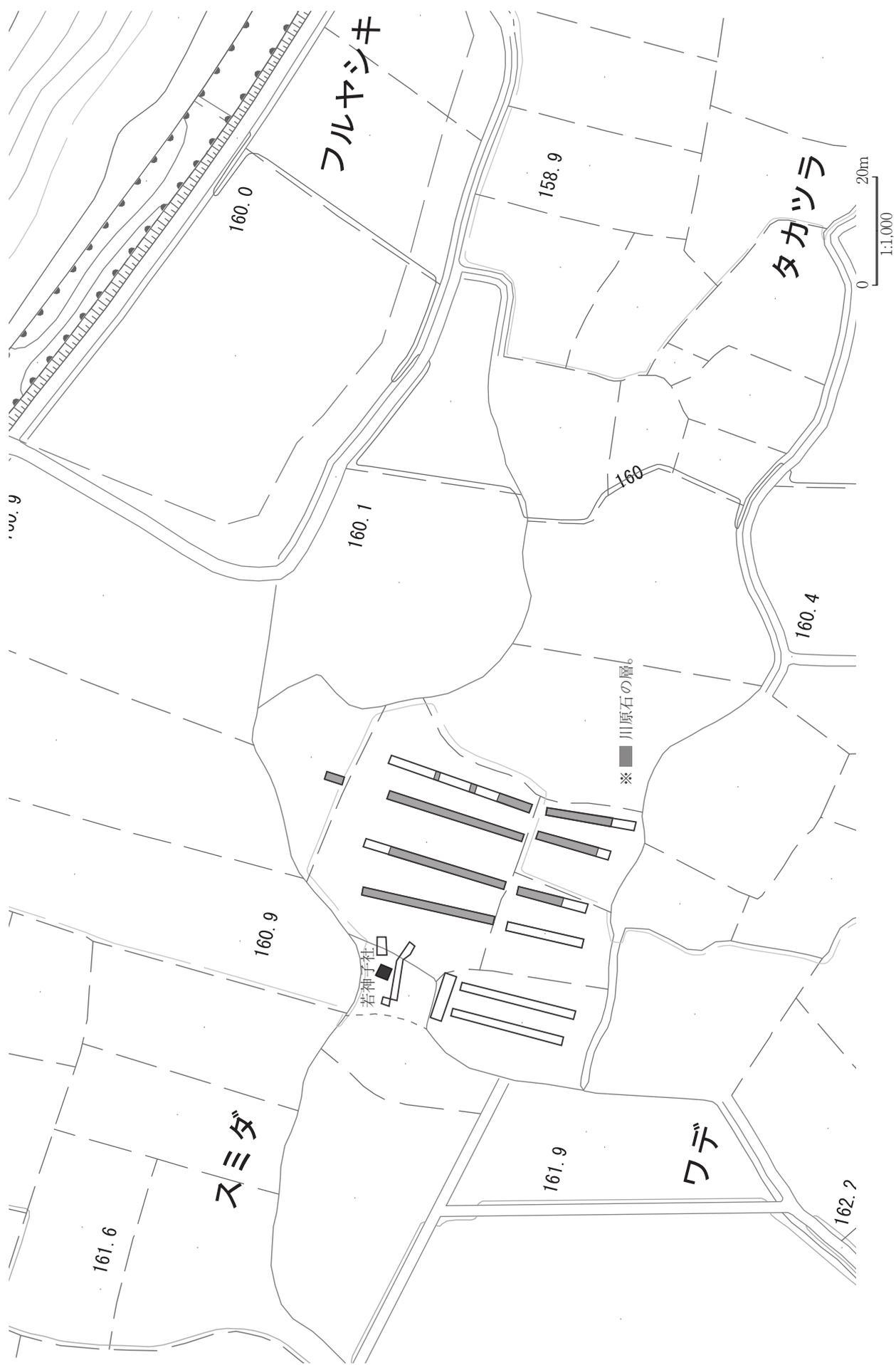


図 29 若神子社調査区位置図



写真35 若神子社遠景（南西から）



写真36 石祠



写真37 石造物

(8) 不動窟

『陸奥国骨寺村絵図』の詳細絵図では、右下（北東）の、平野部の方に張り出した丘陵に「不動石屋」の文字がある。その左側（南）には本寺川が流れ、馬坂新道がその背後（東）を通るように描かれている。

この不動窟（石屋）について『風土記御用書出』（安永四年（1775））には、以下のように記されている。

端郷 本寺

一不動窟

一小学 真坂

一勧請 品々右同断

一境内 一堂

本尊此所高三丈余の大石深五丈余の洞穴有之石を往古より不動窟と申来るに付境

内並に堂本尊無之候事

一鳥居 一長床 一額

一地主 中真坂屋敷弥太郎

一別当 同郡中尊寺衆徒小前沢坊

一祭日 九月九日

不動窟の性格については、その名称から不動明王を祀った窟と考えられ、『巖美村誌』（1917年）では「一名鬼ヶ窟（在小名中真坂）夷賊高丸の居所、不動尊を安置す」と伝承を記している。

不動窟と伝えられる洞窟（図2・3、写真38）は、本寺の平野部を取り囲む北側丘陵の北東部、やや南側に向かって張り出した部分の中腹、標高180m程のX=-113,740m、Y=11,580m付近所にある。入口の幅は約3m、高さ約3m、奥行きは約9m程で奥に行くにつれて低く狭くなる。平面形は若干湾曲しており、自然の洞窟を利用したものとみられる。本寺川の北側の丘陵中腹にはこれ以外に洞窟はなく、絵図の「不動石屋」としてよさそうである。

発掘調査は、窟内および窟前面にあるテラス状の平場で実施している（図30、表9）。その他、23年度には、窟の内部を含めて三次元測量を行い、詳細な地形を記録した（図31～34）。

表9 不動窟調査一覧表

No.	年度	地点	遺構	遺物	報告書	備考
1	23	下真坂80-2		縄文・弥生土器、近世銭	市埋報16集	3D地形測量
2	24		なし	縄文土器	市埋報17集	
3	25		テラス状平場、柱穴	縄文土器、近世銭	市埋報18集	

発掘調査成果の概要

主な遺構（調査担当者：鈴木弘太、後藤円、山川純一、二階堂里絵、澤目雄大）

●窟内部 窟の奥の壁面に、灯明具を置くためのものとみられる穴や、入口部分には扉を設置した痕跡の可能性がある筋状の加工痕がみとめられる。手前から奥へ縦断するトレンチを1本、それに直交するトレンチを2本設定した（図30、写真39・40）。窟は、自然の洞窟を利用したものと考えられ、その底面は壁面と同一の岩石で、奥から入口付近

まで緩やかに傾斜し、そこから外に向かって急になることを確認した。内部の堆積土も同様に、最奥ではごく薄く、入口に向かうにつれて厚くなる。

●窟外部 窟外前面の斜面のほか、窟入口部の左右に2カ所のトレンチを設定した。西側の25-1トレンチでは窟の入口付近から岩盤に沿うようにテラス状の緩斜面が存在することを確認した（図30、写真41）。この緩斜面は南（窟の外側）に1.8m続き、そこから急激に落ちる。西側はトレンチの幅の1.4

mは確認したが、外側にさらに延びるとみられる。東側の25-2トレンチでは、緩斜面はなく、窟外側の壁はほぼ垂直に切り立っている。

柱穴 25-1トレンチの岩盤緩斜面上でP 1～3の3基の柱穴を確認した。岩盤を10～20cm程穿ったもので、西側に向けた「L字状」の配置である。柱穴はいずれも円形で直径は約0.3m、底面レベルは緩斜面の上方にあるP 3が約178.3mで緩斜面の下端にあるP 1・2が約178.0mである。柱間尺は、P 1とP 2が約0.5m、P 2とP 3が約1.5mである。P 1・2の東西列はさらに西に延びることが推測されたため、トレンチを一部西側に拡張したが、柱穴は確認されなかった。

これらの柱穴は、窟前面に設けられた縁のような施設であった可能性がある。柱穴から遺物は出土していない。岩盤緩斜面上を覆う層の上面の精査ではこれらの柱穴は検出できなかったが、柱穴覆土はこの層とよく似ているため、その上面から

まとめ

不動窟の内部と前面に発掘調査を実施し、入口の西側前面の岩盤がテラス状の緩斜面になっており、そこに柱穴が穿たれ、何らかの施設が設けられていた可能性があることがわかった。しかし、その構築年代は不明である。

遺物は縄文・弥生時代のもののほかは、近世銭

掘りこまれていた可能性もある。この施設の構築年代は不明である。

出土遺物(表9)

調査前の窟の内部はほとんど何もない状態であり、地元の方からの聞き取りでは、50年くらい前に内部にあったものを全部片づけ廃棄してしまったが、それが何であったのかは覚えていないということであった。

窟外部からは縄文・弥生土器の小片が71点、磨石とみられる石片、スクレイパー未製品各1点、剥片11点、鉄製品1点のほか、新寛永(寛文八年(1668)初鑄)3点、古寛永の銅一文銭(寛永十三年(1636)初鑄)1点、合わせて4点の寛永通宝が出土した。寛永通宝は、窟の入口付近の表土に近い土層から出土しており、窟の信仰に関わるものとみられる。一方、縄文・弥生土器は窟前面の斜面に堆積した土の深い部分から出土しており、小片であることから、周辺からの流れ込みによるものである可能性が高い。

が数点出土しているだけで、古代から中世のものはない。しかしながら、近世以降の地誌では一貫して「不動窟(石屋)」として認識されており、窟への信仰は連綿と続いてきたものとみられる。

(二階堂)

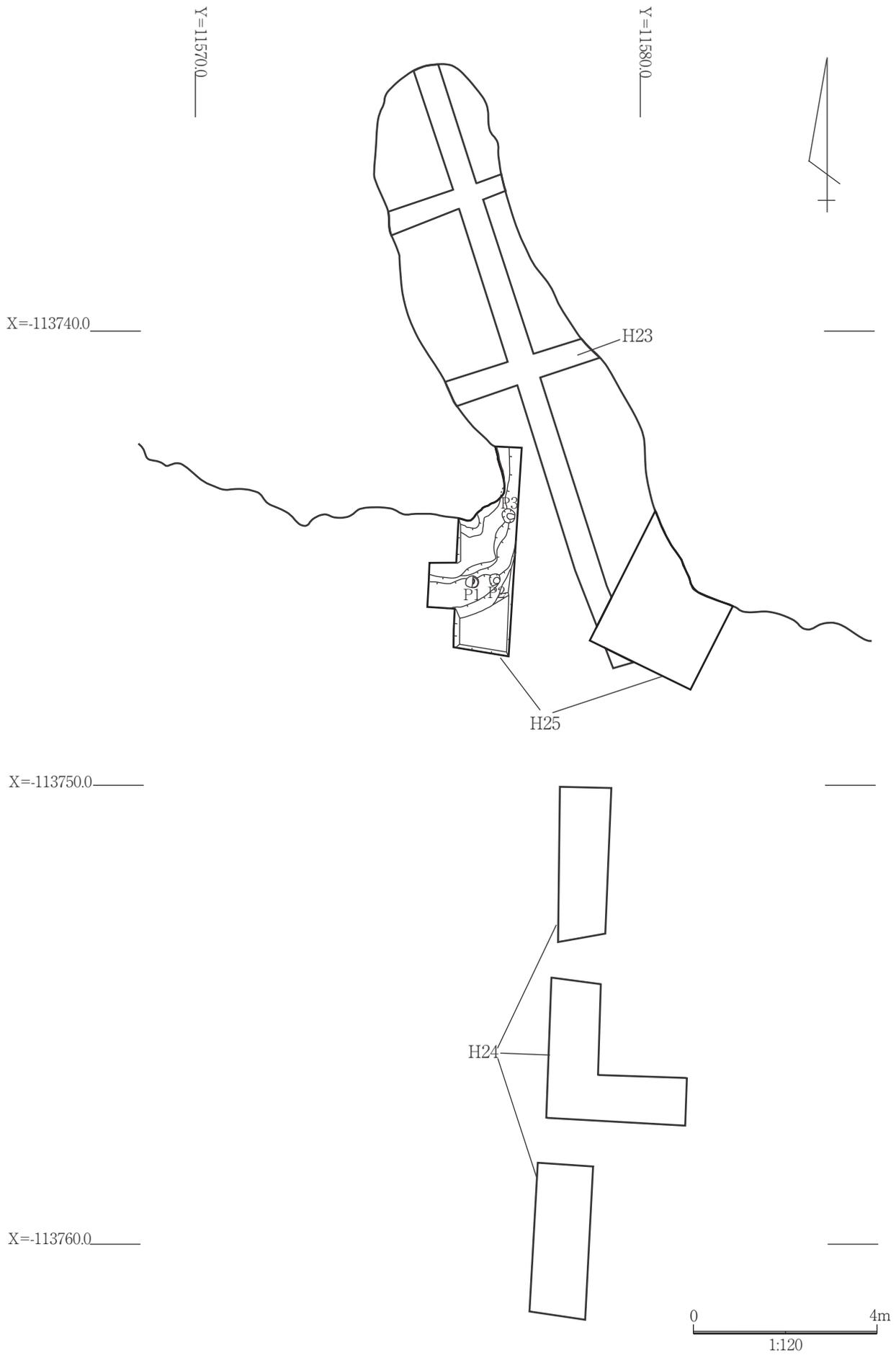


図30 不動窟調査区位置図

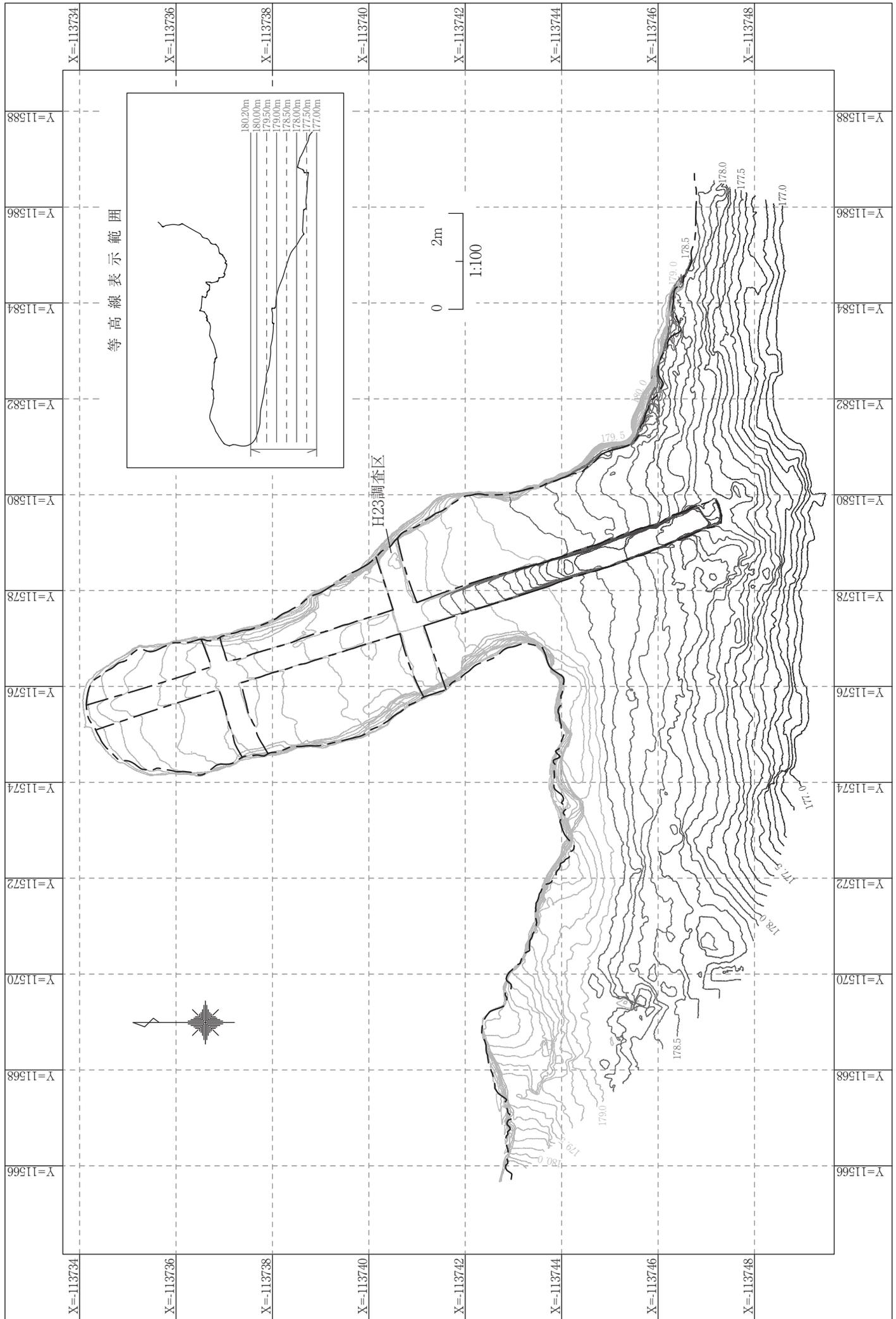


図 31 不動産平面図

描画範囲図

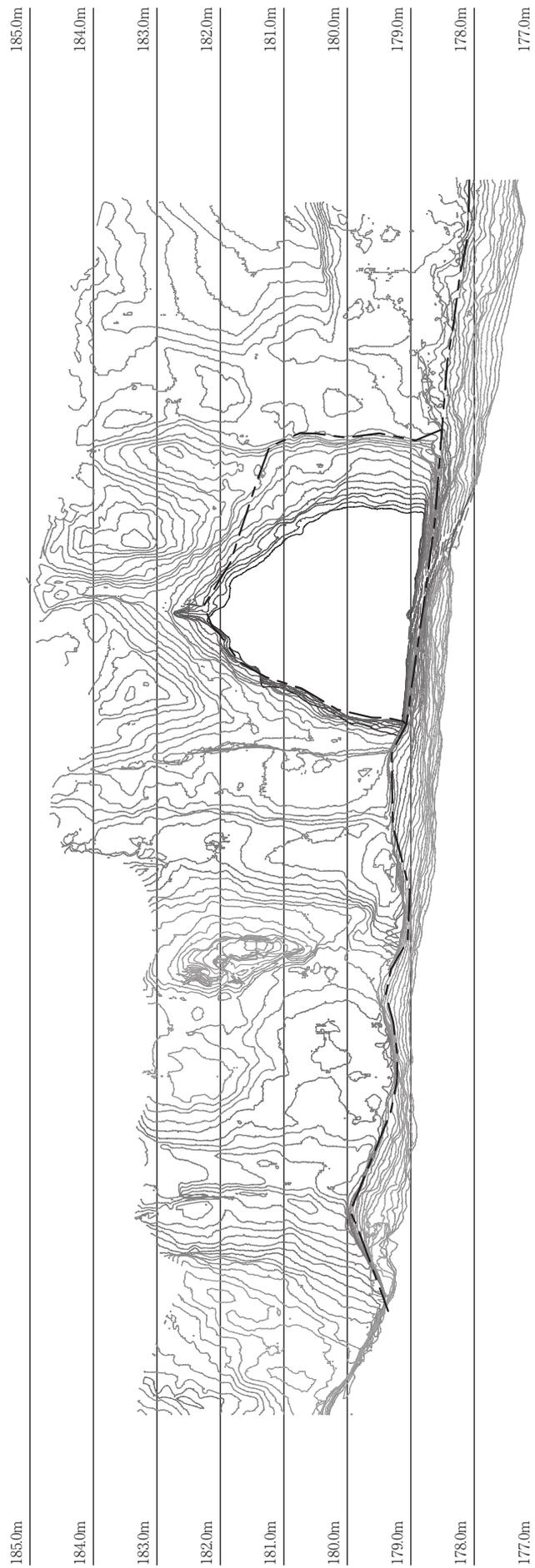
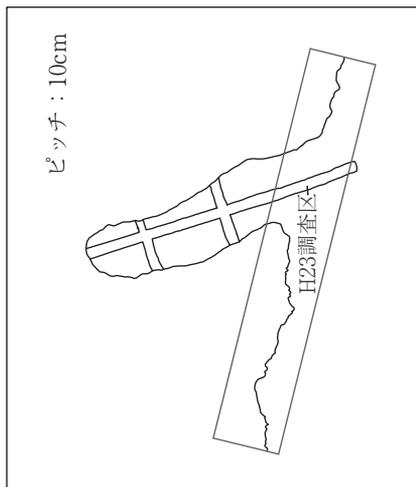


図32 不動齋正面図

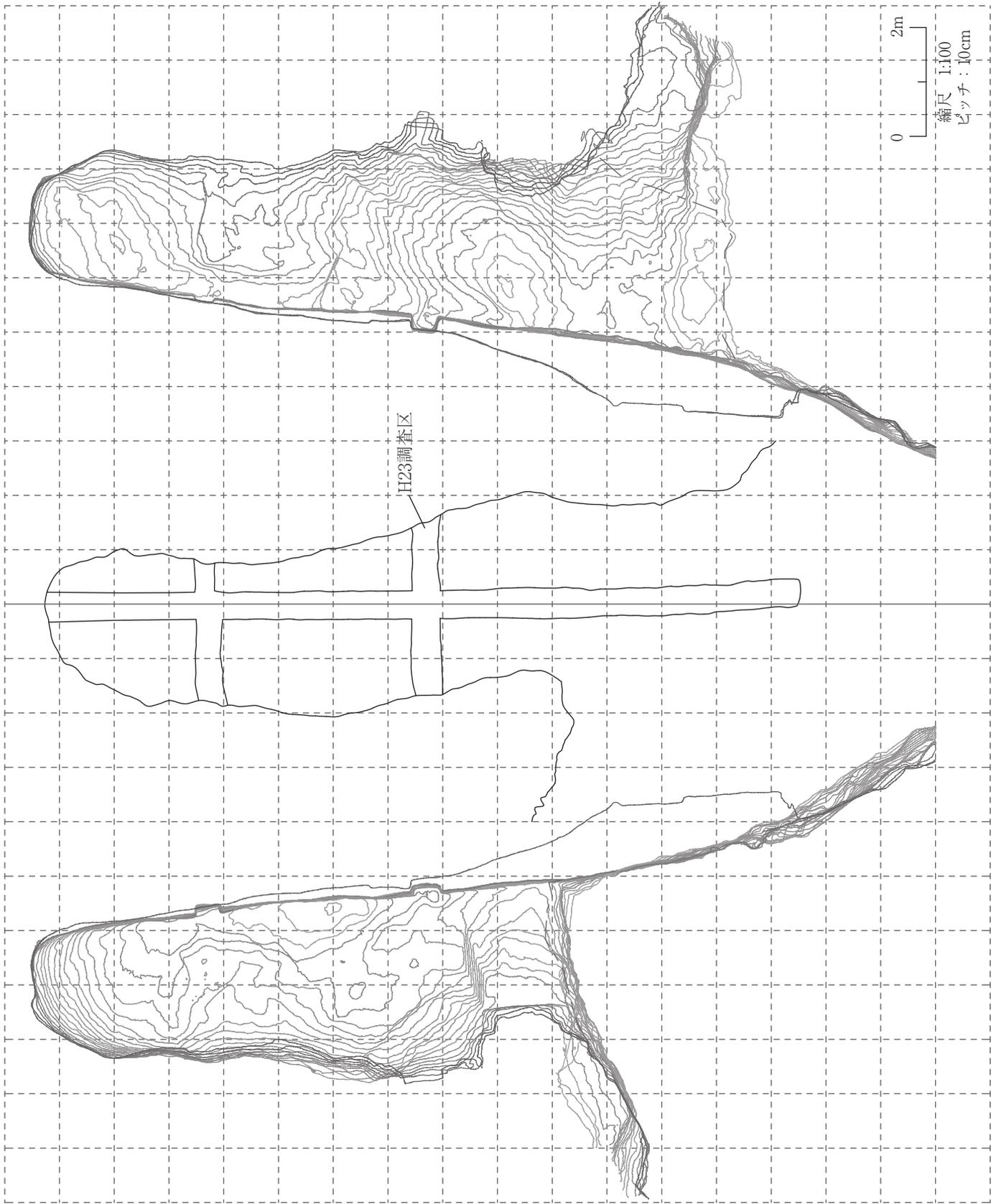
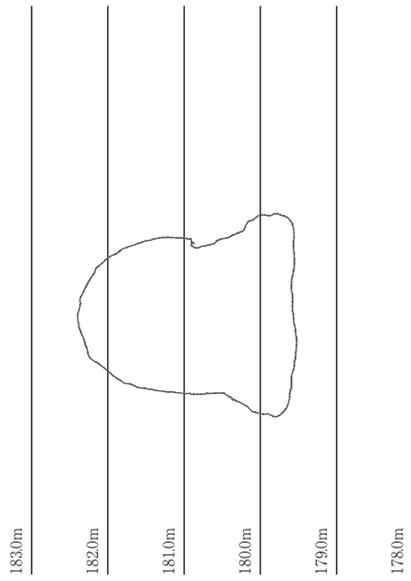
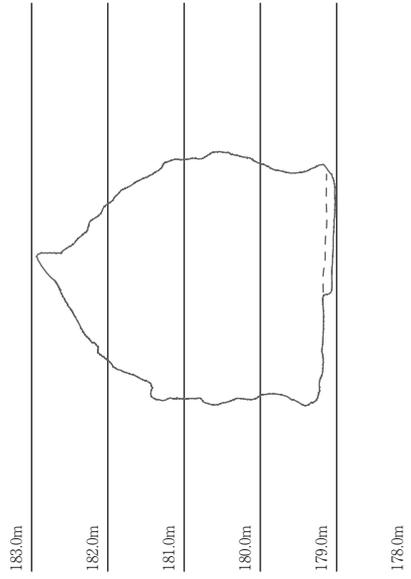


図 33 不動産平面図・側面図

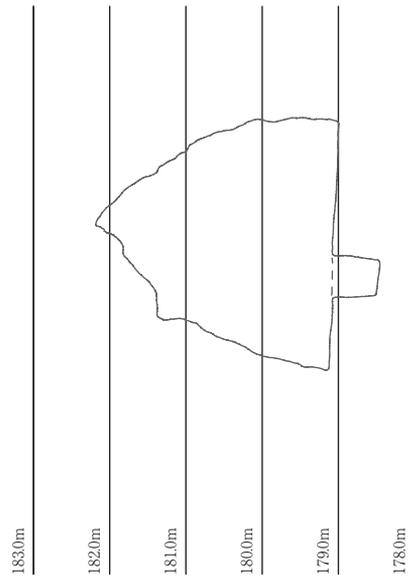
A-A' 断面



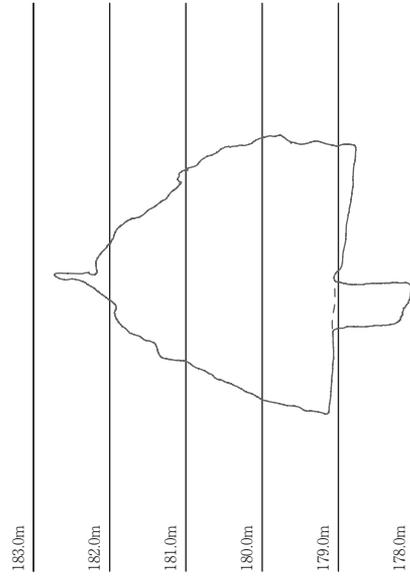
B-B' 断面



C-C' 断面



D-D' 断面



断面位置図

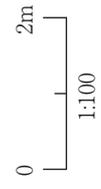
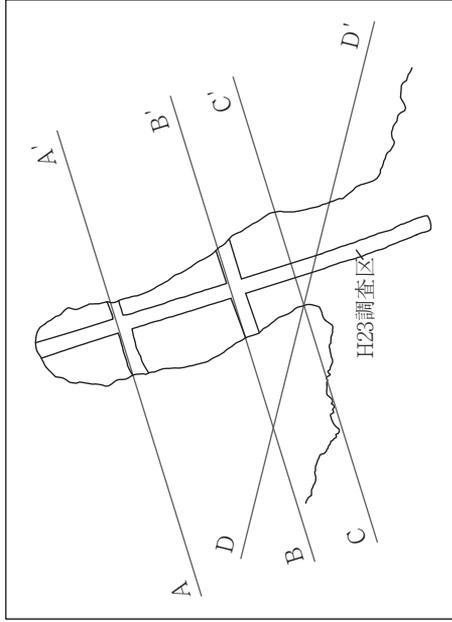


図34 不動産断面図



写真38 不動窟入口(南から)



写真39 窟内部の調査状況(南東から)



写真40 窟内部調査状況(北から)



写真41 窟南西外部柱穴検出状況(南から)

(9) 慈恵塚及び大師堂(拝殿)

慈恵塚及び大師堂(拝殿)(図2・3)は、本寺の平野部を取り囲む北側丘陵の東端、「逆芝山」と呼ばれる山に位置する。慈恵塚は標高210m付近の頂部近くの小規模な平場(図35・36、写真42～44)に、大師堂は裾の標高151m付近にある(写真46)。

慈恵塚には慈恵大師の髑髏が埋められた場所、という伝承があり、これは鎌倉時代の『撰集抄』にある「慈恵大師白骨女人授法花事」の説話が基になっている。その内容を要約すると、以下のようなものである。【陸奥国平泉の郡の柳という里に逆芝山がある。この村の娘が法華経を学びたいのに教えてくれる人もいなくて嘆いていたところ、ある夜天井の上から声がした。「経文を読みたければ、経を求めて前に置け、私がここにいて教えよう」その声に導かれ、八日間で全て習い終わった。娘が天井を見ると、舌のある髑髏が、「私は延暦寺の昔の僧、慈恵大師の頭である、お前の志に感じ入ってここに来て教えたのだ、私を急いで逆芝山に送れ」と言う。娘は泣く泣くこの山に納めて塔婆を建てた。この娘は尼になり、庵を結んだが、二十数年前に亡くなった。その庵の形は今もある。】

中世の文献に、慈恵塚に関する記載は他にみられない。また『陸奥国骨寺村絵図』には、詳細絵図に「大師堂」の文字と建物の図、簡略絵図に「慈恵塚」「御拝殿」の文字と建物の図があるが、これらは墨色や筆致の差異から後世に書きこまれたものである可能性が指摘されている(大石2004)。大師堂拝殿は明治以降に建立されたものと考えられており(一関市博物館2014)、そうであるとすれば絵図の加筆はそれ以降に行われたことになる。ただ、詳細絵図をよく見るとお堂の下に表面に石が葺かれた塚らしき絵があり、これについては最初から描かれていた可能性もあるだろう。

骨寺の慈恵塚についての記載がみられるのは、近世地誌類である。『封内風土記』(明和九年(1772))

では『撰集抄』の内容が引用されているが、慈恵大師ではなく慈覚大師となっている。相原友直の『平泉雑記』(安永二年(1773))では「慈恵大師白骨女人授法花事」の説話について偽作であるとし、撰集抄の「柳の里」の所在はわからない、としている。『風土記御用書出』(安永四年(1775))では、高さ四尺、廻八間とあり、骨寺郷(村)の由来で、慈恵大師の御骨が葬られた所であるとし、口中の病にご利益があると記している。また現在、慈恵塚の傍には安永五年(1776)に中尊寺弘台寿院別当延寿院覚天が建てた『慈恵大師塚碑』(写真45)が建っている。その碑文には覚天が『撰集抄』を読んで逆芝山にあった塚が慈恵大師の髑髏が埋められた塚であり、それが村名の由来であることを発見した、という内容が記されている。これらの記載から、本寺地区の塚と『撰集抄』の慈恵大師伝承が結び付けられたのは近世後期であったと考えられる。

慈恵塚周辺には紀年銘のある石碑が5基ある。前述の中尊寺弘台寿院別当延寿院覚天による安永五年慈恵大師塚碑(写真45)が最古で、その傍にある石碑には天明元年(1781)の年号と「□□恵大師□」の文字が読み取れる。塚の東側に延びる参道の傍らに灯籠2基が並び、基礎に「奉獻燈□」「安政三年」(1856)と「安政三年□ 九月」とある。また、塚の北側に「若木大権現」の碑があり「安政戊午年」(安政五年(1858))とある。近世地誌類の記載とこれらの石碑の年代は18・19世紀に集中することから、18世紀の風土記編纂の事業の中で逆芝山の塚と慈恵大師伝承が結びつけられ、大師の再顕彰として石碑が建てられ、参道が整備されたものと考えられた(一関市教育委員会2011)。

慈恵塚本体は、東西約10m、南北約8mの楕円形で最大比高は約2.2mあり、表面に石が葺かれている。その頂上には石祠があり、周りには玉垣状に石材が組まれ、頂部へ登る石の階段もある。吉田敏弘はこの塚について、『陸奥国骨寺村絵図』

に描かれている「馬坂新道」の東端、村への入口に位置する象徴的なものであり、ここでは護摩焚きなどの儀式が行われていたとみる(吉田1999)。

慈恵塚及び大師堂(拝殿)について、発掘調査は未実施であるが、慈恵塚については現状確認調査を実施している(表10、図34・35)。

表10 慈恵塚及び大師堂(拝殿) 調査一覧表

No.	年度	地点	遺構	遺物	報告書	備考
1	22	下真坂 25-2・5	塚	近世・近代陶磁器、近世銭	市埋報13集	電気・地中レーダー探査、3D地形測量
2	24				市埋報17集	石材復旧

発掘調査成果の概要

●下真坂 25-2 地点(調査担当者:鈴木弘太、後藤円)

22年度に、塚の表面に組まれた石材を一時取り外し、地形測量を行った。地表面の観察により、塚の周囲には溝とそのさらに外側に高さ約0.6mの周堤が廻ることを確認した。周堤は雨水により削られ、東側の一部は重機により壊されている。

塚本体の表面に葺かれた石の中には中央に小孔があるものが数点混じっていた。これは「穴あき石」と呼ばれる信仰に係るものとみられ、県内では西和賀町薬師神社(穴薬師)で確認できる(岩手県立博物館2010)。塚の周囲に組まれた玉垣の土台石材の下の表土層から近世陶磁器片が出土していることから、玉垣、石祠、階段はこれ以降に構築されたものと考えられるが、塚本体の構築年代はこ

まとめ

慈恵塚の現状確認調査により、玉垣など塚の整備が行われたのは近世以降であることが確認された。前述したように、近世地誌類と石碑から、18世紀の風土記編纂の事業の中で逆芝山の塚と慈恵大師伝承が結びつけられ、大師の再顕彰として石碑が建てられ、参道が整備されたものと考えられている。慈恵塚の整備も、この一連の動きの中で行われたものであろう。これは、出土遺物の年代観とも合致する。

しかし、塚本体については、年代、性格等は未詳である。その規模や形状は、陸奥国で12世紀後

れより古い可能性がある。

塚から東へ延びる参道は、300m程確認できるが、それ以东は雑木に遮られ確認は困難であった。

その他、塚とその周辺に対し電気探査および地中レーダー探査を行った。その結果、塚の中央部の深度1m前後の位置に金属ではないものが埋納されていることが推測された。

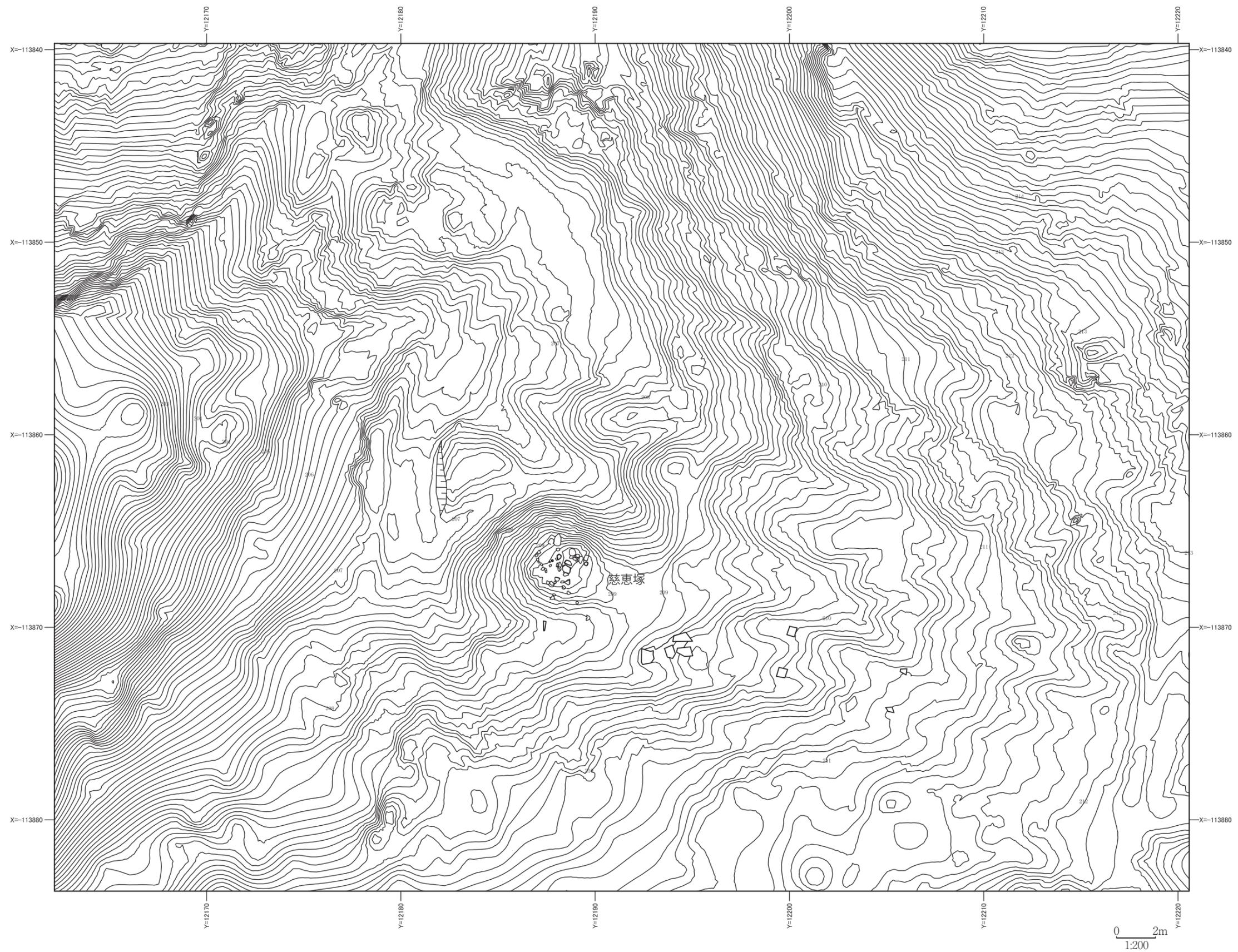
出土遺物(表10)

頂部にある石祠の西側の表土層から金属製の香炉、灯明具、鉄製火箸が出土したほか、玉垣の土台石材下の表土層から近世陶磁器片のほか、寛永通宝の新寛永(寛文八年(1668)初鑄)11点、仙台通宝(天明四年(1784)初鑄)5点、合わせて16点の近世銭が出土した。

半に多く築かれた大規模なマウンドと周溝を持つ経塚と共通する(関根2009)。また、奥州藤原氏は交通の要衝に多く経塚を築いたとされており(八重樫2002a)、吉田敏弘氏のいうように骨寺村への入り口の象徴として、その場を選んで築かれた可能性がある。

塚のある平場も人為的に造成された可能性もあり、これらの構築時期について、今後確認調査を行う必要がある。

(二階堂)



3Dレーザースキャナーによる図化。ただし塚の石等については写真測量による。
 東北地方太平洋沖地震に伴う地殻変動による座標変換済。但し標高は未変換（平成25年9月）

図35 慈恵塚周辺地形図(石材移動後)

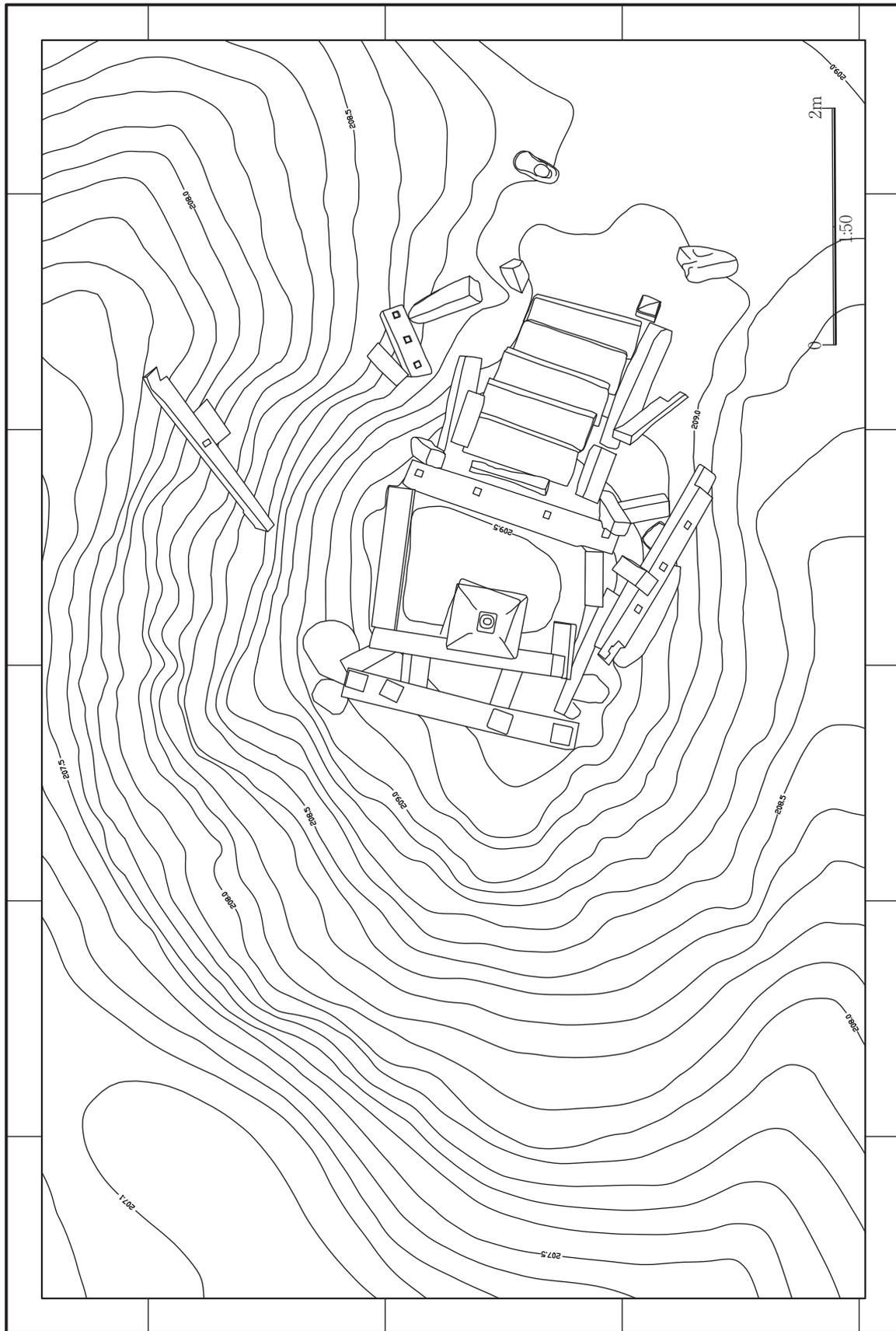


图 36 慈惠塚地形図(石材移動前)



写真42 慈恵塚現況近景(東から)



写真43 石材移動後の慈恵塚近景(東から)



写真44 石材移動後の慈恵塚遠景（北西から）



写真45 「慈恵大師塚碑」安永五年（1776）



写真46 慈恵大師堂（拝殿）

(10) その他の地点

『陸奥国骨寺村絵図』の『詳細絵図』においては、平野部には神社以外に在家を示す建物や田の絵が多数描かれている。地元の伝承や地名、屋号等を参考に、居住の可能性がある山裾や微高地を対

象に発掘調査を行っている。本寺の平野部において行われたその他の発掘調査の成果の概要について、地域ごとに記載する。

表11 その他の地点調査一覧表

No.	年度	地点	遺構	遺物	報告書	備考
1	11	沖要害72	円形石組井戸、円礫集中	古銭の縁辺部片?	市埋報1集	
2		沖要害77	総柱の大型掘立柱建物,柱列			通称「中屋敷」
3		沖要害52-1				
4		駒形40-2、44	造成層			
5		駒形85-1	柱穴			通称「禮田(レイタ)」
6		駒形86	乾田?			
7		駒形89-2	礫の集中			
8		駒形96-1				
9		駒形107-1				
10	12	中川28-1			市埋報2集	
11		中川35				
12		要害146-3				
13		要害147-2				
14	13	要害23			市埋報3集	
15		要害54-1	近世板蔵の基礎			
16		要害69-1				伝法福寺
17		要害70	柱穴列、井戸、鍛冶関連施設? (焼土、炭化物のプラン)			伝近世屋敷
18		要害72				伝近世屋敷
19		要害118				
20		要害119				
21	14	要害127-2			市埋報4集	
22	18	若神子81			市埋報2集 (骨寺8集)	
23		若神子85-3				
24		若神子86-1				
25		若神子86-4				
26		若神子87-1				
27		若神子88-1				
28		若神子90-4				
29	若神子92-2					
30	19	駒形151-1、153-1	溝	縄文土器、石器	市埋報9集	
31	20	中川19-1	土坑	縄文土器、石器	骨寺村荘園景観保全農地整備事業に伴う緊急発掘調査	
32		字要害59-1	柱穴			
33	23・24	要害194-1・2	柱穴、土坑	土師器、須恵器、近世磁器		放射性炭素年代測定(AMS法)、樹種同定

●駒形・中川地区

平野部の西側である。

・駒形40-2、44地点(図37、調査担当者：工藤武)

「テラサキ(寺崎)」の屋号を持つ屋敷の西側で、平泉野台地と呼ばれる丘陵の南東の山裾に位置する。一部に造成の痕跡を確認したが、その他に遺構、遺物はない。

・駒形85-1、86、89-2地点(図39、調査担当者：工藤武)

駒形85-1地点は本寺川に隣接して南側、地元では「レイタ(禮田)」と呼ばれる場所である。「レイタ」について、『陸奥国骨寺村絵図』の『簡略絵図』の中心近くに「霊田二段」の文字が、『骨寺村在家日記』にも「れい田」の記載があり、それらと関連する可能性がある。現水田耕作土の下から掘立柱建物の柱穴と柱根の残存を確認した。出土遺物はなく、年代は不明である。

駒形86・89-2地点はその南側に位置する。現水田耕作土の下に黒色土層の広がりを確認した。また、礫の伴う落ち込みを確認し、その上面から時期不明の銅製品や骨片が出土した。

・駒形96-1、107-1地点(図39、調査担当者：工藤武)

遺構、遺物は確認できなかった。

・駒形151-1、153-1地点(図37、調査担当者：工藤武)

『陸奥国骨寺村絵図』の簡略絵図で平野部の左下部(南東)に上から下(西から東)に延びる線とともに「中澤」の文字がある。地元でこの「中澤」とされている低地の南側に沿った微高地である。簡略絵図では、「中澤」の左(南側)には「野畠」という文字があるだけである。

発掘調査の結果、遺構は確認できなかった。表土及び、表土の下の黒褐色土層から、縄文土器片、石器、剥片が少量出土した。

・中川19-1地点(図37、調査担当者：後藤円)

平泉野台地と呼ばれる丘陵の北東の山裾にある地元で「ウナザ」と呼ばれる場所の北側に位置する。また、この付近には「ウナダ」屋敷があったとされ、「ウナダ」とは、宇奈根社の神田である、とする見解もある(大石1984)。

包含層 黒色土層の広がりを確認した。縄文土器片、石器、剥片が出土した。

土坑4 長軸1.2m、短軸0.4m、深さは0.5mの楕円形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。縄文土器片が1点出土した。陥穴とみられる。

・中川28-1、35地点(調査担当者：工藤武)

県道を挟んで梅木田遺跡の南西に位置する。遺構、遺物は確認できなかった。

●要害・沖要害地区

平野部の中央部付近である。

・要害23、54-1、69-1、70、72地点(図38、調査担当者：工藤武)

要害館の南西の山裾で寺が沢と呼ばれる沢が入る。直西には遠西遺跡がある。『風土記御用書出』(安永四年(1775))に「要害館未申 一高森山法福寺跡」とあり、館跡の南西に時期は不明の寺院跡が存在したことを伝えている。

発掘調査の結果、昭和初期に解体したという板蔵の基礎、年代不明の柱列、井戸、焼土と炭化物の集中する溝を確認した。出土遺物はない。

・要害59-1地点(図38、調査担当者：後藤円)

柱穴、土坑とみられる遺構を多数確認したが、建物は想定できない。出土遺物はない。

・要害146-3、147-2地点(調査担当者：工藤武)

遺構、遺物は確認できなかった。

・要害127-2地点(調査担当者：工藤武、小巖弥一)

遺構、遺物は確認できなかった。

・要害194-1、194-2地点(図37、調査担当者：後藤円、山川純一)

伝ミタケ堂跡のある北側丘陵の西端、その山裾にある水田である。柱穴、土坑を確認した。柱穴のひとつに柱材が残存しており、放射性炭素年代測定(AMS法)を行った結果、15世紀末～16世紀のものとして想定された。また、柱穴のひとつから土師器片1点が出土したほか、遺構外から土師器片、須恵器片、近世磁器片が各1点出土した。土師器2点はいずれもロクロ成形の甕の胴部片で、9世紀後半頃のもの、須恵器は外面に格子状のタタキ目がある甕の破片で9世紀頃のものと思われる。

・沖要害72、77地点(図39、調査担当者：工藤武)

石組井戸 直径1.4mの円形で、底まで掘り下げて調査していないが、1.0m以上、壁は底までほぼ垂直に下がる。壁面に円礫を乱石積に積んで構築している。

掘立柱建物(図41) 東西5.5m・南北12.6m、東西3間・南北7間の総柱の掘立柱建物である。西側に3.6mと5.5m離れてこの建物と平行する柱列がある。出土遺物はなく、年代は不明である。

・沖要害52-1地点(図39、調査担当者：工藤武)

現代の水田より古い水田の床面とみられる層を部分的に確認したが、年代は不明である。出土遺物はない。

●若神子地区

若神子81、85-3、86-1、86-4、87-1、88-1、90-4、92-2地点(図40、調査担当者：工藤武、後藤円)

平野部の東端、本寺川に隣接して西側に位置する微高地の周辺である。発掘調査の結果、遺構、遺物は確認できなかった。



図 37 調査区位置図 (本寺平野部西部)



図 38 調査区位置図 (本寺平野部北部)

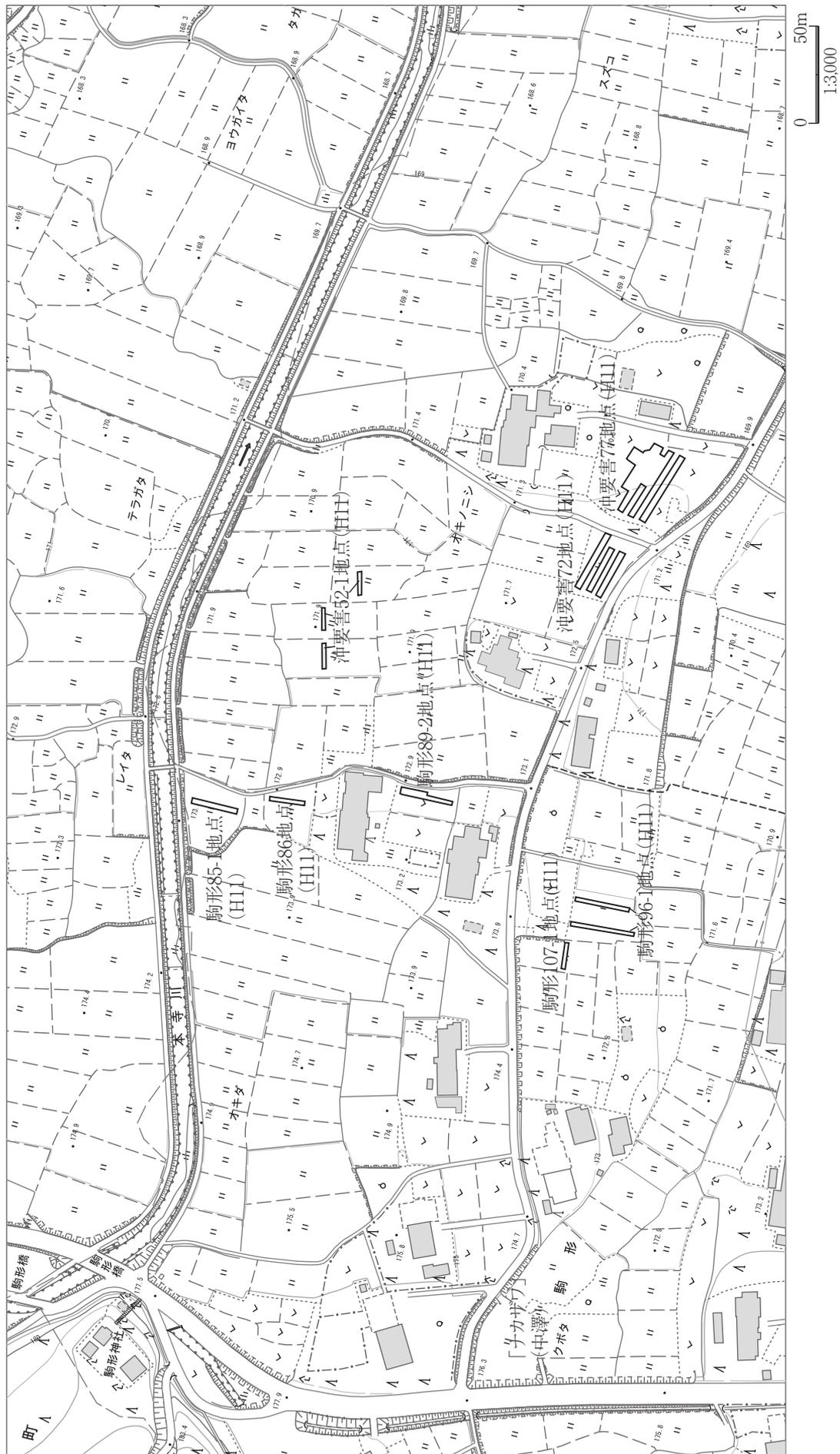


図 39 調査区位置図 (本寺平野部南部)

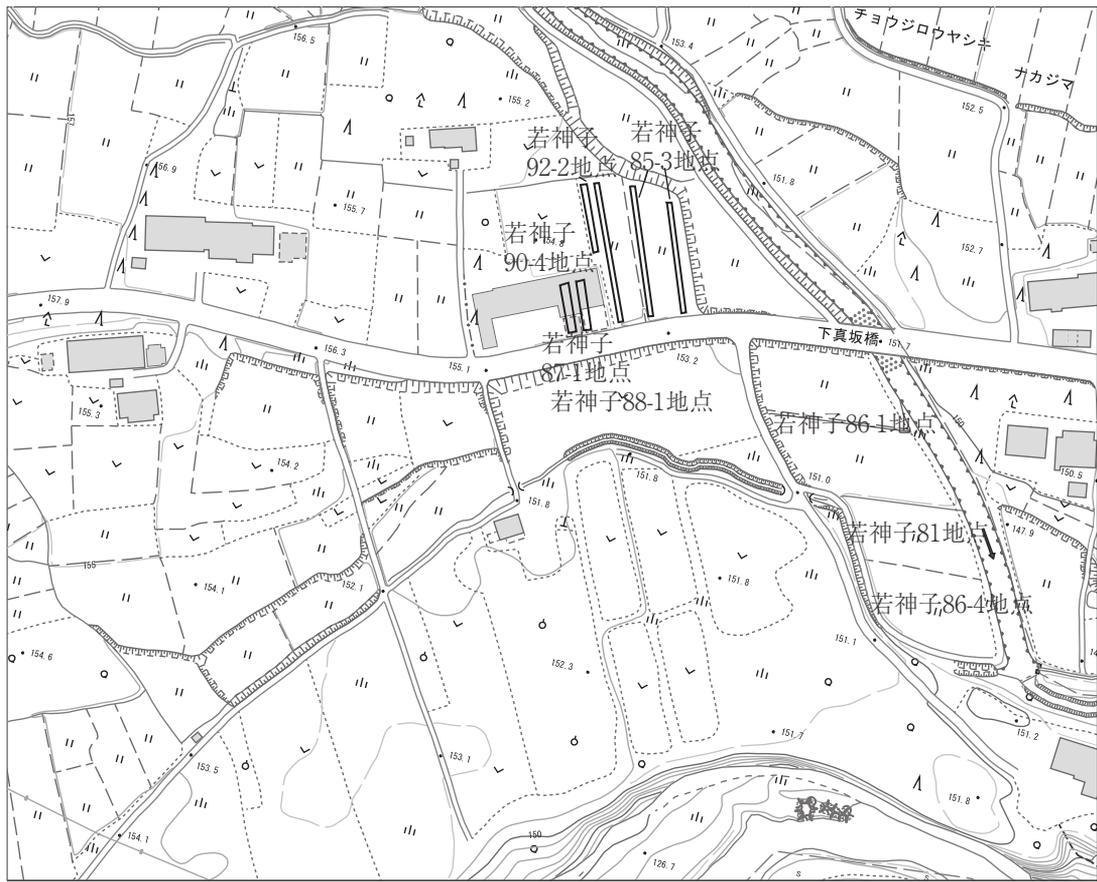


図 40 調査区位置図 (本寺平野部東部)

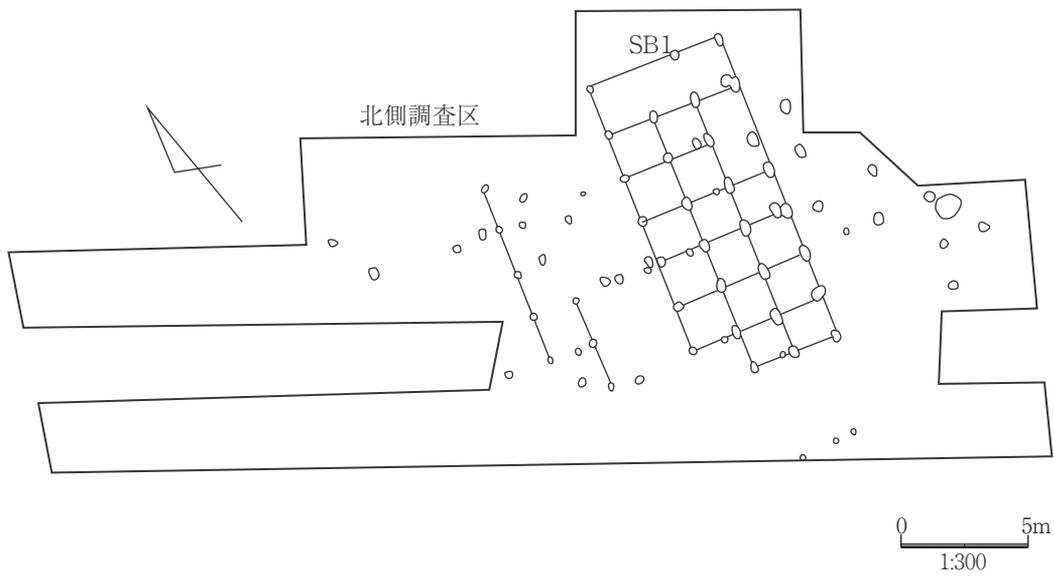


図 41 沖要害 77 地点 SB1

Ⅲ 総括

1 縄文・弥生時代の遺物

(1) 縄文時代

この時期の遺物は、骨寺村荘園遺跡の発掘調査地点のうち、16地点から出土している(図42)。内訳は、土器・石器ともに出土した地点が11地点、土器のみ出土した地点が1地点、石器のみ出土した地点が4地点である。地形的にみると平野部(微高地)は1地点のみで、そのほかは全て丘陵部にある。

旧石器時代～縄文時代早期の遺物は確認できず、平成23年度に白山社及び駒形根神社(駒形5地点)の1号性格不明遺構・1号土坑から出土している前期初頭～前半段階の土器(深鉢)が最古である。胎土に植物繊維を混入し0段多条文を施すもの、撚糸文が斜位・横位に複数回施され部分的に網目状をなすもので、石匙を伴う。これに類するものは、26年度に調査した白山社及び駒形根神社(中川6地点)からも出土しており、同様の年代が与えられよう。また、不動窟の26年度調査では、地文に撚糸が押捺(縦位)され、小突起をもつ隆帯が貼り付けられる深鉢の口縁部片が出土しており、これもこの時期にあたとみられる。

(2) 弥生時代

弥生時代の遺物が出土しているのは、1地点(不動窟の23年度調査)である(図42)。弥生土器甕の口縁部片で、口縁部は無文。口縁部と頸部の境に縄文原体が押捺される中期前半～中頃のものである。縄文時代前期と同様に、窟が利用されていたことは証明できない。

しかし、窟が利用されていたことを推定するには至っていない。

中期では、28年度に調査した白山社及び駒形根神社(駒形5、若井原194-1地点)で遺構の掘り込みを行っていないにもかかわらず多くの遺物(土器《深鉢、無頸壺?》、土偶、石器《篋状石器、尖頭器、石匙、凹石》、写真6、47～50)などが出土しており、竪穴住居を中心に、土坑、ピット群からなる比較的規模の大きい集落が営まれていたことが判明した。出土した土器は、深鉢のキャリパー形の器形、渦巻文を施した中空把手、橋状把手、渦巻状突起、横S字状突起などの装飾、器面に貼り付けられる無調整の細隆線、沈線・隆線による施文などの特徴から、中葉段階(大木8a式期)の特徴を示している。23年度に白山社及び駒形根神社(駒形5地点)の7号土坑からも同じ時期の遺物が出土している。

その後、後期～弥生時代前期の遺物は確認できていない。

現在までのところ、後期および古墳～奈良時代の遺物は確認できておらず、次に人々の活動の痕跡があらわれるのは平安時代(9世紀後半)になってからである。

(山川)



写真 47 白山社及び駒形根神社 (駒形5・若井原 194-1 地点) 出土縄文土器 (1)



写真 48 白山社及び駒形根神社 (駒形5・若井原 194-1 地点) 出土縄文土器 (2)



写真 49 白山社及び駒形根神社 (若井原 194-1 地点) 出土土偶



写真 50 白山社及び駒形根神社 (駒形5・若井原 194-1 地点) 出土石器

2 古代・中世の遺物

(1) 古代

骨寺村荘園遺跡において、弥生時代につづく年代の遺物は、大きく時を隔て、平安時代のものである。古墳時代から奈良時代にかけての遺物は確認できていない。

平安時代の遺物が出土したのは、2地点あり、丘陵の裾部と斜面に1地点ずつある。伝ミタケ堂跡のある北側丘陵の西端、その山裾に接する部分である要害194-1・194-2地点で柱穴のひとつから土師器片1点、遺構外から土師器片、須恵器片が各1点出土した。土師器2点はいずれもロクロ成形の甕の胴部片で、9世紀後半頃のもの、須恵器は外面に格子状のタタキ目がある甕の破片で9世紀頃のものと思われる。

平泉野台地丘陵の頂部である「ドウジヤマ」の南東の裾に接する沢の西側の斜面中腹にある若井原

(2) 中世

中世の遺物が出土したのは、2地点あり、どちらも丘陵の裾部である。遠西遺跡では、Y115-2地区上段で遺物包含層から、かわらけ片1点(図43-2)、遺構確認面からかわらけ片1点(図43-1)が、また同地区下段のY115-2SK(土坑)1検出面直上で常滑三筋壺片1点(図43-3)が出土した。かわらけ片はどちらもロクロの小型かわらけとみられ、1は12世紀後半、2は13世紀頃とみられる。常滑三筋壺片は底部から体部下半の破片で12世紀後半のものである。

常滑三筋壺は八重樫忠郎氏が提唱する陶磁器の「平泉セット」を構成する遺物のひとつであり(八重樫2002b)、陸奥国の12世紀の遺跡からの出土例は多い。しかし、そのほとんどは経塚や墳墓からであり、ほぼ完形品が埋納された状態で出土する。しかし、平泉遺跡群(平泉町)をはじめとする、手づくねかわらけ・白磁四耳壺・渥美刻画文壺を合わせた「平泉セット」が揃って出土するような遺跡

188地点では、内面が黒色処理された土師器片2点と須恵器の甕とみられる破片1点が出土した(図9、写真7)。土師器は2点ともロクロ成形、内面にミガキがある体部片、須恵器はロクロ成形の肩部片である。これらの器種は、10世紀後半には大きく減少するものとされており(井上1997)、当遺物は9世紀後半から10世紀頃のものと思われる。

骨寺村荘園遺跡では、遺物量が非常に少なく、陸奥国で10世紀後半以降に食膳具の組成の主体となる土師器は確認されていない。なお、花粉分析からは10世紀頃から本格的な稲作が始まったと想定されている(平塚他2012)。開発の始まりは9世紀後半頃であったとみられるが、そこから12世紀に中尊寺経蔵別当領となるまでの様相は不鮮明である。

では、宴会儀礼における酒器としても使用されたとみられており、破片での出土例が多い。遠西遺跡で出土したのは、底部片のみであり、12世紀のロクロかわらけ片も出土していることから、小規模ながら宴会儀礼が行われていた可能性がある。

また、梅木田遺跡では、遺構外からであるが、龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗片が1点(図43-4)出土している。13世紀中頃から後半のものである。

文治五年(1189)、奥州合戦により奥州藤原氏は滅亡した。『吾妻鏡』文治五年九月十日条には、中尊寺経蔵別当心蓮が源頼朝の宿所に参上し、所領の安堵を求めたことが記されている。そこで骨寺村は、改めて経蔵別当領として四至を定められた上での存続が認められた。中尊寺文書によれば、その後室町時代まで経蔵別当領として相伝されている。

骨寺村荘園遺跡で出土した中世の遺物量は少なく、それに伴う遺構も確認できていない。これらの遺物が出土した地点は丘陵の裾部にあたり、中世

から近世、さらに現在に至るまで一貫して屋敷があり、人々の生活が営まれているエリアである。そのため、中世に属する遺構の抽出が困難であるが、今後、このエリアについてもさらに発掘調査を行

い、『陸奥国骨寺村絵図』に田とともに描かれている、いわゆる「在家」とみられる屋敷の痕跡についても、確認する必要がある。

(二階堂)

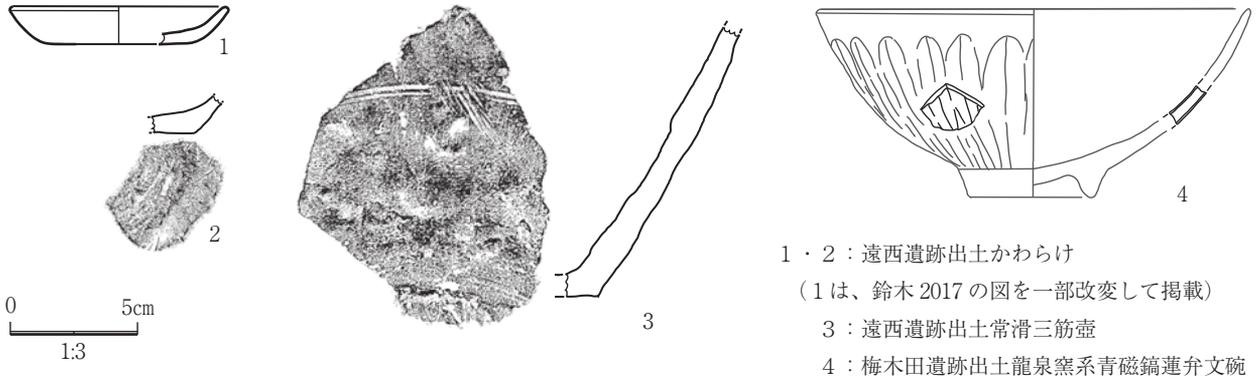


図 43 中世の出土遺物

3 近世の遺物

骨寺村荘園遺跡において、近世の遺物量は、10地点で約200点と、それ以前に比べて大きく増加する。本寺においては、17世紀半ばの新田開発や木工品など山野を利用した生産力の向上により、住民が増加したことが指摘されている（竹原2009）。出土遺物の増加は、これを反映したものとみられる。出土地点は、白山社及び駒形根神社の中川4・6地点、駒形8-1地点（駒形根神社境内）、若井原194-1地点、平泉野遺跡の若井原194-115地点、梅木田遺跡、遠西遺跡、不動窟、慈恵塚及び大師堂（拝殿）の慈恵塚頂部、要害194-1・2地点である。

中でもまとまった量が出土しているのが梅木田遺跡で、142点の近世陶磁器が出土した。その多くが17・18世紀のものであり、産地は肥前が多く、大堀相馬が少数、産地不明（在地？）のものが僅かにある。器種は壺・碗・皿が多く、小杯や猪口、播

鉢等があり、いずれも日常雑器である。梅木田遺跡と本寺川を挟んで南西の平泉野台地丘陵の山裾に位置する中川6地点でも29点の近世陶磁器が出土しているが、同様の産地、器種で構成される。これらは、近世の村落遺跡ではごく一般的な様相である。

その他、不動窟、慈恵塚では、寛永通宝などの近世銭が多数出土している。不動窟では、窟の入口近くから新寛永（寛文八年〔1668〕初鑄）3点、古寛永銅一文銭（寛永十三年〔1636〕初鑄）1点、合わせて寛永通宝4点が出土した。慈恵塚では頂部にある石祠の玉垣の土台石材下の表土層から寛永通宝（新寛永）11点、仙台通宝（天明四年〔1784〕初鑄）5点が出土した。近世（18世紀以降）にこれらの遺構が信仰の対象であったことを示すものとみられる。

（二階堂）

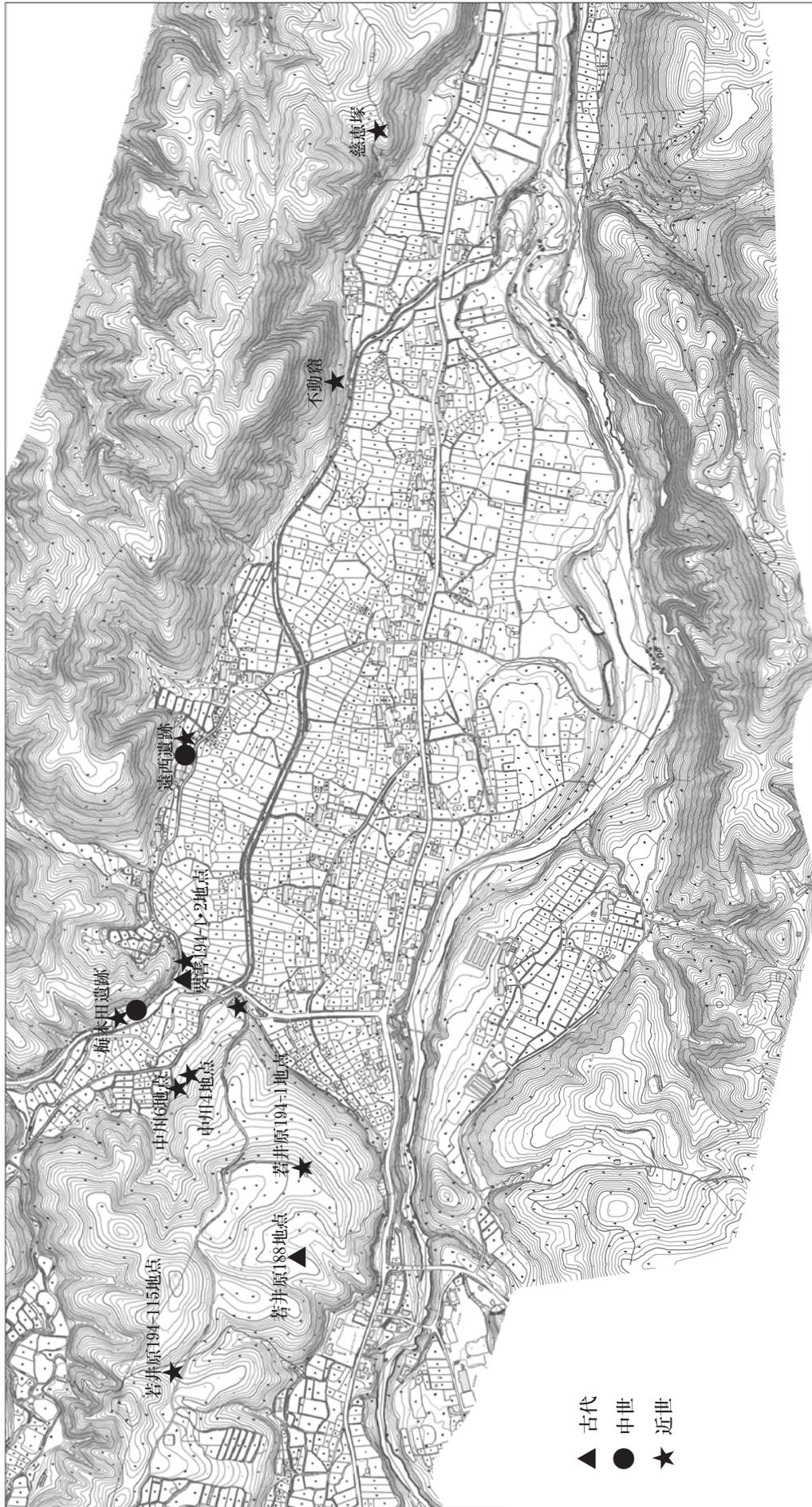


图 44 骨寺村莊園遺跡における時代別遺物出土地点位置図 (2)

4 「陸奥国骨寺村絵図」と骨寺村荘園遺跡の照合

はじめに

平成7年(1995)に国指定重要文化財となった「陸奥国骨寺村絵図」は、詳細絵図、簡略絵図の2枚が存在する。骨寺村は、中尊寺経蔵別当領として相伝されてきた。しかし奥州藤原氏滅亡後、平泉周辺に所領を得た葛西氏と境相論が発生した。そこで中尊寺側が、骨寺村は経蔵別当領であることを裁判で主張するため、証拠として絵図を作成したと考えられている。

(1) 山王窟

山王窟は、『吾妻鏡』文治五年(1189)九月十日条にある、源頼朝により定められた骨寺村の四至で西の境界である。『陸奥国骨寺村絵図』の詳細絵図では「山王石屋」、簡略絵図では「山王」と記され、いずれも正面(西)の「駒形根」の手前に重なる山稜の一部に描かれている。

性格は、その名称から「日吉山王権現」を祀った窟と考えられ、この神が比叡山延暦寺の地主神であることから、天台宗との深い関わりを想定できる。特に、中尊寺に山王と白山が鎮守として勧請されており、それらが骨寺村にも存在することは、中尊寺が骨寺村を重要視していた証拠のひとつであると考えられる。

(2) 白山社及び駒形根神社、平泉野遺跡

白山社及び駒形根神社は、本寺の平野部を取り囲む西側丘陵の東側に位置する。この丘陵は「平泉野台地」と呼ばれており、『陸奥国骨寺村絵図』では、上部(西側)に描かれた重なる山並みの最前列にあたりとみられる。詳細絵図では丘陵の左(南)側に一際大きな礎石らしき丸印の並びとともに「骨寺堂跡」、中央よりやや左(南)に小さな点の並びとともに「房舎跡等也」、中央よりやや右下(東の山裾)に社のような建物の絵とともに「六所宮」の文字がある。簡略絵図では丘陵の左(南)

一関市教育委員会は、8年度に骨寺村荘園遺跡の調査に着手し、11年度から発掘調査を継続して実施している。目的は、『陸奥国骨寺村絵図』の現地である本寺地区の絵図に描かれた田圃、在家、宗教施設の痕跡を確認することである。ここでは、17年に国指定史跡「骨寺村荘園遺跡」となった9カ所を中心に(絵図に描かれない要害館跡を除く)、絵図と調査結果を照合していく。

山王窟の発掘調査は行っていないため、構築年代は不明である。また、窟内部に古代から中世の年代を示す遺物は残存していない。そこで平成28年度に窟内部とその周辺の地形測量を実施した。山王窟には大きく分けて3つの窟があり、そのうち日吉社が設置されている窟1には、奥の祭壇に一躯の石仏が安置されている。窟1の北西上方に位置する窟2には、寛政十三年(1801)の石碑があり、中尊寺大長寿院が山王御宮を再造したことが刻まれている。

現状と史料の記載からみて、この窟が『陸奥国骨寺村絵図』に描かれる「山王窟(石屋)」であることは疑いないであろう。

側に礎石らしき丸印の並びとともに「白山」、そのすぐ左側に「骨寺跡」の文字、中央に一際大きな礎石らしき丸印の並び、さらにその右側に社のような建物の絵とともに「六所宮」の文字がある。また、「白山」と「骨寺跡」をそれぞれ示すとみられる丸印の並びの間には、一際高く表現された丘陵の頂部に「堂山」の文字がある。標高251mの「平泉野台地」丘陵の頂部は地元で「ドウジヤマ」と呼ばれ、絵図の「堂山」にあたり、とされている。

白山社及び駒形根神社周辺は、骨寺村の名前の

由来と考えられる「骨寺(堂)跡」があるのではないかと指摘されてきた。そのため、たびたび発掘調査を実施してきた場所である。また平泉野遺跡は、史跡としての白山社及び駒形根神社の東側に隣接する遺跡であり、これまでの調査で白山社及び駒形根神社とともに、平泉野台地の様相を一体的に検討してきた。しかし、「骨寺(堂)跡」の痕跡や、現在の社殿がある駒形根神社・白山社の前身となりそうな遺構は確認できていない。出土遺物からも、経蔵別当領であった証拠は見つかっていない。縄文時代の遺物は多数確認され、集落が営

(3) 梅木田遺跡

梅木田遺跡は、主要地方道「栗駒衣川線」と本寺の平野部北側を取り囲む丘陵の裾を東西に走る市道との交差点から、主要地方道沿いに北へ約140mの山裾、標高約180mのところを位置する。地元では、「ウメノキタ(ウメノキダ)」と呼ばれ、屋敷があったという伝承があり、安永四年(1775)に書かれた磐井郡五串村の『風土記御用書出』に記載のある「一梅木田屋敷 壹軒」にあたるものと考えられる。

平成12年度の調査で直径約1mに及ぶ柱穴が確認できた建物1が、『陸奥国骨寺村絵図』の詳細絵図に描かれた中央やや右上の方形水田と在家屋敷に関係するのではないかと考えられた。

24年度以降の調査の結果、丘陵の裾部を段切りして平場を造成していること、段切りと平場の接点に区画溝が掘られ、段切り造成の下段平場を活

(4) 伝ミタケ堂跡

『陸奥国骨寺村絵図』の詳細絵図には、右上(北西)の丘陵に礎石らしき丸印の並びとともに「ミタケアト」と書かれ、簡略絵図には「金峯山」、その脇に「ミたけたうよりして山王の岩屋へ五六里之程」と書かれている。この記述から、ミタケ堂という施設があったこと、簡略絵図のほうが詳細絵図よりも古いことが明らかとなっている。

平成24・25年度に、堂跡の可能性が指摘されて

まれていたことははっきりしている。ほかには、平安時代、江戸時代の遺物が僅かに出土したのみである。

残念ながら、発掘調査によって絵図との照合ができる成果を挙げるには至っていない。しかし、丘陵の広大な面積に比して、発掘調査が行われたのはごく僅かな面積であり、簡略絵図の「白山」「寺崎」「堂山」が現在も地名や建物として存在することを考えれば、未調査区に痕跡が存在する可能性は十分にある。

用し、掘立柱建物と柱列、区画溝などからなる居住域(屋敷)としていることを明らかにした。

これらは、大別3時期(古い順に1・2・3期)にわたる変遷が追える。3期に属する建物4を構成するP203の掘方埋土、建物2を構成するP205の掘方埋土から近世の肥前産磁器碗?、1期に属する溝9の埋土から17世紀末から18世紀末の肥前産陶器皿が出土していることから、いずれの時期も近世である(前述の建物1は2期に属する)。

こうしたことから、調査成果から絵図との照合はできない。しかし、排土からではあるものの鎌倉時代中・後期(13世紀中頃～後半)の中国龍泉窯系産の青磁鎬蓮弁文碗の体部片が出土したことは、骨寺村荘園遺跡の中世を考えるうえで重要な資料といえる。

いた平場とその下の平場の発掘調査を実施しているが、いずれも遺構、遺物を確認することはできなかった。そのため、調査成果から『陸奥国骨寺村絵図』にある「ミタケアト」や「みたけたう」との照合はできない。

(5) 遠西遺跡

遠西遺跡は本寺の平野部を取り囲む北側丘陵の中央よりやや西寄りの山裾、標高170m程のところに位置する。『陸奥国骨寺村絵図』の詳細絵図には、北側の山裾に在家屋敷とみられる建物が数軒描かれており、現在でも山裾には民家が点在している。

平成13・14年に、民家の合間にある4つの平場が4段に繋がった場所に、西からそれぞれY114-1、Y115-2上段、Y115-2下段、Y79-1とした調査区を設定し調査を実施した。その結果、Y115-2地区上段の遺物包含層からかわらけ片1点、遺構確認面からかわらけ片1点、同地区下段のY115-2SK(土坑)1確認面直上から常滑三筋壺片1点が出土した。そのほか、Y79-1地区で東西11.5m・南北8.8m、東西4間・南北4間以上の掘立柱建物などを確認した。特に出土遺物は12～13世紀のもの

みられ、かわらけ片、常滑三筋壺片とも、権力者が儀式や宴会で使用した可能性がある。同様の遺物は、平泉遺跡群からも多量に出土している。このようなことから、出土したかわらけ片や常滑三筋壺片は、平泉を通じてもたらされたものと考えられる。しかしながら、遺構外から出土したものであり、その年代の遺構の抽出まではできていない。

一方、年代は不明ながら掘立柱建物も確認できていることから、絵図に描かれた屋敷の特定には至らないものの、中世から現代に至るまでこの場所での土地利用が続いているものとみることができ。さらに、遠西遺跡周辺の景観は、絵図が描かれた時代とさほど変化がないといえる。12～13世紀の遺物を確認できたことは、大きな成果である。

(6) 若神子社

『陸奥国骨寺村絵図』の簡略絵図では、絵図の下半部分、「檜山河」(本寺川)と「中澤」の間に南北に通る「道」の脇に「若神子神田二段」の文字があり、その傍に社とみられる建物が描かれている。現在若神子社と伝えられている場所の位置は、本寺川より東側の平野部の中にある点で、簡略絵図と概ね一致する。

境内には石の祠が4基あり、北側のほぼ中央に最も大きな祠があり、覆い屋が造られ若神子社として地権者により管理されている。

(7) 不動窟

『陸奥国骨寺村絵図』の詳細絵図では、右下(北東)の平野部に張り出した丘陵に「不動石屋」の文字がある。その左側(南)には本寺川が流れ、馬坂新道がその背後(東)を通るように描かれている。

不動窟と伝えられる洞窟は、本寺の平野部を取り囲む北側丘陵の北東部、やや南側に向かって張り出した部分の中腹、標高180m付近にある。入

平成16年(2004)に発掘調査を実施した。若神子社の東および南に3本のトレンチを、境内地の東側及び南側の水田に合わせて12本のトレンチを設定した。その結果、地山に川原石の層があり、本寺川の旧河道あるいは氾濫の痕跡の可能性を指摘できるものの、その他に遺構・遺物は確認できなかった。

現地は若神子社と呼ばれているが、調査成果から絵図に描かれる社が若神子社であるかどうかを言及することはできない。

口の幅は約3m、高さ約3m、奥行きは約9m程で奥に行くにつれて低く狭くなる。平面形は若干湾曲しており、自然の洞窟を利用したものとみられる。本寺川の北側の丘陵中腹にはこれ以外に洞窟はなく、絵図の「不動石屋」であるとしてよさそうである。

平成23～25年度に、不動窟の内部と前面で発

掘調査を実施した。入口の西側前面の岩盤がテラス状の緩斜面になっており、そこに柱穴が穿たれ、何らかの施設が設けられていた可能性があることがわかった。しかし、その施設の構築年代は不明である。

(8) 慈恵塚及び大師堂(拝殿)

『陸奥国骨寺村絵図』のうち、詳細絵図には「大師堂」の文字と建物の図、簡略絵図には「慈恵塚」「御拝殿」の文字と建物の図があるが、これらは墨色や筆致の差異から後世に書きこまれたものである可能性が指摘されている(大石1997)。大師堂拝殿は明治以降に建立されたものと考えられており(一関市博物館2014)、そうであるとすれば絵図への加筆はそれ以降に行われたことになる。

慈恵塚には慈恵大師の髑髏が埋められた場所、という伝承があり、これは鎌倉時代の『撰集抄』にある「慈恵大師白骨女人授法花事」の説話が基になっている。また現在、慈恵塚の傍には安永五年(1776)に中尊寺弘台寿院別当代延寿院覚天が建てた『慈恵大師塚碑』が建っている。その碑文には覚天が『撰集抄』を読んで逆芝山にあった塚が慈恵大師の髑髏が埋められた塚であり、それが村名の由来であることを発見した、という内容が記されている。これらの記載から、本寺地区の塚と『撰集抄』の慈恵大師伝承が結び付けられたのは近世後期であったと考えられる。

慈恵塚本体は、東西約10m、南北約8mの楕円形で、最大比高は約2.2mあり、表面に石が葺かれている。その頂上には石祠があり、周りには玉垣状に石材が組み、頂部へ登る石の階段もある。平成22年度に、塚の表面に組み込まれた石材を一時取り外し、地形測量を行った。地表面の観察により、

(9) その他の地点

『陸奥国骨寺村絵図』の詳細絵図においては、平野部には神社以外に在家を示す建物や田の絵が多数描かれている。地元の伝承や地名、屋号等を参考に、居住の可能性のある山裾や微高地を対象に

遺物は縄文・弥生時代のもののほかは、近世銭が数点出土しているだけで、古代から中世のものはない。しかしながら、近世以降の地誌では一貫して「不動窟(石屋)」として認識されており、窟への信仰は連綿と続いてきたものとみられる。

塚の周囲には溝とそのさらに外側に高さ約0.6mの周堤が廻ることを確認した。周堤は雨水により削られ、東側の一部は重機により壊されている。塚の周囲に組み込まれた玉垣の土台石材の下の表土層から近世陶磁器片が出土していることから、玉垣、石祠、階段はこれ以降に構築されたものと考えられるが、塚本体の構築年代はこれより古い可能性がある。その他、塚とその周辺に対し電気探査および地中レーダー探査を行った。その結果、塚の中央部の深度1m前後の位置に金属ではないものが埋納されていることが推測された。

塚本体については、年代、性格等は未詳である。その規模や形状は、陸奥で12世紀後半に多く築かれた大規模なマウンドと周溝を持つ経塚と共通する(関根2009)。また、奥州藤原氏は交通の要衝に多く経塚を築いたとされており(八重樫2002a)、吉田敏弘氏のいうように骨寺村への入り口の象徴として、その場を選んで築かれた可能性がある。

絵図に描かれた慈恵塚は後筆の可能性があるが、調査成果からは12世紀から存在した経塚であったと考えられる。

また、詳細絵図には「馬坂新道」が「不動窟」の後ろを通り北側丘陵を越えていくように描かれているが、その脇に後筆と指摘される大師堂がある。「馬坂新道」と「慈恵塚」の関係は不明ながら、その付近を通っていた可能性もある。

発掘調査を行っている。本寺の平野部において行われたその他の発掘調査の成果の概要について、地域ごとに記載する。

駒形85-1地点は本寺川に隣接して南側、地元で

は「レイタ(禮田)」と呼ばれる場所である。「レイタ」について、『陸奥国骨寺村絵図』の簡略絵図の中心近くに「霊田二段」の文字が、『骨寺村在家日記』にも「れい田」の記載があり、それらと関連する可能性がある。現水田耕作土の下から掘立柱建物の柱穴と柱根の残存を確認した。出土遺物はなく、年代は不明である。

要害194-1、194-2地点は、伝ミタケ堂跡のある北側丘陵の西端、その山裾の水田である。柱穴、土坑を確認した。柱穴のひとつに柱材が残存しており、放射性炭素年代測定(AMS法)を行った結

おわりに

これまで発掘調査を継続して実施した結果、多くの成果が積み重なっている。特に、梅木田遺跡から出土した龍泉窯系青磁鎚蓮弁文碗片、遠西遺跡から出土したかわらけ片、常滑三筋壺片は12～13世紀の遺物であり、平泉を通じてもたらされたと考えられる。

発掘調査では12世紀の遺構は確認できていないものの、現状確認調査や踏査も含めて考えると、『陸奥国骨寺村絵図』に描かれた山王窟や不動

果、15世紀末～16世紀のものと想定された。また、柱穴のひとつから土師器片1点が出土したほか、遺構外から土師器片、須恵器片、近世磁器片が各1点出土した。土師器2点はいずれもロクロ成形の甕の胴部片で9世紀後半頃のもの、須恵器は外面に格子状のタタキ目がある甕の破片で9世紀頃のものと思われる。

掘立柱建物、柱穴、柱根の確認といった調査成果は、絵図に描かれる建物の具体的な特定に至らないものの、建物の存在を間接的にはあるが照合していると考えられる。

窟は照合できるといえる。また、本寺地区北側の山裾に点在する民家の景観も、絵図が描かれた時代からさほど変化していないと考えられる。

今後の課題としては、「骨寺(堂)跡」や白山の存在を発掘調査によって明らかにすることが挙げられる。発掘調査はここで区切りを迎えるが、今後も継続した調査を実施する予定である。

(菅原)

【参考文献】(骨寺村荘園遺跡確認調査報告書を除く)

一関市博物館2014『小さき杜に坐す神』

伊藤信1957「辺境在家の成立—中尊寺領陸奥国骨寺村について—」『歴史』第15号 東北史学会.

井上雅孝1997「陸奥における10・11世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』第7号 北陸古代土器研究会.

入間田宣夫2014「骨寺村絵図に描かれた駒形根と六所宮について(覚書)」『一関市博物館研究報告』第17号 一関市博物館.

岩手県立博物館2010『病をいやす〜くすり・まじない・神だのみ』岩手県文化振興事業部.

大石直正1984「中尊寺領骨寺村の成立」『東北文化研究所紀要』第15号 東北学院大学東北文化研究所.

大石直正1997「陸奥国骨寺村絵図絵図[在家絵図][仏神絵図]」『中世荘園絵図大成』第一部 中世荘園絵図の世界 河出書房新社.

大石直正2004「Ⅲ 絵図研究の成果」『骨寺村荘園遺跡』一関市教育委員会.

菅野成寛2009「[陸奥国骨寺絵図]の宗教史 窟信仰と村の成り立ち」『季刊 東北学』第21号 東北芸術工科大学東北文化研究センター.

黒田日出男1995「陸奥国中尊寺領骨寺村との対話—描かれた東国の村と境相論—」『描かれた荘園の世界』新人物往来社.

國學院大學1997「中世骨寺村絵図の歴史地理学的調査(第6次)」.

佐藤弘夫2008『死者のゆくえ』岩田書院.

島田直明2012「Ⅲ. 骨寺村荘園遺跡の植生・植物相—特に丘陵地の植生」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』骨寺村荘園遺跡自然調査研究班.

鈴木弘太2017「遠西遺跡から出土したかわらけ」『平成28年度骨寺村荘園遺跡村落調査研究総括報告書』一関市博物館.

関根達人2009「北奥の一世紀一堂ヶ平経塚の検討—」『平泉文化研究年報』第9号 岩手県教育委員会.

竹原万雄「中山間地、骨寺村の生活 近世・近代への展望」『季刊 東北学』第21号 東北芸術工科大学東北文化研究センター.

土井宣夫2012「Ⅱ. 地形地質」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』骨寺村荘園遺跡自然調査研究班.

中野晴久ほか2012『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常滑系』愛知県.

平塚明・島田直明・吉木岳哉・吉川昌伸2012「Ⅳ. 一関巖美町本寺地区岩井川左岸の旧河道における花粉分析」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』骨寺村荘園遺跡自然調査研究班.

誉田慶信1999「要害館と法福寺」『中世骨寺村調査報告書 絵図の骨寺村を探る』美しい本寺推進本部.

松井吉昭2000「陸奥国骨寺村絵図—聖地を描く絵図—」『荘園絵図研究の視座』東京堂出版.

八重樫忠郎2002a「東北の経塚 - 分布傾向からの考察 - 」『平泉文化研究年報』第2号 岩手県教育委員会.

八重樫忠郎2002b「平泉藤原氏の支配領域」『平泉の世界』高志書院.

吉田敏弘1999「骨寺への道」『中世骨寺村調査報告書 絵図の骨寺村を探る』美しい本寺推進本部.

吉田敏弘2008『絵図と景観が語る 骨寺村の歴史〜中世の風景が残る村とその魅力〜』本の森.

抄 録

ふりがな	ほねでらむらしょうえんいせきかくにんちょうさそうかつほうこくしょ							
書名	骨寺村荘園遺跡確認調査総括報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第22集							
編著者名	菅原孝明・二階堂里絵・山川純一							
編集機関	一関市教育委員会							
所在地	〒021-8501 岩手県一関市竹山町7-2 TEL 0191・21・2111(代)							
発行年月日	2017年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほねでらむらしょうえん 骨寺村荘園	いちのせきしげんびちょうあざなかがわ 一関市巖美町字中川ほか	03209	NE72-2283	38° 58' 33"	140° 57' 31"	19990801～20010331 20051201～20080330 20111031～20161214	10,064㎡	内容確認調査
うめのきだ 梅木田	いちのせきしげんびちょうあざなかがわ 一関市巖美町字中川	03209	NE72-2253	38° 58' 47"	140° 56' 56"	20001003～20010331 20130709～20160630	3,161㎡	内容確認調査
とおいし 遠西	いちのせきしげんびちょうあざようがい 一関市巖美町字要害	03209	NE72-2269	38° 58' 42"	140° 57' 23"	20010910～20021225	2,800㎡	内容確認調査
ようがいたて 要害館	いちのせきしげんびちょうあざようがい 一関市巖美町字要害	03209	NE72-2372	38° 58' 43"	140° 57' 34"	-	-	3D地形測量
ふどうのいわや 不動窟	いちのせきしげんびちょうあざしもまさか 一関市巖美町字下真坂	03209	NE82-0306	38° 58' 33"	140° 57' 58"	20110926～20130705	30㎡	内容確認調査
じえづか 慈恵塚	いちのせきしげんびちょうあざしもまさか 一関市巖美町字下真坂	03209	NE83-0015	38° 58' 26"	140° 58' 27"	20100401～20110331	-	現状確認調査
へいせんの 平泉野	いちのせきしげんびちょうあざわかいはら 一関市巖美町字若井原	03209	NE72-2297	38° 58' 43"	140° 56' 21"	20090928～20110331 20150727～20161214	864㎡	内容確認調査
なかやしき 中屋敷	いちのせきしげんびちょうあざおきようがい 一関市巖美町字沖要害	03209	NE82-0217	38° 58' 29"	140° 57' 25"	19990928～19991228	112㎡	内容確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
骨寺村荘園	荘園	縄文、中世、近世	竪穴住居、柱列、柱穴、土坑、溝、炭窯、礎石状石材、池状遺構、集石遺構、焚火跡、段切り造成、塚	縄文土器、土偶、石器、土師器、須恵器、陶磁器、近世銭				
梅木田	集落跡	縄文、中世、近世	掘立柱建物、柱列、柱穴、溝、土坑、畑耕作痕	石器、土師器、中国産青磁、陶磁器				
遠西	集落跡	中世、近世	掘立柱建物、柱穴、井戸、土坑、溝	常滑三筋壺、かわらけ				
要害館	城館跡	中世	郭、空堀					
不動窟	散布地	縄文、弥生、近世	柱穴	縄文土器、弥生土器、近世銭				
慈恵塚	塚	中世、近世	塚	碑、陶磁器、近世銭				
平泉野	散布地	縄文、平安、近世	塚、段切り造成、溝	縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器				
中屋敷	集落跡	近世	掘立柱建物、柱列、井戸	古銭？				

岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第22集
骨寺村荘園遺跡確認調査総括報告書

発行 平成29年3月24日

編集・発行 一関市教育委員会
〒021-8501
岩手県一関市竹山町7-2
電話 0191・21・2111 (代)

印刷 川嶋印刷株式会社
〒029-4194
岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原21
電話 0191・46・4161 (代)